
遊戯王 LEGENDs ～伝説の名の元に～

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 LEGENDS ～伝説の名の元に～

【Nコード】

N1158Y

【作者名】

廃棄人形

【あらすじ】

俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行ったり、遊戯王やったり、デュエルモンスターズやったり、決闘したり……………。

今日も、久し振りのチャンピオンシップ…………通称CSに出掛けるところだった。

突如聞こえる声。

次々と倒れる皆。

そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

眼を覚ました俺の前に居たのは、ブラマジとブラマジガールだった――。

『遊戯王 僕らの進んで行く道』と並行して連載することになりました。

向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思ってますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

—— 事実は小説より奇なり。

真っ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。そういえば……あの小説、今良いところだったんだよね。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行った言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの……私の話、聞いてる?』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとうございました」

ビバ、現実逃避

遊戯王チーム、LEGENDS・伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動っていつても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称CSに出向き、デ

ユエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。
メンバーは俺含めて4人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人気が分割されてた。

「あゝ……ねみい」

せのハジメ
瀬野基。耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。

俺が初めて会った時は、凄く荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう？」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ！ とは言わないし言われもしないだろう。

たきがわユキヒト
瀧川幸仁。長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのCSだもんね」。僕も楽しみで眠れなかったよ！」

はせヶケイ
コイツは長谷部慧。中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合うんじゃないだろうか。

何故か走らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「んなことより、早く行こうぜ？」

そして俺、いちのせトウヤ一ノ瀬燈夜。メンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダーやってます、ハイ。

……そりゃ、自覚してるけどさっ。3人みたいに顔が良いって訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみょ……良く鈍感って言われるし……あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」

「……自分が情けなくなっ……つか、ちけえよっ！」

「あぁっ」

なんでそんなに残念そうなんだ！？

そんなんだからマン研（マンガ研究会……という名の腐女子の集まり）にネタにされんだよっ！ 無駄に絵が上手いのがさらにム力つく！

……閑話休題。何言っただか、俺。

『——やっと、見付けました』

「……え？」

声。無駄にイケメンボイスの音が、脳内に響く感じで聞こえてきた。

……とうとう俺も厨二病か！？

「誰だっ！」

と思ったら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。

基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至っては、何故か俺に抱きついてるし。

「皆にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だった」

「だな……」

「うん……」

…… 4人全員聞こえたって事は、ただの厨二病の症状じゃないってことだよな……一体何なんだ？

『私たちの為に、戦って欲しいのっ！』

「うわっ！？」

こ、今度は女性の声……！？ しかも、どこかで聞いたことのあるような……！？

頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

——基が、ばたりと倒れた。

「基っ！？」

そして、幸仁が。

「幸仁……！」

最後に、崩れていくかのように俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなって——。

次の瞬間だった。

頭が少しずつぼーっとしていく感覚。身体力が無くなっていく感覚。

数分後。

その場には、誰も居なかった。

「別れの言葉は、要らないよな……」（後書き）

『遊戯王 僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております！！

「…………現実逃避して良い？」

「…………え？」

——ここ、どこだ？

朝なのか昼なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめると、山や海、ガラクタの詰まれた場所……様々なところが見える。

……俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだろつ。若しくは夢だ、間違いない。

そう思っ
て俺は頬を抓る。捻^{ねじ}るように引つ張った。

「…………ひたひ」

馬鹿な……そうか、これは痛みのある夢なんだ！

『お目覚めですか』

「うひゃあっ!？」

だ、誰だっ…………!？

視線を後ろにやると、誰も居ない…………訳も無く。半透明で、且つ宙を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

…………。

「夢だ…………目の前に《ブラック・マジシャン》が居るなんて夢だ…………っ!」

通称BM。アニメでパンドラって奴が使ってたギャル風BMじゃなくて、普通の……普通のって言うのも変だけど……武藤遊戯が使ってたBMだ。

つまりは……マハードだ、うん。

『おはよう、マスター♪』

「……は？」

……え。まさか、そんな。

ブ……………！

「《ブラック・マジシャン・ガール》！？」

『マナって言いまゝす！』

にっこり。あ、可愛い。

じゃなくて！ え、つまりどういうこと！？ つか、その服、カードで見てた時もエロいなあ、なんて思ってたけど……実際見るともっとヤヴァイ……！！

「やっぱ……夢だ……」

しかし、夢でもブラック・マジシャン・ガールBMGに会えるなら別にこのままでも……げふん、げふん。

『夢では有りません』

「いやいやっ！ これが夢じゃければ、何が夢なんだよ！？」

『ん、将来の夢？』

……間違っではないけどさ。

「……万が一……万が一、これが夢じゃないとしたらさ……なんで俺を呼んだんだ？」

『マスター……燈夜殿には、世界を救って頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う？」

そりゃ、アニメではそんなこと起こってたけどさ。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からないだね。なんか突然、色んな世界が崩れ始めちゃって……既に2つ、滅んじゃった世界もあるし』

は……滅んだ世界？ 世界ってやっぱ複数あったのか？ 小説を書いてる身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思ってたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるってことは、その世界に住んでいた人たちは死んじゃったってことだ。

残念ながら、BMとBMGの表情は重い。とても嘘を吐いているようには見えなかった。

「マジ……なんだよな？」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界はデュエルモンスターズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じゃないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精霊界ってところだろう。アニメで見た風景よりもちよつと違うけれど、BMたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいなデュエルモンスターズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじゃない方なんだろう。

そして、何よりも……BMは言った。世界を救って欲しい、と。

原因が分からないのに世界を救って欲しい……ってことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよ。マスターなら世界を救ってくれる、って！』

「……買い被りすぎだろ……ん？　なあ、つーことは慧たちも……？」

『彼らも世界を救ってくださる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちではございませんが』

ってことは、あいつらもこの世界のどこかに……。俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんとに、夢とかじゃ無いんだよな？」

『うん、夢じゃないよ？』

「……………はあ」

おーけー、夢じゃない。信じよう。BMGが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。

ただ……信じる代わりに一言言わせてくれ。

「……現実逃避して良い？」

『駄目です』

即答だった。

アニメで相棒や王様、勿論霸王とかが居た世界とはまた違う世界。俺は《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》……もとい、マハードとマナの導きによってこの見知らぬ世界に降り立った。

観衆の元じゃなくて良かった……なんて安堵の息を零す。

あ、そうそう。

BMやBMGの名前はアニメで出たマハードやマナだけど、王様
が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が
別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。

それはともかく、マハードとマナは真正正銘、俺が初めてのマス
ターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲1つ無
く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。

ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかに揺れる。

「そついや、慧たちもこの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年!？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は4ヶ
月前、慧殿は2ヶ月前に来ています』

……そうなのか。

はあ……しつかし、やっぱり夢じゃなかったんだな……。

改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターズが中心
の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付
けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。

……カードショップだらけって……競争が激しそうだなあ。

「さて……これからどうすつか………」

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

このままじゃ、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きゃっ………！」

「ん………？」

女性の声………？

きよろきよろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「……………」

連れ込まれた………？

助けに行かなきゃ、という気持ちと怖い、という心が交差する。

俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりゃ、助けたいさ………けど、“昔”とは違うんだ。“昔”みたいに無鉄砲じゃないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そうだよ………普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

——こんな身体になっちゃって……。

「俺は………」

——燈夜に愛される資格、無くなっちゃった。

「……………」

——バイバイ。

「……チイツ！」

何、迷ってたんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞっ！？

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まってしまうそうになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、3人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に4つのデュエルディスクが転がっている。

1つはピンク色だし、女性のやつだろうか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切られ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えた。

プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よお……楽しいことしてんじゃねエの？」

基みたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なっ、なんだお前……!？」

「んなもんでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけたな、てめえら」

「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか？ 最後なら別に良いぜ？」

茶髪がそう言つと、身体と口を押さえられている女性の顔がさらに絶望の色へと染まっっていく。

「なら、俺も混ぜてもらっかな……」

近付く。片手で女性を触ろうと、俺は手を――。

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはっ!？」

「て、てめ……がつ!」

「ぐふっ……!？」

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻っ柱をグーで殴る。ざまあ見る。

俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きょとした表情の女性は少し可愛らしいけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「大丈夫？」

「は、はい……」

「そう、良かった。立てる？」

コク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。
ピンク色のディスクを持って、女性に差し出す。

「これ、君の？」

「そ、そうです……」

それを持って、路地裏から脱出しようと歩を進める。

「ま、待てよ……」

「あ、あ？」

やべ、スゲエ殺気立った声出た。

茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がっていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、展開させていた。

「おい、デュエルしろよ」

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかった……。しかもアニメだと、主人公が言う言葉だしな……。

つか、アレか？ デュエルで自分たちが勝ったら女を置いてけとか、そんな感じ？ そんなんぜってーヤダね。

とは言え……。

（ここ、遊戯王が主な世界なんだよなあ……仕方ない）

「ごめん、俺、デュエルディスク持ってないんだよね……借りて良い？」

「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が——」

「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と」

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな………それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かった。

俺がこの世界に持って来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけど、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによって勝手にシャッフルされる。LPが4000と表示され、その下にあるランプが光った。

……4000？ マジで？ 無いわー。

………それにしても。

（………何、このランプ？ 充電切れ？）

「チッ、先攻はお前かよ………」

「仕方ないじゃんか。あっちのターンランプが光ったんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじゃない？」

………ご説明どうも。

んじゃま、

「デュエルっ！ ——って言えばよっ！！」

………あ、すみません。

「……現実逃避して良い？」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメディって難しいッス。

誰かおせーて（泣）

感想、評価等お待ちしております！

「……初めて、だったんです」

「えと……俺のターン、ドロします。スタンバイ、メイン入りします」

「あの……何言ってるんですか？」

「へ？」

……えつと、言うの、変？

うう……地球じゃこれが普通だったしなあ……アニメみたいにデユエルすれば良いんだよな？　ってことはアレか、効果とかも説明するのか？　たるー……。

「《熟練の黒魔術師》を召喚しま……召喚！」

「……アイツ、なんか変じゃね？」

気にするな。

「《魔法族の里》を発動！」

おお、フィールド魔法は横に差し込む場所があったのか。そういやアニメでもそうだったな。

辺りに木々が生い茂る。魔法使い族モンスターが住む舞台が整った。

「自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事が出来ない」

「ちっ……厄介だな」

まあ、デメリットで相手が魔法使いを召喚したり、俺の場に魔法

使いが居なくなったりしたら意味なくなるんだけどな。特に後者だと、俺が魔法を発動出来なくなっちゃう。

ちなみに、この時《熟練の黒魔術師》に魔力カウンターが乗る。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター 0 ↓ 1 .

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

「俺のターン、ドロー行けっ!」

元気良いな。俺に殴られたからか、鼻の辺りは赤いけど。

「《ジェネティック・ワーウルフ》召喚!」

おお、純粹に強い。

下級通常モンスターでは今のところ、最高攻撃力を持っているモンスターだ。

……ちなみに、遊戯王カード Wiki でこのカードを見ると、もしかすると女性かもしれないって書いてあるんだから面白いよな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

「ううん……いいや。俺のターン、ドローっ!」

ライフ……4000だろ? あれ、つか何で攻撃しなかったんだ? 伏せカード警戒? 俺なら攻撃するのに……まあ、プレイン
グは人それぞれだしな。

……一言言っと。

……結構チキン?

「あの伏せ……気になるから、割りに行かかね。俺はまず、速攻魔
サイク

法発動！ その伏せカードを対象にする！」

「チツ……リアクティブアーマー《炸裂装甲》が」

……《炸裂装甲》？ 《次元幽閉》じゃなくて？

……まあ、良いけど。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター1↓2・

うーん……このまま熟練の効果使いたかったけど……ライフ40
00だし、別に良いか。

「リバースカードオープン、ディメンション・マジック速攻魔法！ 自分フィールド上に魔法
使い族モンスターが存在する時、自分のモンスター1体をリリース
して手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

……説明って疲れるなー、ったく。

「《熟練の黒魔術師》をリリースし、《ブラック・マジシャン・ガ
ール》を特殊召喚！」

『はい！』

はあ、癒される……。

なんて思っていたけれど、驚いた様子で女性、金髪に赤髪、茶髪
がマナを見つめている。

……茶髪、いつの間に起きたんだ？ 三沢みたいなエアーマンだ
な、お前。

「ど、どうして《ブラック・マジシャン・ガール》が……？」
「……なんか悪いの？」

「ぶ、《ブラック・マジシャン・ガール》は伝説のカードです！
世界で1枚しか作られていないカードですよ……！」

え……デッキに2枚入ってるけど。

「偽者が……？ いや、偽者じゃあディスクが反応するわけねーし
……」

偽者なんて失礼な。

「まあ、気を取り直して……さらに《ディメンション・マジック》
の効果は続く！ お前の場に居る《ジェネティク・ワールフ》
を破壊する！」

「チツ……」

良し、これで相手の場はがら空きだな。

「行くぞ、マナー！」

『はい！』

「魔法カード、《賢者の宝石》！ 自分フィールド上に《ブラック・
マジシャン・ガール》が存在する時、手札またはデッキから《ブラ
ック・マジシャン》を特殊召喚出来る！」

「え……まさか、《ブラック・マジシャン・ガール》と同じ伝説の
カードまで……？」

……ブラマジもか。デッキに3枚投入してますけど、何か？

「来い、マハードっ！」

『はっ！』

やべ、デュエルディスク使ったのデュエルって楽しい！ テンション上がるな、コレ！

場にブラマジとブラマジガールの師弟が並ぶ。ソリッドビジョン？ で見るとスゲエ……良い！！

「バトルっ！ マナで相手プレイヤーに直接攻撃！ —— 黒・魔・導・爆・裂・破——！」

「うあああああっ！」

金髪LP4000↓2000.

「トドメ！ マハード……！ —— 黒・魔・導——！」
「あああああああああああああっ——！！！」

金髪LP2000↓0.

「……大袈裟じゃね？」

しかし、本当に気絶しているらしい男たち3人を見て、俺は凄くスカッとした気分になった。

「……ふわ」

なんて間抜けな声が出てしまうくらい、今、俺が居る家は大きかった。

それこそ、アニメや漫画、後はTVの中でしか見た事が無いくらい大きな屋敷。庭もかなり広いし、メイドや執事も大勢。つまりは、

「君って、お嬢様だったんだな……」
「そんな、お嬢様なんて……」

その屋敷の中の一室。

無駄にふかふかなソファに座って、俺は驚きに顔を歪めている。向かい合う形で座っている襲われていた女性はふるふると首を振った。

「私の事は結姫^{ユウヒ}って呼んでください」

「じゃあ、結姫……さん？」

「呼び捨てで構いませんよ、燈夜さん」

……それはそれで、緊張するなあ。

彼女の名前は咲^{さき}之^{のみ}宮^{みや}結姫^{ユウヒ}。この世界ではかなり有名な企業の三女らしい。アニメで言う海馬コーポレーションとかだろうか。

「本日は、本当にありがとうございました……！ あのままだったら、今頃……」

「気にすんなって。当然だろう？」

とか言って、最初はビビりまくりだった俺。けれど、目の前に居るのは凄^{すご}い美少女だ。格好付けたくなるのは当然……だよな？

ピンク色の髪はセミロングくらいの長さで、凄^{すご}くさらさらしてる。

蒼い瞳は宝石のように綺麗で、ずっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうだ。

ドレスの上からでもスタイルは良いし……なんつーか、凄い美人だ、うん。

「それでも……本当に、なんとお礼を言ったら良いか……」

……まあ、気持ちは分らないけど。

けど、最初は見捨てようとしたくらいだし、ちっと罪悪感がなあ……ごめん、結姫さん……もとい、結姫。

「あのっ、今日は泊まって行きませんか!？」
「はっ？」

この子、突然何をつ？

「お礼したいんです。今日はたっぷりお持て成しさせてください!」
「いや……ほら、ご両親に迷惑だし」

「大丈夫です。この家は私個人の物ですから、父と母は住んでおりません!」

……それ、もっと拙ますくない？

「それとも……迷惑、ですか？」

う……そんな小動物みたいな顔をされたら……。

「お、お言葉に甘えようかな」
「はいっ!」

…………断れないって。

凄く嬉しそうに笑顔を浮かべる結姫、ちょっとドキツとした俺。
勿論、それは秘密だけれど。

——それから、凄く大変だった、と言付けしておく。

使用人ではなく結姫が作った料理は……正直、美味しいと言うにはちょっと……なんつか、个性的だったし、結姫の部屋で一緒に寝よう、と言われて一悶着あったし。

何より、かなり大きな風呂に俺が入って少ししたら、背中をお流ししますとか良いながら結姫が入って来るんだもんな。勿論、バスタオル1枚を羽織っただけの姿で。

……アレは焦った。

そして、夜。俺は結局、結姫の押しに負けて彼女の部屋に居座っていた。

現実では始めて見る天蓋付きのベッドに、ピンク色の絨毯。幾つかぬいぐるみも置かれており、なんつか、ちょっと豪華なところ以外は“普通”の女の子の部屋だった。

妙にドキキしながら部屋のベッドに腰を下ろしながら待っていると、コンコン、というノックと共に部屋の扉が開く。

「お、お待ちせしました……」
「……うう」

当たり前だけど、パジャマ姿だ。黄色いパジャマに身を包み、風呂に入ったせいか頬が紅潮した結姫の姿は……かなり、可愛いし、色っぽい。

俺は無意識にも顔を背けてしまう。

「じゃ、じゃあ寝るか！」

俺はその緊張感に耐えられなくなって、結姫より先に布団の中に潜ってしまう。勿論結姫の場所を空けてだが。

力チ、と電気が消される。俺は結姫に背を向ける形で横になっていると、その背中にふにょん、と柔らかい感触が……………。

「ゆっ、結姫!？」

「温かいですね……………」

あ、当たってる当たってる……………！ 何がと言わないけど、マシユマロの山が2つ……………！！

「……………今日は、本当にありがとうございました」

「べ、別にそれは気にしなくて良いって……………」

「私、人に助けて頂いたの……………初めてなんです」

……………え……………？

「天下の咲之宮家……………カード業界や勿論、経済や政界など様々な業界に手を伸ばしている家柄……………姉2人は才能があつたのか、ほとんど力を付けていきました」

まあ、俺はまだ咲之宮家がどれだけ凄いのか分からないけど……………それでも、相当凄いんだろうなあ、と曖昧には分かる。

「……………妹も、最年少のプロデュエリストとして、活躍しています……………それなのに私は……………アカデミアに入学しても、妹には全く勝……………」

てませんし……姉2人にも、置いてきぼりで」

「……………」

「私、捨てられたも同然なんですよ。実際、姉や妹は実家で暮らしていますし……私はこの屋敷を与えられて、複数の使用人と共にここで住め、と……」

気が付くと、結姫の声が震えているような気がした。身体も小刻みに震えていて、それが背中を通して俺に伝わっている。

プレッシャー、もあるんだろう。

大きな家に生まれ、育ち、これからも生きていく……その上でのプレッシャーは、俺なんかには想像出来ないものなんでしょう。

「今日、私が襲われていた時……心の奥底で思っただんです。ああ、これも良いかな、って」

「は……？」

「このまま襲われてしまえば、自殺する理由が出来るなあ、って……」

俺が借りてるパジャマが湿り始めた。

泣い、てる……？

「……初めて、だっただんです」

結姫の腕が俺の身体を抱き締めるように回り込む。脚も絡めて来て、俺の結姫の身体が完全に密着した。

「誰かに、助けて貰うのは……初めてだったんです……！　まるで

……心の蟠わたかまりが溶けて行く感じがして……」

「ねえ、結姫」

俺は結姫の言葉を遮って、口を開く。

「敬語、止めて良いよ」

「え……？」

「無理、してるだろ？ 俺はもう、お前の友達なんだからさ……気兼ねなんてしないで良いって」

「燈夜……さん」

「名前も、呼び捨てで良いし。な？」

上半身を起こして、まだ少しだけ湿っている結姫の頭を撫でる。
なるべく優しく、優しく。

「とう、や……」

「何か困った事があれば俺に言え。出来る限りの事はしてやるよ。
友達……だもんな？」

「ふ……うええ……」

ちよつとクサかったかな、なんて思ったけど……どうやらこれで
良かったみたいだ。

俺の胸に抱き付きながら、大きな声で泣き崩れる結姫の頭を優しく
撫でてやりながら、俺は暫くそのまま居てやる。

窓からは、満月の光が俺たちを覗き込んでいた。

「…………初めて、だったんです」（後書き）

小説って、難しいですね…………（汗）

……………やっぱりプロットを録に作っていないからツライのか。

ヒロインの人数さえ決めてないしねっ
↑

感想、評価等お待ちしております！！

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

「あ、おはようございます、燈夜さん！」

「ん……おはよう、結姫」

翌朝。

珍しく……というか初めて鳥の囀りなげで眼を覚ました俺がリビングに行く、既に起きていたらしい結姫の出迎えを受けた。

そっぴゃ、使用人方が居ない……違う部屋とかかね？

「朝食、出来てますよ」

「ありがとう。……ところで、君が作ったの？」

「い、いえ……。私が作ると……その、美味しくなかったですし」

あ……気付いてたんだ。

なんて思ったけど、口には出せずにあはは、と空笑いしておく。

メイドさんが作ったという豪華な朝食の前に俺と結姫は腰を下ろす。

「「頂きます」「」

ほぼ同時に食事前の挨拶をして、箸に手を伸ばした。

「ん、美味しい！」

「はい。私のとは大違いですよねっ」

……結構ショックだったのか、お前？

「……今度教えて貰いましょう」

………頑張れ。

ちなみに、昨日の夜、口調は砕けて良いよ、とは言ったけれど……昔からこの口調だったからか、最早これが素なのだという。また、呼び捨てだと何故か落ち着かないらしい。姉妹ならともかく。

「さて、と」

朝食を美味しく頂いた俺は、んゝ、と伸びをして立ち上がる。隣に浮かぶマハードとマナに視線を送る。

「んじゃ、行くかな」

「え……もう行ってしまうんですか？」

食器を運んでいくメイドさんたちを尻目に、俺はああ、と頷く。

「あの……失礼ですけど、どこに行くか……聞いて良いですか？」

「え？ あゝ……」

マナに視線を送ると、視線を逸らして頬を掻いていた。んにゃろう……。

「……分かんね。行く場所無いし……適当に歩き回るんじゃないかなー」

この世界にや勿論、親や家があるはずも無いし……行く当ても無い。マハードやマナも、正直今のところは役立たず、って感じだからなあ……。

……せめてもうちょっと準備して欲しかった、うん。

「な、ならっ……!」

「へ? 何?」

顔を輝かせて近付いてくる結姫。

えと……?

「わ、私と一緒にアカデミアへ行きませんか?」

——説明をしてもらうと。

今、結姫が通っている第壹デュエルアカデミア^{かしど}櫛都校という場所に通っているらしく、今は春休みなんだとか。

後1週間程度で寮に戻るらしいんだけど、その際、俺も編入者として一緒に行かないか、というもの。

「いや、俺、金も持ってないし……学費とか寮費? とか払えないんだよね……それに、経歴とか無いから編入は難しいと思うよ?」

「大丈夫です。第壹校は咲之宮家が設立しましたから、例えば私でも顔は利きますよ」

「……………」

え、何それ怖い。

なんて冗談は置いといて、俺は本気で迷う。

全寮制で、食事や部屋は勿論出てくるし、結姫の話によると島に建っているらしく、アカデミア内でアルバイトをする事も可能だとか。

成績も上がれば学費免除、とかで結姫の迷惑にもならなくて済むらしいし……何より。

……今の俺、家無しの上に無一文……うわ、情けねエ。

「えと、じゃあ……お願いします」

「はいっ！」

ホント、いつか恩返ししなきゃな……。

そんな事を思いながら、俺はにっこりと笑っている結姫に苦笑を浮かべたのだった。

——手続きとかは私がしておきますっ。私はとにかく、燈夜さんに恩返しをしたいんです！

なんて握り拳を作りながら力説されてしまったら、俺は何も言い返せない。俺としては、一晩ふかふかのベッドで眠らせてもらった、美味しい食事を貰っただけで充分なんだけどな……。

そんな事を言ったら、結姫はまた色々言葉を並べて否定するだろうから黙っておいた。

——俺は只今、町を探検中であります。

ちゃんとここに帰って来てくださいね、と念を押されながらも町へと繰り出した俺は、色んなカードショップを見て回りながら進んでいた。

「…………なあ」

『どうしたの、マスター？』

俺の声に反応したのは、マナだった。というより、基本的に俺の傍に居てくれるのはマナらしい。マハードはたまにしか出て来てくれない。

…………閑話休題。

「…………もしかしてこの世界って、」

『シンクロやエクシーズは無いよ？』

「……………ですよね」

白いカードや黒いカードは勿論、チューナーさえも無いんだからなあ…………。俺の予想は大当たりだ。残念な事に。

どうするよ…………俺のブラマジデッキ、チューナー入ってるぞ？

アーカナイトやテンペスター、ライブラなどの魔法使いシンクロモンスターしか基本的に使わないとは言え…………はあ。

しかも、俺は余りのカードなんて持つていない。カードを入れ替える事すら出来ないなんて…………不便だ。

「…………ん？」

テレビだ。ガラスケースの奥にあるテレビに、3人の人間が映つて、俺はふと立ち止まった。

男2人に、女1人。

銀髪に染めたガラの悪そうな男と、長い髪を結んでいる男。ショートの子…………、柔らかい髪質っぽくて結構可愛い女の子…………

………？

「は、基！？ 幸仁……！？ って、コイツも……良く見たら慧じやねえか！」

な、なんでテレビに……？ しかも慧に至っては……女装？

………ほわあい？

そっかそっか、コイツラ芸能人になったのか。慧は……あれだ、需要を狙ってとか？

『この3人、実はお知り合いとの事で集まって頂きました！ 突如^{かしこ}榎都町に現れたこの3人こそ、巷で有名なシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行う数少ない人材なのですっ！』

あゝ、成る程。そういうことが……ちなみに、言い忘れてたけど榎都町とは今俺が居るこの町の事だ。

つまりはアレだろ？ この世界に来たばかりのあいつ等は何も知らずにシンクロやエクシーズ召喚をしちまって、一気に有名になった。それがこの結果、と。

——でも……なんで慧は女装してんだ？

しかも良く見てみれば、基たちが着ているのは昨日、結姫が着ていた制服と同じだ。違うところと言えば、基と幸仁が着ているのは青だっところだけ。

……慧や結姫の制服は赤のブレザーだ。

——んで……なんで慧は女装してんだ……？

謎だ。

『この3人は今、第壹デュエルアカデミア櫛都校にて、数少ない特待生枠として選出されています!』

マジか……アイツラ、第壹校に居るのか。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

顔が自然と綻ぶ。良かった……1週間後、俺が編入する頃には会えるんだ。

俄然、やる気が出てきたぜ……! 早く会いてえな!

「チツ、たりー……」

「そう言っな、基」

「るせーよ」

街を歩く3人の男女。正確には格好だけだが。

両手をポケットに突っ込み、元来の目付きの悪さがさらに際立ちながら歩く瀬野基。

後ろで結んだ長い髪を揺らしながら、やれやれ、という感じに肩を竦める瀧川幸仁。

アカデミアの女子専用制服を着込んで、くすくす、と笑みを浮かべている長谷部慧。

「取り敢えず、今日で春休み中の撮影は最後なんだから良いじゃんね？」

「チツ……わーってるよ」

最早芸能人とも大差ない彼ら。実際は約半年ほど前、地球からやって来た人間だと知る者は居ない。勿論、本人を除いてだが。

「時間は空いちちゃったけど、皆集まれて良かったね」

「ああ、まあな」

「チームLEGENDS……“全員集合”か」

3人で笑う。温かな空気が彼らを覆った。

「これからどうするの？」

「シラネ。取り敢えず、世界の歪みの原因を探すんじゃないの？」

そうだな、と幸仁も同意する。

彼らも燈夜と同じく、精霊によって選ばれた人間達である。しかし未だに、その原因は分かっていない。

「けど、探すって言っても……どうやって？」

「ンな事、俺が知るわけねーだろ。テキストに待ってりゃそっちらくんじゃね？」

「果報は寝て待て、とも言っからな」

尤も、果報では無いのだが……それは3人とも分かっているのか、それに対して何かを言う事は無かった。

沈黙が続く。

「なあ……」

その沈黙を破ったのは、基だった。

「……………なんか物足りねーんだけど」

「うん。僕もそう思ってたところ」

「……………奇遇だな」

何かが、足りない。とても大事な“何か”が……………。

しかし、考えても考えても思い付く事は無く、時は過ぎていった。

「あ、兄貴……………！」

——暫くの後、^{のち}そう言つて走つてきたのは3人の男達だった。

金色の髪をした男と、赤い髪をした男。そして、鼻の辺りにガ―ゼを貼り付けた茶髪の男だ。

「よお！」

「……………また、そういう奴らと一緒に居るのか？」

「別に良いだろ。人の勝手だつつの。じゃあな！」

手を上げて、基が去っていく。その姿を見届けた幸仁は、はあ、と深い溜め息を零した。

「変わらないね……………基」

「……………ああ……………俺も、この後父上との会談がある。ここで失礼する」

「あ、うん。じゃあね」

頷いて、幸仁も去っていく。

「やっぱり……なんか、違う」

ぼそつと呟いた慧の声は、喧騒に掻き消されていく。

——そして、あっと言う間に一週間が経過した。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」(後書き)

コメディ書こうとしたらシリアス書いてしまう……なんていう駄目作者。

廃棄人形というハンドルネームもあながち間違いない(汗)

感想、評価等お待ちしております！

「――は？」

――第壱デュエルアカデミア櫛都校。

特待生枠、5人。今は慧たち3人しか居ないらしいが……それはともかく、かなり有名なアカデミアらしく、時折テレビや雑誌に載ることも多いらしい。

咲之宮家が設立し、早数十年。学費や寮費もそれなりに安く提供していて、且つ設備も良くプロデュエリストやアイドルデュエリストを幾人も出している功績から、今やこの世界で一、二を争うアカデミアだという。

そんな結姫の説明を受けて、俺ははー……としか言い返せなかった。

執事服に身を包めた格好良い男性に乘せて貰い、俺と結姫は第壱校へと向かう。

「そついや、第壱校って階級みたいのあるのか？」

「階級、ですか？」

アニメのGXだと、オシリスレッド、ラーイエロー、オベリスクブルーに分かれていたからなー。後半はともかくとして、前半のレッドの扱いは酷かった。

特にブルーと教官、クロノスの差別にはアニメながら腹を立てたものだ。

「ありますよ。第五位から第零位まで」

「……ごめん、説明お願い」

アニメとは違うんだな……世界が違うし、当たり前だけど。

「はい。一番下の階級が第五位でして、順に第零位まで上がっていきます。基本的にはデュエルモンスターの成績によって上下致しますが……家柄などでいきなり第一位、または第二位になることがあるので……」

浮かない顔でそう告げる結姫。確かに、そういうのはヤダな……。

「ちなみに、お前は何位なんだ？」

「私は第二位に属しています。学園長には第一位を薦められたんですけど、私は実力で上がりたかったので」

「へー。俺もそうしたいな」

コネとかで階級を上げる奴って、なんか性格悪く感じるんだよね……。

その点、俺は結姫みたいなやつは好きだ。俺みたいな奴に言われてもキモイだけだろうから言わないけど。

ちなみに、その階級によって寮とかも変わるらしい。制服は変わらず、男が青、女は赤らしい。俺も既に制服に着替えているけど、まだちょっと違和感がある。

ま……そのうち慣れるだろ。うん。

「あ……もうすぐ着きますよ」

虎島校長……悪いけど俺、その名前を聞いて少し笑ってしまった。だってアレだぜ？ アニメGXの校長の名前が鮫島だし……え、まさか狙った？ まさかここまで似てるとは思わないだろ、うん。と、初対面の人に失礼な事を考えながら俺はアカデミアの説明を受ける。

……もう結姫に教えて貰った事ばかりだけど。面倒ったらありやしないな。

「——ここまでが大まかな説明だ。分かったかい？」

「え？ あ、はい……ありがとうございます……」

「そうか、良かった。君は第五位からのスタートになるが……」

構いません——そう言おうとした時だった。

部屋の扉がノックされた。虎島校長がどうぞ、と許可を出すと扉が静かに開いた。

「失礼しやーす」

「……失礼します」

「失礼します」

3人の声。ダルそうに欠伸をしながら中に入ってくる男性が1人、物静かに入ってくる男性1人、そして赤い女生徒用の制服を着た人1人……。

「基！ 幸仁！ それに慧！！」

そう、その3人だった。

「あ？」

「よ、元気だったか！？ 良かった、この学校に皆が居てさ。実はちょっと不安だったんだよね……」

結姫が居てくれたとは言え、彼女は階級が違う上に性別も違う。例え同じ階級になれたとしても、男性寮と女性寮に分かれてしまうだろう。

そうになると、どちらにせよ結局は“独り”で頑張る事が多くなってしまう。

と、なると――。

俺はやっぱり、皆に再会できて良かったな、って思う。

そう、俺が安堵の息を漏らしている時だった。
女性用の制服を着た慧が、首を傾げる。

「……………君、誰？」

「――は？」

あれ、俺の聞き間違い……………か？ それとも人違いかな？

「えと、ごめん……………瀬野基に瀧川幸仁……………長谷部慧、だよな？」

「……………何故俺たちの名前を知っている？」

「いや、だって……………え？ じゃあ、その……………地球から来たんじゃない――」

いきなりだった。

俺の言葉を遮るように、基が俺の胸倉を掴む。そして……………まるで

仇でも見るかのような鋭い視線を俺にぶつけた。

昔の基を思い出す、冷たく悲しげな視線……！

「テメエ……なんでそれを知ってやがんだ、あア!？」

……やっぱり、基たちは地球……日本から来たんだ。俺と同じで。

「……冗談、だよな？ ほら、基ってさ……幼馴染居たろ？ 中学ん時にやんちゃしてる時も、ずっと傍に居てくれた……幸仁は大学生の彼女が居て、すっげー大事にしてる……慧、お前は男だろ……？ 高校に入っすぐ、電車の中で痴漢されてさ……泣いてただろ?。」

まさか、という不安が胸中を支配する。基は俺の胸倉から手を離して、鋭く睨み付けながら口を開く。

聴くな。

そう制止が脳内で響くも、俺の耳朵は基が発する震動をキャッチする。

低い……それこそ、針のように俺の心臓を抉るものに近い言葉の棘……。

「……テメエ、何モンだ?。」

——棘が、心臓を突き刺す。

「僕の性別も知ってるなんて……それに、なんでそこまで詳しいの?。」

「それは……」

「怪しいな」

怪しい……そう呟いた声に反応して、基がはぁん、と口元を歪ませる。

「デメエ、アレじゃねーか？ 精霊どもが言ってた世界の歪みってのを引き起こす存在ってのは」

「はぁ！？」

「成る程な。一理ある」

ねえよっ！

そう反論しようとしたら、後ろですつと傍観していたらしい虎島校長の制止によって止められた。

……空気読め。

「どうやら、君たちには何かしらの事情があるみたいだが……悪いがこれでお開きにして貰いたい。もう少しで式だ」

「……チッ」

確かに、結構な時間が経っている。

第壱校では、教室が1つしかない。そこに全ての階級の生徒が集まり、様々な式や講義を受ける事になる。

尤も……アカデミアが行うデュエルトーナメントとかを行う場合はデュエル場で開会式が行われるらしいんだけど。

「……では、1つ提案が御座います、校長」

「何かね、瀧川君」

相変わらずの長い髪。幸仁は一步前に出た。

「本日の新期式にて、1つの余興をしてはどうでしょう？」

「余興、と？」

「はい。我々、特待生の誰か1人と……本日からこのアカデミアで過ごすという彼のデュエルです。聞けば、咲之宮家のご令嬢のお知り合いらしいですし……良い見世物にはなるかと思われます」

ちえ……相変わらず、ぺらぺらと言葉が続くな、こいつ。

「成る程……それは良いかもしれないな」

「……僕がやるよ。僕にやらせて欲しい」

そう言って手を上げたのは、慧だった。

「……分かりました。それでは、それでやって貰いましょう。それで宜しいかな、一ノ瀬君」

「——ああ」

相手は慧、か。

俺という存在が忘れられていた事に心が揺れながら、俺は小さな声で返事をした。

基、幸仁……慧でさえも、俺のことを敵対視する視線に耐え切れず、俺はそそくさと部屋を出たのだった。

新期式……新たな季節と学期の境目を告げるその式を目前にと迫っていた俺は、ギスギスした雰囲気のまま慧たちに案内され、第五位の寮に到着した。

オシリスレッドの寮よりも小さな建物は、風呂もトイレも共同らしい。その上ワンルームで、物も殆ど置けない。

……今にもゴキブリとか出てきそうだな。

敷かれていた布団の上には2着の制服と黒いデュエルディスク。それと連絡手段のDP。決してデュエルポイントではなく、デュエリストフォンの略である。しかし、生徒全員にDPが支給されるなんて、リッチだなあ……なんて思ったり。

俺は元々着ていた私服を脱ぎだす。すると、何故か後ろに残ったままだった慧が顔を背けた。

(……相変わらず、だな)

日本に居た時も、俺が着替える時は極力視線を逸らしていたのを思い出す。しかも顔を赤くして。だからマン研のやつらに……略。

制服に身を包んだ俺は、携帯大のDPをポケットにしまい、黒いデュエルディスクを左腕に嵌める。カチッ、という音を確認すると、制服のベルトにデッキの入ったケースを差し込んだ。

——良し。

「……んで、テメエは何モンなんだよ？」

待つてくれていたのか、俺の準備が終わると同時に基が口を開く。

「……………さあな」

「ああっ！？ 調子乗ってツとぶち殺すぞッ！」

まったく、相変わらず柄悪いな、基は。

俺はそんな姿に溜め息を零しそうになりながら、制服のポケットに両手をつ込む。

「俺は一ノ瀬燈夜。お前らと同じで地球からやって来たんだよ」

「一ノ瀬エ？ んな奴、聞いたことねーな……………なんで俺たちの事知ってんだよ」

——やっぱり、記憶が無いのか。しかも俺のことだけ。

うは……………めげそう。

こんな事態、マハードやマナは知ってたのか？ 知ってたとしたら、教えてくれても良かったのにな……………。

「なんで、って言われてもな……………」

……………言っても良いのか？ 言ったら思い出すかもしれないし……………迷う。

と、脳内で考えていると、頭に直接響くような声が聞こえる。マハードの声だ。

『言わない方が良いかと思われます。彼らは今、燈夜殿の事で頭が混乱しています。その上、貴方がご学友だと言えば、さらに頭を痛ませる原因になりかねません』

ふむ……………一理あるな。

俺の頭が痛くなりそうだけど……………まっ、コイツラの為だ。

「お前ら、結構有名だったぜ？ 色んな大会で上位に君臨してるしな。遊戯王チームLEGENDsの名前って、外国にも名前を轟かせてたし」

これは嘘じゃない。パソコンで検索を掛けたら、かなりの数が出てきたんだからビックリだ。

「成る程な……しかし、何故基の幼馴染の事や……俺の恋人の事も知っていた？」

げ、そのまま流してくれよ……面倒だな、ったく。

「いや、俺ってLEGENDsの大ファンだったんだよね。言わばストーリーカー？ お前らが住んでる町まで行って調べちまったんだよ。ゴメンっ！」

軽蔑するような慧の視線が俺に突き刺さる。痛い、痛いって。それこそ汚物でも見るような眼差しだ。特に基の殺気なんてスゴイ。ただ、全く変わらない幸仁の視線が実は一番怖かったりするんだよね……はは。

「……そうか。では、俺たちは先に教室へ向かっている。じゃあな」
「ついて来んじゃねーぞ、ストーリーカー」
「……………それじゃあ」

冷たい瞳のまま、3人は部屋を出て行く。結局、慧が女生徒の制服を着ている理由を聞けなかった。

『マスター……』

「……わりい、ちょっと1人にして」

耳鳴りがした。

「——は？」（後書き）

毎回毎回、話のタイトルで頭を悩ませます……。

そういえば小説書いてる方は、曲聴きながら書いてます？

私はWALKMANで大音量っていうwww

ただ、友達は集中出来ない（歌っちゃう）から聴かないみたいです。

皆さんはどちらですか？？

感想、評価等お待ちしておりますよ！

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」

……新期式。最早俺にとっては入学式と言っても良いソレを受けながら、俺は内心溜め息を零しながら思う。

……………どこの世界も、校長の話って長いんだな。

かれこれ30分は経っているんじゃないかと思うほどに長い口上が並べられている。良くもまあ原稿も無しにそこまで話せるもんだ。場所はこのアカデミア唯一の教室。

階級ごとに分けられた席順だが、非常に面白い事に、第五位は俺しか居ないらしい。周りは空気だ。三沢的な意味ではなく、本当に。しかも一番前の列だから、寝る事も出来ない。

「……………たりー」

つい小声で呟いてしまうほどには、俺の気は削がれていた。

正直これっぽっちも興味が湧かない虎島校長の話は無視して、俺は教室を視線だけで巡らす。

壇上に居る校長と教卓。その背後には巨大なスクリーンが天井から吊られている。妙に近未来的な学校だ。教科書やノートなんて物も無く、席には備え付けのノートパソコンが置いてあるんだから。

ちなみに、このノーパソはDPを掲げる事によって識別番号を認知し、その人個人の情報が表示される。

……DPを落としたら大変だな。

んで、その校長から少し離れた場所に居る優男風の男性。若いけれど、あれで教頭先生らしい。地球の時のイメージが大きいから、

凄く違和感。

その教頭先生の隣に特待生の3人——慧、基、幸仁が並んで立っていた。

さらに離れて、生徒会長や生徒会副会長など。

一段上がって、後ろの列には誰も居ない。本来ならその列も第五位の生徒が使うはずだからだ。

そのまた一段上がると、第四位の生徒。そこから2段上がって、一番数が多いという第三位の人たち。

（以外と女性、多いんだな……）

さらに上……ここからは流石に確認すると、校長たちにバレル。

けれどその辺りは第二位のはずだから、結姫はその列のどこかに居るはずだ。

……後で挨拶しないとな。

「——では、私の話はこれで終わりにする」

ふう……やつと終わったか。

「虎島校長、ありがとうございました。それでは……ここで、催し物を用意致しました」

——催し物？　ってなんだ？

——なんかのイベント……？

——今までこんなのがあったか？

そんな声が後ろから聞こえてくる。

「まずは本日より第壹デュエルアカデミア櫛都校に編入した人を紹介します。どうぞ、前へ」

「あ、はい」

うわ……結構緊張するな。CSの表彰式に上がった時よりも緊張する。

まだデュエル動画撮ってた方が良いな、こりゃ。

「えと……一ノ瀬燈夜、です。第五位からのスタートになりますが、皆さんに追いつけるように頑張りたいと思います。宜しく願います」

よし、結構良い印象与えたんじゃないか……？

なんて頭を下げながら思ったけど、拍手が疎らだ。それこそ、多くて5人くらい……？

顔を上げる。

……本当にすくねえ。

結姫は大きく拍手してくれている。けれど、それ以外俺に拍手で出迎えてくれているのは2、3人くらいだ。

なんか……もしかして、皆暗い？ 人の事言えないかもだけどさ。

「今回の催しは、彼と特待生の1人、長谷部慧さんとデュエルしてもらう事です」

生徒会長（らしき人）がそついうと、慧が一步前に入る。

最近久しく見ていなかった真剣な眼差しが俺に突き刺さる。と同時に、何故か教室内に居る男子たちに殺気が出てきた気がする。

「……どうして？」

……もしかして、アレか？ 慧って人気者？

「それでは、デュエルスタンバイをお願いします」

「あ、はい」

おおっ！ 教卓が床下に沈んでく！

面白いなー。

なんて感想を持ちながら、俺はある程度距離を置いて横側に付いているボタンを押してディスクを展開する。

黒いスリーブに入ったブラマジデッキをディスクにセットすると、勝手にシャッフルされた。

5枚引く。充電切れ……もとい、ターンランプ？ が光った。

「始めよう、一ノ瀬さん——デュエル！」

「で、デュエル！」

は、恥ずい……。

——彼を一目見た時、僕は妙な懐かしさを感じた。

漆黒の髪に黒耀のような真っ黒い瞳。正直、容姿は良くも悪くも無く、平凡。咲之宮家のご令嬢と知り合い、という幸仁の言葉も少し……信じ難い。

けれど彼は、“何か”ある。僕はそう直感していた。

「えと、俺の先攻で良いんだよね……ドロー！」

彼は僕たちと同じ、地球の日本から来たらしい。もしも同時期にこの世界へ飛ばされたのだとしたら、環境から見て、代行天使や暗黒界とかの可能性が高い。

用心しないと。

「——うし。俺はまず、《魔導戦士ブレイカー》を召喚！ このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを1つ置く。それに伴って、攻撃力もアップ！」

《魔導戦士ブレイカー》 魔力カウンター0 ↓ 1 ATK 1600
↓ 1900 .

ブレイカー……かつて禁止カードにもなった、汎用性のある閻魔性、魔法使い族モンスター。

確か昔の選考会で、採用率が1位だったんだよね。

けれど色んなデッキに入るとは言え、これで代行天使や暗黒界の可能性は下がった……かな。

「ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

……まだ基や幸仁には敵わないけれど、これでも第一位の特待生。それに、

「ストーカーさんには、負けられない……！ 僕は《召喚僧サモンプリースト》を召喚！ このカードは召喚した時、守備表示になる！ そして、手札の《古のルール》を捨てて、デッキから《E・HERO プリズマー》を特殊召喚！」

今、手札に上級モンスターやそのサーチカードはない。

僕はスカートのポケットの中に入っている一枚のカードに手を伸ばす。

「そして、プリズマーの効果を発動！ エクストラデッキの《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキより、その素材の1枚……《E・HERO ネオス》を墓地へ送る！」

——このカード、欲しいのか？

——ま、俺は使う気ねーし……やるよ。

——コレを機に、お前も遊戯王始めないか？

ちくつ、と……微かな痛みが僕の頭を襲う。

「……僕は、LV4の《召喚僧サモンプリースト》と《E・HERO プリズマー》をオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……！ エクシーズ召喚！ 《ダイガスタ・エメラル》ッ！」

「うあ……やっぱりか」

特殊召喚されるエメラルの周りには、緑色の球体が2つ飛び回っていた。

「――念の為、知らない人が居る可能性もあるので説明しておきます。彼女……長谷部慧さんや瀬野基君、瀧川幸仁君はかの伝説のカード、《E・HERO ネオス》、《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンレッドアイズ・ブラック・ドラゴン、《真紅眼の黒竜》ラゴンを使用しています。そして且つ、謎のシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行えるのです！」

歓声が沸き起こる。恥ずかしいなあ、もう……。

一ノ瀬さんも流石に苦笑しているようだ。

……気を取り直して。

「エメラルの効果を発動！ このカードのエクシーズ素材を取り除き、僕は墓地に存在する効果モンスター以外のモンスターを1体、特殊召喚する！ 来て！ 《E・HERO ネオス》！！」

出た……このデッキのエース！

——うん。僕もやるよ……——君！

一瞬、だけど。

ネオスが僕の方を向いて、悲しげに眼を細めた気がした……見間違ひ、だよな。

「ばつ、バトル！ ネオスで、《魔導戦士ブレイカー》を攻撃！」
「うわっ！？」

軽い衝撃が一ノ瀬さんを襲う。

一ノ瀬燈夜LP4000↓3400・

「続いて、《ダイガスタ・エメラル》でダイレクトアタック！」
「く、うう……」

一ノ瀬燈夜LP3400↓1600・

「僕はカードを1枚伏せて、ターンを終了するよ」

「ふう……つたく、強くなったな……お前」

「え……？」

何かを懐かしむように、僕を見つめてくる。

「最初は苛められっ子で、俺の後ろを付いて回るだけだったお前が……なんか、すげー懐かしい」

「あ、え……？」

確かに、僕は苛められていた。女っぱいから、っていう理由だけで。

そんな僕を見かねたかのように、誰かが助けてくれて……。

あれ。

僕を助けてくれたのは、基？ 幸仁？

誰——？

「……行くぜ。俺のターン、ドロォッ！」

勢い良くカードをドロォする一ノ瀬さん。

「俺は手札から、《ガガガマジシャン》を召喚！」

ガガガマジシャン……？

「ディメンション・マジック
速攻魔法！ 俺の場に居る《ガガガマジシャン》をリリースし、
来い！ 《ブラック・マジシャン・ガール》……！！」

『れっつごー！』

「なっ……まさか、彼も伝説のカードを！？ 一体どうなってるんだあーっ！？」

生徒会長だけでなく、会場に居る殆どの人が驚いている。
それは、僕も例外じゃない。

「《ディメンション・マジック》の効果により、《ダイガスタ・エメラル》を破壊する！」
「え、エメラルを破壊？」

ネオスじゃないんだ……。

ブラマジガールが放った魔法がエメラルに直撃して、見事に粉砕する。残ったエクシーズ素材も一緒に墓地へ行った。

「魔法カード、《賢者の宝石》！ ブラマジガールが俺の場に居る時、師匠である《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！ 出て来い、マハード！」

『仰せのままに、マスター』

伝説のカード、2枚目。

魔術師の師弟が並び、会場が静まり返る。

「魔法カード、《マジシャンズ・クロス》！ 俺の場に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、1体を選択！ 他の魔法使いは攻撃できない代わりに、そのモンスターの攻撃力を3000まで引き上げる！ 対象はブラマジガール！」

『パワーアップっ！』

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK2000 ↓ 3000 .

「これが勝利の鍵だ…… 《死者蘇生》！ 俺の墓地に居る《ガガガマジシャン》を蘇生！ そして、効果を発動！ 1ターンに1度、1から8のレベルを宣言し、そのレベルになる！ 俺はLV7を宣言！」

《ガガガマジシャン》 LV4 ↓ LV7 .

一ノ瀬さんは大きく深呼吸した。

やっぱり、彼もエクシーズ召喚を……！

「なあ、慧」

「え……」

「俺、本当はこんな事、やりたくなかったんだぜ？ 目立ちたくなかったしさ……俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ。けどさ、」

《ブラック・マジシャン》とLV7の《ガガガマジシャン》が、小さな光になっていく。

「お前のネオスが、凄く辛そうだから……感謝しろよな？ 俺はLV7同士の《ブラック・マジシャン》と《ガガマジシャン》でエクシーズ！ 来い！ 《No.11 ビッグ・アイ》！」
「っ……！」

よりもよって、ソレ……！？

「で、伝説のカードだけではなく、エクシーズ召喚さえも行って見せた編入生！ 一体彼は何者……！？」

黒い光となったブラマジと《ガガマジシャン》。その中の1つが、ビッグ・アイに吸収されていく。

「ビッグ・アイの効果を発動！ エクシーズ素材を1つ取り除いて、相手モンスター1体を選択！ このターン、ビッグ・アイは攻撃できないけど……永続的に、そのモンスターのコントロールを得る！ こっちに来い、ネオス！」

ネオスが、僕のフィールドから離れていく。
遠くへ行ってしまふ。

大切なネオスが……。

「あ……」

——お前のことは、ボクが守ってやるって。だから泣くな、な？

——ボクは一ノ瀬とうや！ これからは、お前の友達だからなっ！

「とう、や……」

「《マジシャンズ・クロス》の効果は、“他の魔法使い”が攻撃出来ないだけだ。だからネオスは攻撃出来るぜ。元々、ビッグ・アイは効果を使ったターン、攻撃出来ないしな。あ、ちなみに取り除いたエクシース素材はブラマジだから、ブラマジガールの攻撃力も上がってるぜ？」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK 3000 ↓ 3300 .

「バトルフェイズ！ 《ブラック・マジシャン・ガール》で、慧にダイレクトアタック！」

『行くよー！』

「あ……！」

手が、動かない。

赤い火の玉が、僕を襲った。

長谷部慧 LP 4000 ↓ 700 .

「ネオス……行っけえ！ ——ラス・オブ・ネオス！」

『はっ……！！』

ネオスのチョップが、僕に直撃して……。

長谷部慧 LP 700 ↓ 0 .

教室内は静寂に包まれていた。

第五位の編入生に、特待生が負けたんだ。仕方ないっちゃ仕方ないけどな。

俺はデッキをケースに仕舞って、俺は仕方ないな、と言った感じで溜め息を零した。

「……………無意識に、手加減をしちまうのも……………お前の悪い癖だぜ、慧」

「手加減、とは……………」

生徒会長がマイクを通して、俺の言葉に反応する。

俺は肩を竦めて、元の自分の席に戻ろうと背を向けた。

「大方、その伏せカード……………攻撃反応型のトラップだろ。ブラマジガールが攻撃しようとしたら、視線がそのカードに向かったからな」

そもそも、実はチームLEGENDsで、俺は最弱の部類なんだ。あれを防がれてたら手札は0枚だったし、危なかっただろうな、うん。

……………もっとデッキ、改良しようっと……………。

「確かに……………《聖なるバリア・ミラーフォース》」

……………よりもよってそれですか、そうですか。

慧のデュエルディスクから確認したらしいカード。俺は小さく溜め息を零した。

と同時に、教室内の空気が和らぐ。やっぱり手加減してたんだ、とか特待生の人に勝てるわけ無いよな、とか……後、慧タンはあはあ、とか。

最後の奴、潰すか。“アレ”を。

その後。

慧が俺をずっと見続けていた以外は、滞りも無く新期式は終わりを告げた。

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」(後書き)

タイトル、タイトルが……ッ！

タイトルは後から考えるタイプなので、良いタイトルを考える人は
尊敬します(笑)

「ああ、可愛いと思うよ」

第一位、特待生寮の一室。

天蓋付きのベッドで横になりながら、長谷部慧は目を閉じていた。

——……………君、誰？

「なんで……………」

なんで、忘れちゃっていたんだろう。

新期式が終わり、数十分程度しか経っていない。デュエルディスクは外したとは言え、服装はまだ赤い制服のままだ。

「……………燈夜……………」

彼は、忘れないで居てくれた。けれど、自分たちを混乱させない為にと嘘を吐いたんだろう。

彼ならそうする。

彼は優しいから。

しかも、無自覚で……………天然なんだ。

「それに惹かれて、僕たちは燈夜の傍に居たんだよ……………」

その言葉に答えてくれる人は、居ない。

未だに基と幸仁は忘れたまま。

「特徴が無いからリーダー……………か。基は照れて、そんな事言っただけ……………本当は違うよ？」

段々と涙声になっていく。

「僕も……基も、幸仁も……君に助けられたんだから。君のおかげで、今の僕たちが居るんだから………なのに、なんで」

——なんで、忘れちゃったの？

自分に問い掛けて……答えは出てこない。

「全部……全部、思い出した。僕は——」

声にならない声で、呟く。

慧が燈夜と出会ったのは、小学生の時だった。

「お前、本当に男かー？」

「おい、服脱いで見ろよ！」

「もう、止めなよー。ケイちゃんが可哀相でしょー？」

小学校の教室。複数の子供の笑い声が木霊^{こだま}して、幼い慧の瞳に涙が浮かんだ。

喋り方も男らしくなく、仕草も女の子みたく。顔立ちが可愛らしく、身体付きが華奢で身長が低かった。

その上、明るい茶髪に綺麗なブラウンの瞳は、他の男子よりも随

分違つて見えた。

小さな子供達の間で、目を付けられるのも頷ける。
無理矢理にも脱がせる気なのか、1人の男子の手が伸びた時――。

「まったしょうもねーことしてんのか、お前は？」

慧を面白がつて見ている男子や女子たちと慧の間に割って入ってきた1人の男子。

それが、“一ノ瀬燈夜”だった。

「なんだよ、一ノ瀬。隣のクラスなんだから関係無いだろっ！」

「コイツはボクと同じ人間！ ほら、関係あるだろ？」

「は、はあ？」

何言つてんだコイツ、みたいな眼で燈夜を見付けるリーダーっぽい男子。

しかし、燈夜の言っている事自体、間違つて“は”いない。一応。

「つかお前ら、コイツが嫌がつてんのわかんねー？ だとしたら馬鹿だな、馬鹿！」

「はあっ！？ そ、それくらい分かつてるっつーの！ なっ！？」

その男子の問いに頷く後ろの子供達。流石子供、燈夜の簡単な口車に乗せられてしまった。

「分かつてるならなんで続けるんだ？」

「そ、それは……」

「クラスメイトが嫌がつてる事をやるなんてなー。あっ、もしかして馬鹿じゃなくて、大馬鹿さん？ 偉い子はそんな事しないんじゃない？」

ない？」

ぐっ、と言葉に詰まる男子。

「け、けどよ……ソイツ、男っぽくねーじゃんか。なんか、オレたちと違うっつーか……」

チク、と慧の胸が痛む。

燈夜は背後に居る慧をじろじろと凝視して、一言呟いた。

「んー？ 何が違うんだ？」

「ひゃ、ひゃひ？」

慧の頬を摘み、縦へ横へと伸ばす。どんどん変わっていく慧の顔に、なんとなく面白くなった燈夜はぶっ、と吹いてしまった。

手を離すと、頬が赤くなってしまうている。

涙目になって頬を押さえる慧にゴメン、と一言謝って燈夜は再び男子達に向かい合う。

「ボクたちとなんら変わらなくてね？」

「え……」

「まあ、確かに髪の色は明るいけどさ。んなこと言ったらボクとお前じゃ、ボクの方が背は低いし髪は黒い。そっちの子はちよつと太ってるし、その子は眼鏡掛けてるじゃん」

人はそれぞれ、千差万別、十人十色。それを幼い頃から……それ
も天然で分かっているからこそ、本気で不思議だった。

何が違うのだろう、と。

自分も彼も、他の人も、結局は同じ“人間”なのに。

「……………」

燈夜のその言葉に、男子達は何も言えなくなっていた。

「ほらっ！ 人に嫌がったことをしちゃった時は、まずゴメンナサイって言わなきゃね」

燈夜が退いて、男子の背を押す。

「そ、その……さ……………」

「ごめん、ゴメン、ご免……次々と発せられる謝罪の言葉。慧に詰め寄っていた全員が、軽く俯きながら口を開いていた。

「もう良いよ！ こ、これからは普通に友達になろう？ ね？」
「——あ、ああ！」

慧が燈夜の方へ視線を向ける。

けれど、その場に燈夜の姿は無く——。

「ふわぁ」

幼き一ノ瀬燈夜少年は下校途中、大きな欠伸を零した。

眠そうに眼を擦る。

無駄に重いランドセルを背負い直し、帰宅路を歩く。

「……………っ！」

「……………ん？」

声、だろうか。

小さな物音が後ろの方から聞こえてきた。

「……………ノ瀬君！」

やっぱり声だった。

後ろを振り向くと、オレンジ色のランドセルを背負った長谷部慧がこちらに向かって走ってきていた。

燈夜の目の前まで来ると、はぁ、はぁと息を整える。最後に大きく深呼吸して、慧は勢い良く頭を下げた。

「ありがとう、一ノ瀬君！」

「は……………？」

意味が分からない、と言った風に首を傾げる燈夜。

「えと……………何が？」

「今日……………助けて、くれ。その上友達も出来たし……………」

「あゝ、その事か。アイツラとは仲良くやってる？」

「う、うん。さっきまで一緒に居たし……………」

「そっか。んじゃ、ボクのおかげじゃないな」

今度は慧が首を傾げる番だった。

「確かにきつかけを作ったのはボクだけどさ。結局その後、その子と仲良くなれるかは自分次第でしょ？ もしボクが君だったら絶対仲良くなれなかったもん」

それは胸を張って言えることだろうか……しかし、燈夜は絶対！
と言つて頷いていた。

その姿に、慧がぷつ、と笑ってしまう。
そんな慧に、燈夜もははっ、と笑みを浮かべる。

「それにさ。お前、良く男っぽくないとかなんとか言われてたじゃん？ けどそれって、可愛いって言われてるんじゃないの？」

「可愛い……？」

「そ。男だろうが女だろうが、可愛いは褒め言葉だと思うよ。自信持てば良いじゃん」

ふと。

本当にふと、気になった事がある。

「その……一ノ瀬君も……僕の事、可愛いって思ったり………する？」

「ああ、可愛いと思うよ」

ドクン、と……心臓が高鳴る音がした。

小学3年生。

一ノ瀬燈夜と、長谷部慧が初めて出会った時の事。

「ああ、可愛いと思うよ」（後書き）

今回は少し短めでした。

うーん、文字数は基本的に4000文字前後を目指しているんですけど、読者にとってはどれくらいが良いんでしょう……？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」(前書き)

タイトル？

狙いましたが何かwww？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」

「凄いですね！ 特待生の方に勝ってしまうなんて」

「ま、手加減されてたみたいだけだな」

「それでも凄いなと思いますっ。ただでさえ第五位の人の特待生の人とデュエルする事は珍しいのに……」

あ、やっぱりそうなんだ。

とすると、アレかな？ 第五位や第四位の人って、“ドロップアウトボクイ”みたいな感じに言われんのかな？

うは……憂鬱。

新期式の片付けは第三位から第五位の人が行うらしく、丁度その片付けが終わったところだ。

手伝いたいと言ったが断られた結姫は、どうやらずっと待っていてくれたらしく……これがリア充って奴か！

「ここが購買になります。購買ではパンやジュースなどは勿論、様々なパックが置かれています」

「へっ」

ソレは良いんだけど……金がね。

いつか結姫にも借り、返さないと行けないし……この購買辺りでアルバイト出来ないかな？

「ん？ へえ、パック以外にもカード、売ってるんだな」

一種のカードショップだ。ガラスケースの中に幾枚かのカードがあるし、ばら売りされてるカードも多々だ。

「ちょっと見てって良いか？」

「ええ、勿論」

さんきゅ、と言ってガラスケースの中を見ていく。流石に日版ばかりで、米版や韓版は無い。

「……そういや、今俺が喋ったり読んだりしてるの、日本語だよな？　けどここは地球じゃないし……お金の単位も円だし……うーん？」

まあ、良いか。

「えと……《聖なるバリア・ミラーフォース》……に、2万！？」

「……？　何を驚いているんですか？」

「え？　えと、え？　いや、な、なんでも……」

た、たけえ……俺の予想以上にたけえ……。

「《激流葬》……4万……《奈落の落とし穴》……1万2000円

……はは、んなアホな」

冗談は効果だけにしておけてんだ！

「なあ……この購買って、カード売ること出来るか？」

「はい、出来ますけど……」

「……はっ！　しまった、ブラマジデッキ以外のカードは“向こう”じゃん……。」

『燈夜殿。地球に置いたままのカードは全て持ってくる事が可能で

すが――』

「宜しく願いしますマハード様」

「な、何してるんですか……？」

はっ……マハードやマナ、結姫たちには見えないんだっ……。
端から見ると、何も無いところに突然頭を下げた変人の絵が……！

ははは。周りの視線が痛いぜ……チクシヨ！。

「……っ、次行こうぜ？」

「え？ あ、はい……」

止める……そんな眼で俺を見るな！ツ！

その後、校内を案内されている間……結姫の視線が少し、痛かったです。

『マスターって、結構お馬鹿さんだよね！』

「本当の事を言うのは止めようか、マナ。傷付くから」

地球に置いて来てしまったカードを持って来て貰った。
それで、一言言つと。

「部屋、狭いッス」

ただでさえ狭いののに、俺のカードが散乱してもうグチャグチャだ。取り敢えず布団が敷かれているところだけは確保。これで俺は眠れる。誰か来たとしても、後1人くらいなら座れるスペースもある。よし。

後は、このカードたちを残す分と売る分に分けるだけだ。

「面倒だけど……やるしかねーよな」

なるべく早く結姫の負担を無くさない。
それに、

（何か作業してれば……慧たちの事、考えずに済むよな）

まず、使わない分のカードを集めよう。

うーん……本当ならブラマジデッキを使いたいなーって思ってるんだけど、なんか伝説のカードらしいし……他のデッキも使おうかな？

あ、けどシンクロやエクシーズは自重しないと……くう、ツライ。

「……先に、使用するデッキ作っちゃうか。あゝ、今日は徹夜かゝ」

頑張っつてっ！ というマナの声援が横から。

うん。ボクはその声だけで頑張れるよ！ きつと。

なんて自分に喝を入れていたら、ちよつとボロい扉がノックされた。

こんな時間に誰だ……？ もう夜の8時だぞ？

「はーい。ちょっと待ってー……あつ、《ゴキボール》踏んだ。ゴメンっ！」

ふう……犠牲は《ゴキボール》だけだったか……お前のことは忘れない……決して。

ガチャ、と意外と良い音と同時に扉を開く。そこには、妙に暗い表情のした……、

「慧……じゃない、長谷部……さん？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「燈夜……」

……？

つか、第一位の特待生がこんなところに来て良いのか？ 多分だけど、この学校……もとい、アカデミアも前半のアニメGX同様差別が激しいし、来ない方が……。

なんて思っていると、突然慧がばっ！ と頭を下げる。

「ゴメン！」

「へ……？」

わっつ……？

「全部……思い出したんだ。一ノ瀬燈夜……18歳、高校2年生……留年しちゃったから、僕や基とは学年が違うんだよね……」

「え……思い出したのか、俺の事？」

「うん。チムLEGENDsのリーダーは、僕の大切な人だよ」

そっか……そっか……っ！

俺は喜びの余り、慧に抱き付いてしまった。

「と、燈夜……っ!？」

「良かった……俺、なんかすっげー寂しくてさ……他人の空似だったらどれだけ良かったかって……何度も、何度も……!」

「燈夜……」

それ程、俺は弱い人間だった、ということだろう。

1人じゃ何も出来ない。家族、友達……傍に誰かが居ないと、俺は孤独に耐え切れず壊れてしまう。

マナやマハード、結姫が居たから良かったものの……1日でコレだ。コレが数日、数週間、数ヶ月とあつたら……。

「ゴメンね……燈夜」

「——……ああ、ありがとう、慧。落ち着いた」

数分、だろうか。

俺は暫く慧に抱き付いたままだった。

「ここじゃ何だし、中入るか？ つつても、スゲー散らかってるけどな」

「え……えと、良いの……?」

「何遠慮してんだ？ ほら、入れよ」

……相変わらずの散乱で。

なんとかカードとカードの間を通って、ベッドの位置まで移動する。

ふう、と息を吐きながら腰を下ろし、カードを纏め始める。

「マナ、茶頼んで良いかー?」

『んー』

「えと……燈夜、マナって誰？」

ああ、そつか。慧はアニメや漫画見て無いから、ブラマジガールって言わないと分かんないのか。

……いや、見ても分からないかな？

「マナー。実体化出来るか？」

『それでもお師匠様の弟子だよ？ そんなの簡単、簡単っ！』

個室に厨房は無い。だから、一度部屋を出て廊下の隅にある厨房まで行かないとお茶を入れることは出来ない。

だから、部屋を出て行くこととしていたマナがふっ……、と実体化する。未だに宙は浮いたままだけど、透き通っていた身体が色を持った。

「わっ！？ ぶ、ブラマジガール！？ なんてっ！？」

「へ……？ いや、俺の精霊だし。ブラマジも居るぞ？ お前もネオスが精霊だろ？」

「せ、精霊って……知らないよ」

え……。俺はてつきり、慧もネオスっていう精霊が居て、傍に居るんだと思ったからマナを実体化させたんだけど……。

「マナたちに世界の歪みみたいの、聞かされたんじゃないのか？」

「う、ううん。僕や基、幸仁が眼を覚ました時には世界の歪みに関しての知識が頭に入ってた……」

えゝ……んじゃ、聞かされたのは俺だけって事か？
マナに視線を送ると、私は知らない、と首を傾げられたし。どうやらその理由は分らないらしい。

「……まあ、良いか。それより、お茶お願い」

『はい』

情報が少ない今、考えても仕方ないしな。

「ところで、燈夜は何してるの？」

「ん？ 幾つか俺が使いそうなデッキを作って、残りは購買辺りに売っちゃおうかなって」

「売るの？」

「ああ。実はさ、ここの学費や寮費って、結姫……咲之宮の人が大目に見てくれてるんだよな」

「そっか……確かに、この世界に来た時貰ったお金だけじゃ足りないかもね」

「え？」

「え？」

お金を……貰った？

「誰に？」

「えと……僕たちをこの世界に呼んだっていう人、だけど」

……………。

『お茶、お待ちどう——』

「なんじゃそりや嗚呼ああああアあああああああ！！！！」

『ひうつ！？』

ンだよソレ……不公平だ、不公平すぎる！

アレか？ 慧も基も幸仁も、皆顔立ちが整ってるからあげました
ってか！？ 平凡でスミマセンね、チクショウっ！

「……え、と……もしかして………」

「貰ってませんが、ナニカ？」

「……いいえ、何でも御座いません」

くそ……やってられねー。何が世界を救って欲しいだ、呼んだのはマハードじゃなかったのか、ああ？
黒幕って奴か……せめて顔出せや！

『ま、マスタ……？』

「今の俺に近付くと、犯されっぞ」

『それは全然構わないんだけど』

「いや、構えよっ！？」

精霊といえど、お前は女の子だろ！？

「はあ……まあ、良いや。ところで慧」

「え？ 僕を……犯すの？」

「犯さないから！ 頬を赤く染めるなっ！ 聞きたい事があるだけ

だつて！」

「まったく、ドイツもコイツも……。」

「お前、なんで女子の制服着てるんだ？」

「あ、コレ？ コレは、その……。」

「……？」

顔を俯いて、慧は言葉に詰まっている。そんなに言い辛い事なのか……？」

「言いたくないなら別に——」

「ううん。燈夜には、聴いて欲しいかな……。」

「…………。」

デッキを作っていた手を止めて、俺は真っ直ぐに慧を見つめる。スカートの裾を掴んで、何度か深呼吸している。勇気を振り絞っているんだ。その姿も忘れないようにと、俺は視線を逸らさない。やがて、慧の口が開く。

「燈夜は……っ。性同一性障害って、知ってる？」

「……性同一性障害？ それってアレだろ？ 身体の性別と心の性別が違うつて言う…………。」

「何度か、俺が書いた小説のネタにしているから調べた覚えがある。ん……？」

「この会話の流れでその病名を出したって事は…………。」

「……燈夜の思ってる通りだよ。僕はね、生まれ付きの性同一性障害なんだ」

慧は、自分のさらさらな髪を撫でる。ショートの場合は、慧の中世
的な顔立ちと相まって凄く似合っていた。

「身体は男だけど…… “私” ね、心は女の子なんだよ？」

「……………」

「この世界に来た時…… 新しい自分になるうって思った。最初は基
や幸仁も一線を置かれてたけど…… それでも——」

「お前って、スゲー可愛いよな」

え……、と慧の言葉が止まる。

結構恥ずかしい事言うつもりだし、俺は慧に視線を合わせないよ
う壁に背を預けて、目を閉じた。

「初めて会った時は、性別とか良く分かんなかったけどさ。中学、
高校って進むとさ…… お前がどれだけ可愛いかが分かって来たんだよ
な」

ま、顔立ちの良さってだけなら基や幸仁も負けて無かったけど。

「だって、そこの女子より普通にレベル高いしさ。デザインが好
きだから、とか言ってレディースの服着てた時も、男だとは思えな
かったし」

「燈夜……………」

「けど、やっぱりアレだな。基や幸仁よりも一緒に過ごしていた時
間が長かった俺からしてみれば、」

一拍。

「慧は慧だな、うん」

「僕は、僕……？」

「そ。男だろうが女だろうが、一人称が僕だったり私だったりしても、長谷部慧は長谷部慧。俺の大切なダチだ」

昔、慧を苛めてた男子に言っただ事と同じ。

——コイツはボクと同じ人間！

性別だとか、病気だとか関係なく。俺は俺であるように、慧は慧なんだ。

「あ、あはは……なんか、凄くスッキリした。そっか……僕は僕……うん、そうだよ」

どうやら、心の蟠わたかまりは取れたみたいだな。

「あ、けどね燈夜」

「うん？」

「僕、心は女の子だからさ……好きになるの、男の人なんだよね」
「あゝ、そうか。そりゃそうだよね……」

ん？

なんでここでその会話？

ま、まさか……。

「お前……もしかして」

「……うん。僕ね——」

「基か幸仁のどっちか好きなんだな……」

「ええっ!？」

『この流れでっ!？ マスターってやっぱりお馬鹿さん!？』

だからそれを言うなって! 本当の事だから余計傷付くんだよ!

「ち、違うよっ! 僕が好きなのは、ずっと昔から燈夜なんだから

——!」

「え？」

「——……っ!」

ばっ、と。

綺麗にカードを避けながら、慧は部屋を出て行った。

「……え？」

『むう………なんか、ヤダな』

………え？

………マジ？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」(後書き)

特に書くことが無い……シヨボーン。

感想、評価等お待ちしております!!

「絶対、好きになってもらうから」

あの日……慧から想定外の告白を受けて1週間が経った。

取り敢えず、俺はあれから慧と話していない。というより、俺が近付くとアイツが逃げるんだ。気持ちには分らないでもないけど。それと、マナも何故か俺の前に出てこない。何故……？
なにゆえ

俺の癒しがっ！？

と、本気7割冗談3割の事は置いていて。

俺がこのアカデミアについて分かった事がある。

「アイツだろ？ 第五位の癖に咲之宮結姫様に近付いてる野郎ってのは……」

「なんで第五位なんかが伝説のカードやエクシーズ使えるんだ？」

「結姫お姉さまに近付いたらクロス……」

えと、うん。

差別はそうだけど、何より結姫の人气が高いという事。同じくらい慧や基、幸仁の人气が高いという事。

………はあ。前途多難。

「あ、燈夜さん！」

………ついでに言っておくと、俺が結姫に近付いているんじゃない。事實は逆である。

「一緒に教室まで行きましょう?」

「……ああ」

殺気が凄く……大きいです……。

先日、俺は幾つかデッキを作り終え、残りの殆どのカードを購買に売った。勿論、高かった聖バリ（ミラフォ?）や奈落、激流とか死者蘇生を筆頭に。

すると、どうだろうか。俺は凄いいお金持ちになった。

……まあ、殆どは貯金と学費、寮費、その他諸々で消えてったケド。

貯金って大事だねっ。いつまでこの世界に居るか分かんないんだしなっ!

鋭い死線（誤字じゃない）に耐えながら教室に入った。
と――。

「っ……!?」

「……? どうしたんですか、燈夜さん?」

「い、いや……」

なんだ、今の……? 寒気……?

背筋が凍るような感覚。恐怖とかとは何かが違う感情が、身体を縮こまらせた。

そのまま一歩が動かせない。結姫が心配そうに俺を見つめ、少し離れた場所では慧がどうしたんだろっ、と首を傾げていた。

「……………そうか」

隣で、声。女性のトーンなのに、妙に低い。

「テメエ」が、オレの敵か」

振り向けない。口内に溜まった唾を飲み込んで、俺は唇を噛んだ。
——痛い。

その痛みは俺の身体の痺れを解かす。

「っ……！」

意を決して声がした方——結姫とは逆の方向——へ振り向く。

「だ、誰も居ない……？」

誰だったんだ……今の。それに、さっきの背筋が凍るような感覚は……？

「——燈夜さん？」

「あ、ああ……なあ、今隣に誰か居なかったか？」

「隣ですか？ いえ、誰も見ていませんけど……」

……一種のホラーだな。

「……うゝん、気のせいだな。昨日夜更かししてたからさ」

「……そうですか？ それなら良いんですけど……」

そうは言っても。

“気のせい”じゃないって、俺は心の奥底で薄々感付いていたんだ。

「はあ……階級毎のデュエルトーナメントですか」

俺は理解不能、と脳内で完結させながら呟く。

只今、今日の最終科目を終えたところ。正直、俺にとっては基礎中の基礎って言うって良い事を習い終えて、さあ帰ろう、と思ったところの連絡事項だった。

「半年に一回、第壱校では階級毎に代表者を1人選出し、トーナメントをする。その順位によって階級毎に評価やカードなどの賞品を与えている」

……………なあ。

それってさ、基本的に第一位の奴が優勝しないか？ 何、その変な大会……馬鹿なの？ 死ぬの？

つか、

「それって、俺が代表になるのは確定じゃんか……」
「そうなるな」

……さざりと言いますね、名も知らぬ一般教師さん。

「開催は明日の朝9時だ」
「早っ!?!」

もつと早く連絡しない、普通！？ 一晩しかデッキ調整はさせないってか！

「一応、トーナメント途中のデッキ入れ替えは認められているぞ」

……それ、余り意味無いよな？

何故なら、この世界の殆どが1人1つしかデッキを持っていないからだ。

理由としては簡単。

この世界では、カード1枚1枚の“価値”が高いからだ。

それと、この世界は地球とかとは違って、自分のデッキに凄い愛着を持つ。人によっては他のデッキを使うと、「浮気者！」とか言われる事もあるくらいだ。

「各階級の者は、開催までに代表者を決めておく事。それでは、解散！」

はあ……帰ってデッキ、調整するかね……。

そう思いながら立ち上がると、制服の裾を掴まれている感覚。

「ん……？」

そこに居たのは、かなり身長の高い女の子。俺の胸にも届かないし、見た目だけなら小学生くらいだろうか。

水色の髪はそれなりに長い。髪の毛をツインテールにしている、肩に触れるか触れない程度まで下りていた。

表情が読みにくいな。元々顔を窺ってその場を切り抜けるタ

イプである俺は、ちよつと厄介。

「えと……どうしたの？」

「……………逃げて」

「は？」

「ボクから……早く」

そう言うや否や、彼女はその場を立ち去る。まるで何事も無かったかのように、颯爽と教室を出て行った。

「なんだっただ……？」

「うゝん……コレ入りたいけど……抜きたいカードがねー……」

これ、デッキ編集の時のあるあるだよな？

『私はこれがびみょーだと思っただけど……』

「俺も思っけどさ……ピン入れとくと役に立つんだよ……初手率高いし」

マナに協力して貰いながらデッキを改造中。

さっき、久し振りにマナが俺の目の前に出て来てくれた。

嬉しい……物凄く嬉しいんだけど、なんでこの1週間出て来てく

れなかったのか、理由は教えてくれなかった。くそう。

それはともかく。

部屋の中で試行錯誤していると、扉がノックされた。

「はい」

こんな時間に誰だ？ まだ飯前だし、殆どは自分の寮に戻ってると思うんだけどな……。

前みたいにカードが散乱している訳でもないので、スムーズに扉前へ。

開けると、なんか久し振りに間近で見たな、という感じの慧が。

「慧？ どうした？」

「あの……は、話したいことがあって」

「ん、そか。取り敢えず中に入れよ」

第五位の寮だけあって、暖房設備とかそついうのは皆無だ。中はまだ暖かいとは言え、外は冷えるだろう。

中に入って、前みたいに2人で布団の上に座り込む。

「んで、話ってなんだ？」

顔は赤いし、ずっと俯いているし……多分この前関連、だよな？ 勢いで俺に告白して来たあの事件。俺はまあ、この1週間である程度整理は出来たけど……本人は違っただろうなあ。

「あの……この前のこと、だけど」

やっぱり。

「その……小学3年生の時、僕を助けてくれたでしょ？」
「ん……まあ」

自覚は無いけど。

「その時から僕……その、す、すす……好きだったんだ。燈夜の事……」

「……そか」

「けど……僕は男だし……ずっと、告白出来なくて……数ヶ月間も、燈夜の事、忘れちゃってたし……」

あ、そっか。

俺はまだ数日しか経ってないけれど、基は半年、幸仁や慧は数ヶ月もの間この異世界に居たんだっけな。

「だから……ね。告白の事……忘れて欲しいんだ」
「……ん？ 忘れる？」

うん、と慧は首肯する。

「だって、気持ち悪いでしょ？ 男から好かれても……」
「男つつたつて、心は女なんだろ？」

「うん……けど、」

「なんか、お前らしくないな」
「え？」

なんつーか、こう……慧は笑ってなきやな。
ただでさえ、基は眉間に皺寄ってるし、幸仁はクールだし。

ん、なんて言ったら良いんだろう？ 直球で言うか？ それとも遠回しに……………。

なんて考えていると、再び扉がノックされる。
今度は誰だ？

慧に断りを入れて、扉へ向かう。
ガチャ、と相変わらずの小気味良い音が鳴る。

「…………お前…………」

そこに居たのは、さっき俺に「逃げて」って言った女の子だった。ただ違うとすれば、さっきはツインテールだったのが今度はポニーテールだった事。

…………？

いや、別人か。身長が違う。さっきは俺の胸くらいかそれ以下だったのに、今は俺と同じくらいだ。

それに、髪の色も。さっきの子は水色だったけど、目の前の子は銀髪。翠色の瞳も、紅だ。

なんで一瞬でも同一人物だって思っちゃったんだろ？

それにしても、顔立ちは瓜二つってくらい似てる…………双子？

「よお…………挨拶に来たぜ、一ノ瀬燈夜さんよ」

「ん…………ああ、うん。えと……………」

「オレは鴻おおとりソル。まっ、好きに呼んでくれて良いぜ。どうせ短い付き合いなんだからな」

はあ…………さいですか。

「じゃあな。今日は挨拶だけだしよ。ルナに宜しくな」
「あ……はい」

ルナ……？ さっきの背の低い女の子の事かな？
取り敢えず扉を閉めて、慧の下へ戻る。

「どうしたの？」

「いや……別に。それより、時間は大丈夫なのか？」

もうすぐ夕食の時間だ。DPで時間を確認した慧は、あっ！と
声を上げて立ち上がった。

「そろそろ戻らないと……」

「はは、やっぱりか。——なあ、慧」

「え？」

まあ、本当は色々言いたい事があつたんだけど、時間が無いし……
…1つだけ。

「忘れないからな、お前からの告白。そりゃ、今は世界の歪みやら
なんたらで返事は出来ないけど……」

ちなみにそれは俺の言い訳だ。

世間は俺を、“ヘタレ”と呼ぶだろう。うん、自覚してるよ？
ヘタレで何が悪い！

「お前はお前のまま、真っ直ぐ進めば良いだろ？ 初めて他人に力
ミングアウトするけど、俺って……まあ、男だろうと女だろうと大
丈夫な奴だから。別に気にしないし」

まあそれは、慧とずっと一緒に居て、なんか段々と吹っ切れて来たからなんだけど……閑話休題。

「つまりはアレだ、その……俺に好きになって貰いたいなら、努力すれば良いだろ？」

うわ、最低男の発言だ。自分で言いながらうわ、ってなる。

「……そうだね。うん。ありがとう、燈夜！」

笑顔。

そう、その笑顔だ。その笑顔を待ってたぜ、慧。

「絶対、好きになってもらうから。覚悟しておいてよ、燈夜！」

「絶対、好きになってもらうから」(後書き)

慧が吹っ切れた回。

性別なんて気にせず、慧はこれから燈夜にアタックして行くでしょうね。

そんなことよりっ(↑酷)、燈夜は男でも女でもOKだという新事実！

その辺りは作者と同じ。

所謂“バイ”ですね、分かります。

感想、評価等お待ちしております!!

「ライバル宣言、しちゃいます！」

「さあ……始めようか」

……いや、おかしいだろ、コレ。

目の前に居るのは、どう見ても教師だ。うん、間違いない。第五位の寮長をやってる、アキマサれんしょう彰正煉昌先生。彰正が名前だ。

無駄に爽やか顔、基や幸仁並かそれ以上の整った顔立ち。優男ってこういう人を言っんだなあ、なんて思ったり。

「……いやいや、え？」

今日は朝から、疲れる事ばかりです。

今日は朝から、マナの機嫌が悪かった。

何故かずっと姿を現したまま、俺の隣で頬を膨らませたりしていた。

俺が話し掛けると、ぷいっ！ という感じで顔を背けられたり。それだけで俺の一日の活力が無くなった気がする。

しかも、今は他の人にも姿が見える状態。そろそろ登校しないと行けない時間帯だから、姿を消してもらわないと……。

「えと……ま、マナ？」

『……何？』

……怖。

「いや、あの、えと……ど、どうして機嫌悪いのかな、と」

『……マスターの所^{せい}為だもん』

「へ？」

俺が何かした……ってこと？　いつ？　ま、まさか……俺が寝てる時に何かしちまったのか！？

『……？　なんで土下座してるの？』

「なんかしなきゃイケナイ気がした」

『………ぷっ』

暫くそうしていると、マナが耐え切れない感じで吹き出した。

そして、あはは……、と無邪気に笑い始めた。

『ははは……。うん、許す。マスターって昔からそうだし……それに、嫌われちゃったりするよりはマシだもんね』

「……？」

なんか良く分からないけど、許してもらえた……？　つか、昔か

らって……視てたのか、俺のこと？

なんて疑問に思っていると、扉がノックされる。

「燈夜ー？ 一緒に行こうーよー」

「ん……慧？」

「わ、私も居ますよっ！」

「……結姫も？」

第一位と第二位の人が揃ったぞ。

……まあ、良いか。

俺はディスクと複数のデッキの入ったバッグを持つと、DPをポケットにしまい玄関へ。

扉を開けると………。

（え？）

何故か、慧と結姫が見詰め合って………うん、嘘。睨み合っていた。
Why？

「え、と……おはよう、2人とも」

「おはよう、とう……」

「おはようございま………」

……？ なんだ、2人とも？

『……あ。ゴメン、マスター。姿消すの忘れてた』

……なん、だと。

つか、慧はマナの事、知ってるだろっ！？

「だっ、誰ですかあの人はっ!？」

「いや、えっと……マナ、です」

「そっか……そういえば、マナちゃんって燈夜とずっと一緒なんだっけね……」

「いつ……!？」

ジト……。何故か結姫に睨まれるマナ。その睨み自体は怖くなく、どちらかといえば可愛い部類なんだけど……睨む理由が良く分からない。

『あはは。うん、良い機会だね』

……何が？ 嫌な予感しかしないんだけど……。

マナはさつきよりもさらに現実味を帯びた。気配というか、温度というか……そういう物がハッキリしたように見える。
言うならば、普通の人間みたいな感じ？

そんな感じになったマナは、突然俺の腕に抱き付き……ってええっ!？

「2人には、ライバル宣言しちゃいます!」

「っっ!？」

「ライバルて……お前、デュエル出来たっけ？」

「っっっ!？」

つか、胸当たってるから！ その格好で近付いちゃめえええ。

「お……俺、先に行ってるからなっ！」

マナから逃れ、俺はその場から逃走。精霊のマナは近くじゃなくて良いのかな、なんて頭の片隅で思いながら走った。

……朝から凄く疲れた。そんな気がする。

んで、9時少し前。階級別トーナメント開催まで後数分、と言った感じ。

教室の液晶板に写されたトーナメント表と連絡事項を呼んで、俺は啞然としていた。

例えば。

第一位から第五位の代表者の他にも、教師群で1人、大会に参加する人が居る、とか。

教師と第一位以外の方が優勝した場合、その者は昇格する事が出来る、だとか。

優勝した人は、出来る限りの願いを叶える事が出来る、とか。

第一回戦は、第五位の代表者……俺対、第五位寮長の彰正先生、とか（これ一番大事）。

——んで、回想終わり。

場所はデュエル場。1階はデュエルスペースになっていて、2階以降は全て観客席になっている。

その観客席に何故か並んで座っている慧、結姫。俺が視線を送ると、2人とも手を振ってくれた……。のは嬉しいんだけど、男からの死線が大きいです、ハイ。

……良く見ると、慧、結姫と並んで座っている人も見覚えがある。

「鴻ルナ……だよな？ 多分」

それはともかく、マナは既に精霊化しています。今回は出番が無いから、俺の傍には居ないけど。

『では、階級別デュエルトーナメント第一回戦、第五位代表者一ノ瀬燈夜対、教師群代表者彰正煉昌先生、始め！』

「先攻はどうぞ、一ノ瀬君。第五位の力、僕に見せてみてよ」
「……俺のターン、ドロ〜っ！」

ターンランプは向こうは光っていたはずなのにな……。流石、教師群の中で一番人気が高い先生なだけある！

「俺は——《サイレント・マジシャン LV4》を召喚！」
「へえ……」

イラストでは女性と分かり難い魔術師……。サイレント・マジシャンが場に現れる。

幼い子供だから、力も弱い。けれど、

「《レベルアップ！》発動！ 俺の場に居るLVと名の付いてるモンスターを墓地に送り、そのモンスターに記されているモンスターの召喚条件を無視して特殊召喚する！ 来い、《サイレント・マジシャン LV8》！！」

LV8……それは、子供が大人に成熟した姿。攻撃力は3500もある。

「攻撃力3500のモンスターが、手札2枚消費で出てくるとはね……」

「それに、このカードは相手の魔法の効果を受けませんよ」

そう、それが地味に効くんだよね。

ライバルだったり、地割れ、地砕き……その他諸々。

俺の好きなモンスタートップ5に君臨するぜ！

『ありがとう、燈夜様』

「……へ」

『さあ、一緒に戦いましょう』

………空耳ツスか？ 空耳ツスよね？
気を取り直して、と。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「では僕のターン、ドロー。僕は《グリーン・ガジェット》を召喚。効果により、デッキから《レッド・ガジェット》を手札に加えるよ」
「っ……ガジェット、か」

結構な古株ながら、結構な頻度で大会に参戦していた強者だ。^{つわもの}

ただ、俺が知ってるガジェットでは除去が多めだとは言え、地砕きとかが多い。LV8にはそれらが効かないから、怖いのは罠カード……。

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

手札は4枚、か。

「……バトル！ 《サイレント・マジシャン LV8》で《グリーン・ガジェット》に攻撃！」

「モンスターの召喚は無し、か。残念だね……^{トラップ}罠発動、《狡猾な落とし穴》！ 僕の墓地に罠カードが無い時に発動出来る！ フィールド上のモンスターを2体破壊する！」

げ……。

今、フィールドに居るのはグリーンとLV8だ。

「ゴメン、サイレント・マジシャン……守れねエ」

『仕方ないわ。また、近い内に』

……また喋った。

………コイツも精霊、って奴だろうか。

まあ、良いか。

「メイン2！ 俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてター

ン終了！」

「僕のターン、ドロー。さて、厄介なモンスターは居ないし動こうか……僕は手札より、《ギアタウン齒車街》を発動する」

が、ガジェットはガジェットでも古代の機械関連の方が！

除去ガジェ、代償ガジェ、マシンガジェ……エクシーズは無いにしても、ある程度の候補の中でまさかそれとは。

こりゃ……パワーで勝てるのはサイレント・マジシャンだけだぜ。

「その顔じゃ、《齒車街》の効果は知ってるみたいだね。聡明で何よりだ。このカードの効果により、アンティーク・ギアと名の付いたモンスターが必要とするリリースは1体少なくなる。そこで僕は、アンティーク・ギアピースト《古代の機械獣》と通常召喚！」

「うわ…… よりにもよってそれが……」

齒車で出来た街に、機械で出来た獣。LV6で攻撃力は2000と少なめだが、効果が厄介だ。

まず、《古代の機械獣》が攻撃する時はダメステ終了時まで魔法、罠カードを使えない。つまり《次元幽閉》だったり《炸裂装甲》、攻撃宣言した後だと《月の書》などが打てないということだ。

2つ目の効果は、《古代の機械獣》が戦闘破壊したモンスターの効果は無効化されるということ。

《巨大ネズミ》、《仮面竜》などのリクルーター、《クリッター》などのサーチャー、《異次元の女戦士》なども無効化、ということだ。

「続いて、《ダブル・サイクロン》発動。僕の場合の《齒車街》と、君の場にある左側の伏せカードを破壊したいな」

「うわー……やべ」

破壊されたのは、《奇跡の軌跡》ミラクルカスだ。

「へえ……相手にドロウさせる代わりに、攻撃力を1000上げて2回攻撃させるカードか。確かにサイレント・マジシャンと相性は良いね」

……まあ、そのモンスターが攻撃した時の戦闘ダメージが0になるデメリットもあるけど。

「それじゃあ、破壊された《歯車街》アンティーク・ギアガジェルドラゴンの効果を発動。デッキより、《古代の機械巨竜》を特殊召喚！」

本当に、大きいな……。

つい見上げて、息を吐いてしまう。

戦意が喪失してしまいそうな程の迫力。

……このデッキでアイツに対抗出来る攻撃力を持つてるの、サイレント・マジシャンただぞ。サイマジ以外で最高攻撃力は1600なんだし。

「バトルフェイズ。まずは《古代の機械獣》でセットモンスターに攻撃！」

「く……モンスターは《見習い魔術師》です」

「リクルター、だね。けれどギアビーストの効果により、無効化されるよ」

……分かってるよ。

何の効果も発動されず、《見習い魔術師》は破壊され墓地へ行く。

「続いて、《古代の機械巨竜》で直接攻撃！」

「う、うわああああああっ!!」

一ノ瀬燈夜LP4000↓1000.

こ、こええ……つい俺も大声を出しちゃった。

結姫を襲った不良さん。大袈裟じゃね？とか思ってしまったマジすんません。こりゃ、大袈裟にもなりますね、ハイ。

「それじゃ、僕はターンエンドかな」

「くう……俺のターン、ドロー！」

ふう……落ち着け。

まだ大丈夫。

「その眼……まだ諦めてないみたいだね。さあ、君の力を魅せて見て」

「ええ……行きますよ！俺は魔法カード、《トレード・イン》を発動！《サイレント・マジシャン LV8》を捨てて、2枚ドロ！つ！く……まだだ！速攻魔法、《手札断殺》！お互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドロ！」

「成る程ね。サイレント・マジシャンと相性が良いカードをとことん積んでるみたいだね」

勿論。

このデッキの主役は、サイマジだからな！

「——良しっ！リバーカードオープン！《リミット・リバーズ》！戻って来い、《サイレント・マジシャン LV4》！」

攻撃力が1000の幼いサイマジが復活する。
けど、ゴメン。

子供の君は正直……うん、使い回し。

「魔法カード、《レベルアップ!》」

2枚目だぜ……引けて良かった、ホント。

「もう墓地に2枚あるけど……もう1枚はまだデッキの中だ!」
サイレント・マジシャン LV8《!!》」

『今度こそ、行きましようか、燈夜様』

「——ああ! バトル! 《サイレント・マジシャン LV8》で
《古代の機械巨竜》にアタック!」

サイマジが放った炎は小さく、とても頼りない。けれどその破壊力は、古代の巨竜なんて目じゃないぜ!

「く……っ!」

彰正煉昌 LP4000 ↓ 3500 .

「俺はこのまま、ターンエンド」

「まさか、ガジェルドゴンが倒されるなんてね……君が第五位とは、アカデミアも質が落ちたというか」

いや、それ教師が言っちゃ駄目な気がするよ? それに俺の場合、編入したてだからっていう理由があるんだし。

「けれど……僕が担当する唯一の寮生が君とは、僕も鼻が高いよ、燈夜君」

「はは……ありがとうございます」
「さて……僕のターン、ドロー！」

……彰正先生は、何を引いた？

俺が緊張に身を固めていると、彰正先生はふふ、と柔和に笑った。

「……カードを信頼する事によって、デッキは応えてくれる。それはどの世界でも一緒だと僕は思ってる」

「……？ はあ」

「事実、君のデッキも応えてくれている。あの状況を、《ブラック・ホール》などのパワーカードを使わずに突破されるとは正直、思っていないかった」

褒めて、くれてるんだよな……？

なんか実感が湧かない褒められ方だ。

「……僕のデッキも、応えてくれたよ。燈夜君」

「え……？」

「僕は《レッド・ガジェット》を召喚。効果により、《イエロー・ガジェット》を手札に加え、バトルフェイズに移行する！」

……？ バトルフェイズ？

パワーでサイマジに勝てない事は誰しもが分かっている事……魔法も効かないし………はっ！？

ま、まさか……？

「気付いたかい？ 《古代の機械獣》で《サイレント・マジシャン LV8》に攻撃！」

……来る！

「ダメージステップ、《リミッター解除》！ 僕の方に居る機械族モンスターはエンドフェイズに自壊する代わりに、攻撃力が倍になる！」

《古代の機械獣》 ATK2000 ↓ 4000 .

《レッド・ガジェット》 ATK1300 ↓ 2600 .

「くそ…… もうギアビーストが攻撃宣言してるから伏せカードが使えない……」

俺の伏せカードは《魔宮の賄賂》。これが使えないんだもんなあ……。

「スゲエな…… 先生の言った通りだ。カードを信頼してれば、本当にデッキは応えてくれるんだな……」

「そう。最近の子は、それを分かっただけじゃないんだね……」

……確かに、そうかもしれない。

けど——！

「……先生なら、分かるよな。ダメージステップじゃなくて、ダメージ計算時に打てるモンスターカードの事」

「ん……っ！ まさか……!?!」

「本当に、デッキは応えてくれたぜ……！ 最後の手札の効果を使う！ 《オネスト》お——！」

《サイレント・マジシャン LV8》 ATK3500 ↓ 7500 .

「返り討ちにしてやれッ！」

『流石……新しい主人は違うわね。力が漲ってくるわ』

バトル続行！

『「サイレント・バーニング！」』

彰正煉昌LP3500↓0・

そんなこんなで、俺はデュエルに勝利した。

「ライバル宣言、しちゃいます!」(後書き)

まだ連載始めて10日しか経って居ないのに、メインの『遊戯王 僕らの進んで行く道』を超える勢いのLEGENDS。

……更新速度って、大切だね。

感想、評価等お待ちしております!!

「ソイツが俺の敵か」

——うおおおおおおお！！

歓声上がる。

快く思っていないとは言え、第五位の人間が教師を破ったのだ。盛り上がらない訳が無い。

「本当に、デッキは応えてくれたぜ」……か」

ツインテールではなく、ポニーテール。

鋭い視線で喜ぶ一ノ瀬燈夜を見詰めながら、はっ、と鼻で笑う。

「物語の主人公みてーな台詞吐くじゃねエか……んなもん、糞喰らえだな」

——デメエ 似非主人公は。

「オレがぶっ潰してやるよ」

「まさか、あそこで《オネスト》とはね……負けたよ」
「今日は運が良いみたいですよ」

「運も実力の内、か。君は強いよ。このアカデミアでも指折りだね。僕が保障しよう」

こ、ここまで真っ直ぐに褒められると照れる……。

「お疲れ様でした、燈夜さん。凄かったです！」

「本当だよ。先生もお疲れ様です」

デュエル場から少し離れて俺と彰正先生が話していると、観客席から降りてきた慧と結姫が近付いて来た。

「ありがとう。それにしても、僕に勝つんだから、多分すぐにでも第五位を抜けるんじゃないかな、燈夜君は」

「そうですね。煉昌先生はこのアカデミアでも強い方ですし、間違いないと思います」

そうだったのか。

確かに、俺もかなり危なかったな。彰正先生は《リミッター解除》を引いたとは言え、俺は《トレード・イン》、《手札断殺》とドロ―補助をしてやっと《オネスト》だ。

今回は運が良かったけど、次やったらどうなることやら。

「それはともかく、次の対戦は……………」

「第二位対第三位だよ」

「第二位の代表者は私です。第三位の人は良く知らないんですが、女性だと言う事は聞いています」

デュエル場の向こう側には、既に1人の女性가가スタンバってる。

『早速次へ参りましょう。第二位の代表者と第三位の代表者はデュ

エル場へ上がってください』

「行つて来ます」

「ああ。頑張れよ、結姫」

「——はい！」

さて、どんなデュエルを見せてくれるのかな……？

かなり楽しみにしながら、俺は慧や彰正先生と共に観客席へ向かった。

『では第二回戦。第二位代表者、咲之宮結姫さん対、第三位代表者、^{みそのリンナ}御園凜那さん……始めて下さい』

デュエル場に立っている結姫に、緊張感といった類は感じられない。対戦相手の御園っていう人もそうだ。

下半身にまで届きそうなかなり長い髪は俺並に黒い。瞳の色は……遠目だと分かりにくいけど、灰色っぽい。

それにしても背が高い。俺と同じくらいだろうか？ 多少、俺よりは小さい印象を受ける。

「先攻は私のような。ドロー！」

どうやらターンランプは御園さんに灯りを点したらしい。

「……私はモンスターをセット。ターン終了」
「私のターンです、ドロっ！」

最初は無難にモンスターセット、か。

「私は《イービル・ソーン》を通常召喚します！ 《イービル・ソーン》の効果を発動！ このカードをリリースして、相手に300ダメージを与え、任意の数、デッキから《イービル・ソーン》と特殊召喚出来ます！」
「く、う」

御園凜那LP4000↓3700・

一瞬だけ《イービル・ソーン》がフィールドから消えたかと思うと、今度は2体の《イービル・ソーン》が場に並ぶ。

「このカードはダメージを与える効果は使えません。しかし、私は魔法カード《超栄養太陽》を発動します！ このカードは私のフィールドに居るLV2以下の植物族モンスターをリリースして発動し、リリースしたモンスターのレベル+3以下のモンスターを特殊召喚します！ 《イービル・ソーン》をリリースし、デッキより《ローンファイア・ブロッサム》を守備表示で特殊召喚です！」

やっぱり、植物族デッキか。

原作で、5D、sのヒロインである十六夜アキが使ってた種族だよな。正直、アキが使うまではスゴイマイナー種族として有名だったのを憶えている。

「《ローンファイア・ブロッサム》の効果を発動します！ 《イー

ビル・ソーン』をリリースし、デッキより《ギガ・プラント》を特殊召喚します！」

ここはティタニアルじゃなくて、ギガプラか。

俺が前に作った植物デッキはデュアル軸で、《スーペルヴィス》と《血の代償》を使ってワンキルするデッキだったな。

「バトルです！ 《ギガ・プラント》でセットモンスターに攻撃します！」

「モンスターは《シャイン・エンジェル》だ。リクルート効果により、私はデッキから《クイーンズ・ナイト》を特殊召喚！」

《クイーンズ・ナイト》……ってことは、絵札の三銃士か。

俺も作るうとしたけど、納得出来るのが作れなくて止めたな……。

「う……これは嫌な予感がします……私はカードを1枚伏せて、ターンを終了します！」

「私のターン！ ドロー！ 私は手札より、《キングス・ナイト》を通常召喚！ 《クイーンズ・ナイト》が自分フィールド上に存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、デッキより《ジャック・ナイト》を特殊召喚する！」

一気に並ぶ騎士たち。

「永続魔法、《連合軍》！ 自分フィールド上の戦士族、魔法使い族モンスター1体につき、私の場に居る戦士族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする！」

今、場に居るのは三銃士。

つまり、全員の攻撃力が600ポイント上がるという事だ。

《クイーンズ・ナイト》 ATK1500 ↓ 2100 .

《キングス・ナイト》 ATK1600 ↓ 2200 .

《ジャックス・ナイト》 ATK1900 ↓ 2500 .

ジャックスの攻撃力が、《ギガ・プラント》の攻撃力を超えた。

「バトル！ 《ジャックス・ナイト》で《ギガ・プラント》に攻撃
！」

「畏発動します！ 《棘の壁》^{ソーン・ウォール}！ 私のフィールドに存在する植物
族モンスターが攻撃対象にされた時、相手の攻撃表示モンスターを
全て破壊します！」

出た。擬似《聖なるバリア・ミラーフォース》。

「甘いつ！ 私は手札より速攻魔法、《我が身を盾に》発動！ 1
500ライフポイントを支払い、モンスターを破壊する効果を持つ
カードの効果を無効にし破壊する！」
「っ……！」

御園凜那 LP3700 ↓ 2200 .

それによって、《棘の壁》は無効化されて《ギガ・プラント》が
破壊される。

咲之宮結姫 LP4000 ↓ 3900 .

「バトル続行！ 《クイーンズ・ナイト》で《ローンファイア・ブ
ロッサム》に攻撃！ 続いて《キングス・ナイト》でプレイヤーに
ダイレクトアタック！」

「きゃああっ！」

咲之宮結姫 LP 3900 ↓ 1700 .

「メインフェイズ2へ移行！ 《融合》っ！ 場に居る三銃士を融合し、来い！ 《アルカナ ナイトジョーカー》！！」

—— かけえ。

三銃士を融合させて出てきたアルカナに、俺はただその感想を持った。

それに、手札は3枚もある。アルカナの効果を使うには十分な数だ。

その上、《連合軍》の効果で攻撃力が上がる。

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK 3800 ↓ 4000 .

「さらに私は《融合回収》フュージョン・リカバリーを発動！ 墓地の《キングス・ナイト》と《融合》を回収し、ターン終了」

上手い。《融合回収》によって、アルカナのコストが賄まかなえている。

「うう……私のターン、ドローします！ モンスターをセットし、ターン終了します」

結姫は防戦一方か。

日本……もとい、地球の植物はシンクロやエクシーズがあるけれど、この世界だとその召喚方法が存在しない。

という事は、優秀なチューナーモンスターの《グローアップ・バルブ》、《スポーア》などが居ないことになる。

…… 調べてことは、攻撃力3000以上のモンスターを対処する方は少ないんじゃないだろうか。

「私のターン、ドロー！ 2枚目の《クイーンズ・ナイト》を召喚し、バトル！」

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK4000 ↓ 4200 .
《クイーンズ・ナイト》 ATK1500 ↓ 1900 .

「アルカナでセットモンスターに攻撃する！」

「モンスターは《ダンディライオン》です。このカードが墓地へ送られた時、綿毛トークンを2体特殊召喚します」

「成程。ならば、《クイーンズ・ナイト》で1体のトークンに攻撃」

成す術も無く、1体のトークンが破壊される。

「ターンエンドだ」

—— さて、結姫はどう出るかな？

「私のターン…… ドローっ！ —— 魔法カード、《ブラック・ホール》ッ！！」

「っ！？」

うわ、引きつええ……。

アルカナの効果は対象になった時に発動できる効果。対象を取らないブラホは、《クイーンズ・ナイト》と綿毛トークン1体を巻き込んでモンスターを破壊する。

「永続魔法、《増草剤》を発動！ このターン、私は通常召喚権を破棄して墓地より《ローンファイア・ブロッサム》を特殊召喚！」

この流れも強いなあ、やっぱり。

「ローンファイアの効果を発動します。リリースはローンファイアで、その時《増草剤》も破壊されます。デッキより、来て下さい……！ 《椿姫^{つばき}ティタニアル》……！」

出て来た……俺が植物デッキを作った際、いつも初手に居たから周りからは嫁、嫁と言われたカード。

薔薇が旋風と共に巻き上がった。

「バトルフェイズです！ ティタニアルで、御園さんにダイレクトアタック！」

「く……、一歩足りなかったか」

御園凜那 LP 2200 ↓ 0 .

意外にもあっさりと。

デュエルは、終了した。

「お疲れ様、結姫。御園さんも」

顔見知りだったのかは分からないけれど、2人で一緒に観客席ま

で上がってきたのを迎えた。

俺の2つ隣……ルナちゃんは俺に用事があるからこの席は使つて良い、と告げてその場から居なくなり、彰正先生も下の生徒会メンバーが居る場所へ行つてしまい、席は2つ空いている。

「ありがとうございます」

「ああ……えっと、確か……」

「一ノ瀬燈夜だ。宜しくな」

「こちらこそ。私は御園凜那だ。凜那で良い」

差し出された手に応えて、俺は御園さん……凜那と握手する。

……隣でジト眼になっている慧と結姫は……取り敢えず無視。慧はまあ分かるけど、結姫はなんで……？

彰正先生が座っていた場所……つまりは俺の隣に結姫が座り、その向こう側に凜那が腰を下ろす。

『では第三回戦。これが終わり次第、休憩になります。では、第一位の代表者と第四位の代表者はデュエル場へ上がってください』

マイクを通しての響く声に反応して、2人の人影がデュエル場へ上がる。

1人は幸仁だった。相変わらずの長い髪を揺らしながら、物静かに会場へ上がる。と同時に、女性の黄色い歓声が湧き上がった。

す、スゲエ……スゲエ人気だな、幸仁。それに全く反応しない幸仁も幸仁だが。カイザーみたいな奴だよ。

しかし、GXにてカイザーっていうのも強ち間違いない。幸仁はチームLEGENDsでも一番強かったしな。

そしてもう1人。

高い身長、結ばれた長い髪。銀色の髪。
アレは、

「鴻ソル……？」

何故かは知らないけど、俺に挨拶しに来てくれた子だ。あの子、代表になったんだな。

『第一位代表者、瀧川幸仁君。アカデミア最強と言われている、『青眼の白龍』使いの特待生です！一方、第四位代表者は鴻ルナ……じゃない、ソル、さん？えと、情報があんまり有りませんが……と、とにかく始めて下さい』

……？ 情報？

俺は生徒会長が言った台詞に内心首を傾げるけれど、そんなのお構い無しにデュエルが開始される。

「先攻は譲ろう」

「要らないな。オレは後攻の方が好きなんだよ。ターンランプに従って、テメーが先攻やりやがれ」

「……そうか。では俺のターン、ドロー！」

先攻は幸仁らしい。

「《増援》を発動。デッキより《正義の味方 カイバーマン》を手札に加える。《調和の宝札》。手札の《伝説の白石》ホワイト・オブ・レジェンドを捨て、2枚ドローする。その後、《伝説の白石》の効果によりデッキの《青眼の白龍》を手札に加える」

おお、一気に手札が回る。

既にブルーアイズを出せる手札にしたな、幸仁。

「《トレード・イン》発動。手札のブルーアイズを捨て、2枚ドロ―する。《おろかな埋葬》。《伝説の白石》を落とし、デッキからブルーアイズを手札に」

……嫌な予感がする。

「カイバーマンを召喚し、効果を発動。このカードをリリースし、1体目のブルーアイズを特殊召喚する。《古のルール》。手札に居る2枚目のブルーアイズを特殊召喚。そして、」

……え？

「《死者蘇生》。墓地に存在する《青眼の白龍》を場に降臨させる」

……ゑ？

場に並ぶ3体の白き龍。漫画やアニメで見たブルーアイズじゃ眼じゃないくらいの大迫力。

もし俺がアレに成功したら、『粉碎玉砕大喝采はあーはっはっはー！』みたいな笑いをしていたに違いない。

この光景には、流石の俺や慧も苦笑いを隠しきれない。対戦相手じゃなくて良かった、と……本気で思う。

まあ、ブラホで一発なのはご愛嬌。

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「はぁん……やるじゃねーかよ。流石、御神みかみが選んだだけあるぜ」
「御神……？」

御神……って、誰だ？

鴻さん……ルナって子も居るし面倒だな。ソルで良いか……が言
った御神という人名。

それに反応したのは、隣に居る慧だった。

「御神って誰？」

「あ……えと、この前言ったさ」

俺の後ろに居る結姫たちを慧は一瞥し、口を近付けてくる。俺も
伴って耳を近付ける。

「僕や幸仁、基がこの世界に来てから会った人が、御神って名乗っ
てたんだ。その人がこの世界の事とか、養子縁組とか……後、お金
とか」

「ソイツが俺の敵か」

「……あ、あはは」

御神、御神……覚えたぞ、御神！

会ったら絶対文句言ってやる！

……と、まあ本音10割冗談無しの事は置いて。

御神が選んだ、って事はこの世界に連れて来たのは御神って人な
んだよな。世界の歪みとか、そこら辺も分かっている事になる。

一体何者だ、御神って………？

「オレのターン、ドロウするぜ！　まずはその伏せカードを使わせ
てやる……《ブラック・ホール》！」

「……カウンター罠、《王者の看破》発動」
「だろうな」

《王者の看破》。ＬＶ７以上の通常モンスターが自分フィールド
上に表側表示で存在する時に発動可能のカウンター罠で、ノーコス
トの《神の宣告》みたいな感じだ。

さて、ソル……ここでブラホを使った、ってことはあの龍たちを
どうにか出来る手立てがある、ってことだよな。看破も見抜いてた
みたいだし。

「《闇の誘惑》発動！　カードを２枚ドロウして……そうだな、《
ジ・エンド・スピリッツ終焉の精霊》は要らねーな。除外だ」

《終焉の精霊》……か。《ネクロ・フェイス》とか、除外を使っ
たデッキって事だよな？

「さて、瀧川。テメーにやもう未来はねーぞ」
「何？」

「——オレは、手札の《堕天使ゼラート》を捨てて《ダーク・グレ
ファー》を特殊召喚するぜ。そして効果を発動！　《堕天使スperl
ピア》を捨ててデッキから２枚目の《堕天使ゼラート》を墓地へ送
る」

堕天使デッキか……。《終焉の精霊》も入ってたって事は、除外
も存分に使っただろうなあ……。

「《ダーク・ヴァルキリア》を召喚。このカードをコストに、《前

線復活の代償』を発動するぜ」

……成る程。

《ダーク・ヴァルキリア》はデュアルモンスター。再度召喚されない限りは、通常モンスター扱いされる。

さらに《前線復活の代償》は通常モンスターをリリースして、自分か相手の墓地のモンスターを蘇生させるカードだ。

そして、

「オレの墓地に居る《堕天使スペルビア》を蘇生して、効果発動！
墓地に天使族……《堕天使ゼラート》を特殊召喚ッ！」

墓地から蘇生されたから、スペルビアはさらなる天使を呼び出す。

「ゼラートの効果発動！ 手札の《終末の騎士》を捨てて、相手フ
ィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「く……っ！」

ゼラートの効果によって全滅する伝説の龍たち。

これで幸仁の場はがら空きだ。

「んじゃ、バトル入るぞ、瀧川サンよ。《堕天使ゼラート》でダイ
レクトアタックっ！」

「っ……！」

瀧川幸仁LP4000↓1200・

「……なんもねーな？ 《堕天使スペルビア》でトドメだッ……！」

瀧川幸仁LP1200↓0・

後攻2ターン目で、幸仁は敗北した。

「ソイツが俺の敵か」(後書き)

今回は二回、デュエルを行いました。

疲れた……。

初ターン、ブルーアイズ3体。
格好良いですね(笑)

しかし、やはりデュエルを考えるのは苦手です。

……うん、頑張ろう。

感想、評価等お待ちしております！

「っ、コレは……ッ!」(前書き)

この辺りから、なんかグダグダしてます……(泣)

「う、コレは……ッ！」

第一位の人間が、第四位の人間に負ける。

それは、アカデミア全体に多大な動揺とショックを与えていた。
俺や慧も例外ではない。

……まあ、

「すげ……あの状況から勝つなんてな。あの子ってあんなに強いんだ」

「す、凄い事ですよ……階級って、それこそ断崖絶壁な程に実力差があるんです。だからこそ生徒たちは上がる事に憧れ、上がる事を諦めるんです」

……大袈裟じゃないのか、それ。

正直、デュエルなんて時の運。仕組んだりしていない限り、どっちが勝ってもおかしく無い勝負だ。

勝負に、“絶対”は無い。

「……慧も同じ気持ちか？」

「う、うん……仮にもこのアカデミアに3ヶ月も居るし……多分燈夜も少しココに居れば、気持ちは分かる筈だよ」

「……………」

そんなモンかね。

まっ、少なくとも今は階級なんて興味無いし、素直にソルの勝利を祝うかな。

なんてコトを思いながら、俺は1人で拍手をする。周りが凄く静

かだったから、たった1人の拍手だろうと会場に大きく響いた。
ただ、呆然としている中、俺以外が拍手してくれる筈も無く……
うん、寂しい。

『……つ、次の対戦は午後の13時30分から行います……それまで休憩で………』

珍しく肩を落として去っていく幸仁に、基が近付いていくのが見えた。

「こ、コレは……ッ！」

か、買っしかないのか……！？俺はコレを買って、腹を壊して
午後の対戦を辞退すれば良いのか……！？
……っと、興奮しすぎた。餅^{もち}搗け餅搗け。
しかし、買って損したくない……うおおっ！？

「ええい、1つ買ったあ！」

「……今までどんな葛藤をしていたんだ？」

気にするな、凜那。

俺は金を払い、買ったパンをそのまま開ける。見たところ何の変
哲も無い普通のパン。中には餡とかが入ってそうだ。

「これ……トロー……」

アニメでも有名なドローパン。中に入っていたのは……………？

「……………カレーパン、ですね」

「……………カレーパン、だな」

「……………カレーパン、みたいだね」

「なんでこんなに普通なんだっ！？　せめてカレーパンでもカレー
ルーをそのまま入れるとか工夫しろよっ！？　しかも普通に美味い
しー！」

緊張した俺が馬鹿みたいじゃないか。

なんて妙に心を削るハプニングがあったりしたが、適当に食料と
飲み物を買って中庭へ。

どこかへ行こうとした凜那も誘い、結姫、慧、そして俺。4人で
昼食タイム。

うん。

ハーレム状態、とか馬鹿な事言うつもりはないけれど……………最近、
死線がすぐ隣に居る気がして仕方が無いね。

「さて、食つか」

「……………それ、食べるの？」

「……………男には、収まり付かない時があるんだよ」

「やつつけですよねっ！？」

「流石にドローパン5つというのは……………いや、別にとにかくは言わ
ないが」

良いんだよ。カレーパンなんてつまらないパンを当ててしまった

からにゃ、変なパンを当てるしかないだろっ！

「いざ、ドローっ！」

「……………普通のジャムパンだな」

「……………食べるのは後！ ドローっ！」

「えと、これは…………？」

「……………外は他と同じなのに、中身はメロンパンだ。くそ、ドロー！」
「……………クリームパン、ですか？」

何故だ……………普通のしか入ってないとかそんなオチか！？

「後2つある……………！ ドローっ！」

「……………ふむ。これはチョコレートパンみたいだな」

「……………ラスト、か」

くそ……………これが頼みの綱だ。

「ドロー行くぜっ……………！」

「ど、どうだった、燈夜…………？」

これは、まさか……………。

「……………何も入ってない」

結局。

俺は今日当たったパンの中身を混ぜて、自ら外れを出したのだった。

「どうするのです？ 全く情報が無いではありませんか」

「ん、どうしようか？」

「変わりはありませんが。私は兄さんを探します。行きますよ、姉さん」

「はい」

「ちよつと！ お待ちなさい！」

街中。

人、人、人と溢れ返っている中、3人の少女が居た。

1人は金色の髪をくるくると巻いた少女。蒼い瞳はキツイ印象を与え、豪華なドレスと高飛車な口調はお嬢様を連想させる。

次に、間延びした口調の女性。ワンピースを身に纏った彼女は、自然な茶髪にウェーブを掛けている。

そして、冷淡な口調をした女の子。黒い髪は背中に垂れる程度の長さで、艶やかに光っていた。漆黒の瞳は、宝石のように輝いている。

「全く……感謝なさつてよ。わたくしが着いていなければ、今頃貴方たちはどうなっていたか……」

「その心配は不要です。私たちは御神さんにある程度の協力はして貰えますから」

「む……それはそうですが。わたくしも御神様に頼まれた案内人ですのよ？ 少しくらい感謝を——あの、聞いております？」

黒髪の少女が見詰めるのは、ビルに取り付けられた巨大テレビ。
そこに流れているのは、見覚えのある顔だった。

「あれ〜？ あれって、幸仁君じゃない〜？」

「……………そうですね」

——第壹デュエルアカデミア櫛都校最強の決闘者^{デュエリスト}、瀧川幸仁。その特集だった。

「……………行きましょう。目的地が決まりました」

「だね〜」

「ちよっ…………アカデミアに向かうなら、まず許可を得る為にも御神様の下へ……………ってお待ちなさいなっ！」

主役が、集まっていく。

もうすぐデュエルが始まる。

13時20分前後……………無駄にやるせない昼食を終え、俺がデュエル場に帰るともう殆どの人が観客席に座っていた。

生徒会長たちや教師達も居て、遅れてないのに遅刻した気分になつてしまう。

「……………既に勝ち残った代表者たちは来ているようですね。咲之宮結

姫さん、鴻ソルさん、一ノ瀬燈夜さん……先にデュエル場まで来て下さい』

ん……俺たちか。

慧や凜那と一言交わし、俺と結姫は観客席から下に降りていく。階段を降り、通路の途中。ソルが腕を組んで壁に寄り掛かっていた。

「よお、燈夜」

「ああ。なんだ、待ってたのか？」

「まーな」

ソルと並んでデュエル場へ向かう。後ろから結姫の痛い視線を感じるが、気にしない。

だって、怖いもん。

「まさかお前がゆ……灌川に勝つなんてな。正直ビックリしたよ」
「あの程度じゃ負けねーよ」

お、スゲー自信。こういうのは嫌いじゃないな。

「燈夜」

「ん？」

もう少してデュエル場だ。観客席も盛り上がって来ている。

「もう少しで、役者が揃うぜ」

「……？」

『では、少し早いですが始めましょう！ 今回は変則ルールで、3

人の代表者が一斉にデュエルするサバイバルとなります！」

ソルが言った言葉の意味を考える暇も無く、生徒会長がゲームのルールを告げる。

サバイバルか…… 1対1対1、という事だよな？

だとしたら、サイレント・マジシャンでも良い気がする。《レベルアップ！》を引かなかったら時でも、魔力カウンターが手早く乗るしな。

けど…… 同じデツキって、なんか味気無え…… どうすつか。

「——さん」

『それでは、デュエルフィールドにお並びください！』

「——に」

「お互い頑張りましょう、燈夜さん」

「——いち」

ばん、と。

デュエル場を隔てる扉が勢い良く開く。

俺含め、その場に居た全員がその方向に視線を向ける。

そこには、3人の少女が。

「——ゼロ」

え…… いや、え？

まさか……。

「し、シスク 雫……ワカナねえ 若菜姉………？」

俺の唯一の家族であり、大切な妹と姉……雫と姉さんの姿があった。

な、なんで……？　ここ、異世界だろ？　まさか、雫たちもこの世界に！？

ゆっくり。勢い良く開かれた扉とは対称的に静かな歩みだ。

「……………」

そして、雫と姉さん、後俺の知らない女性が目の前にやってくる。

「雫……姉さん……？」

「やっぱり……貴方が兄さん、ですね」

やっぱり（……）……？

「兄さん……！」

「わっ！？」

クールな雫には似合わず、勢い良く抱き締められる。あらまあ、なんて呑気に姉さんも微笑む。

「なら、あたしも」

「姉さんっ！？」

俺の背中に抱きついて来る姉さん。ね、姉さん……き、巨大な胸が当たってるんですけど……。

コレ……どうすりゃ良いっスかね。

「え〜と……うん、生徒会長！」

『あ、はい？』

「俺、対戦辞退します！ ついでに先生！ ちょ〜っと早退しますっ！」

「はっ？」

そういうことで。

俺は歩き難いまま、雫と姉さんを連れてその場から後にした。

「……わたくしの事は、忘れられて居ますのね」

という訳で、俺の部屋。

何が“という訳で”なのかは自分でも把握できてないけれど……

……俺はマナに3人分のお茶を入れて貰った。

ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

「あつっ……………ふう。んで、なんで雫と姉さんがココに？」

「それより……………君って、本当にあたしの弟なんだよね〜？」

「は？」

なんでそんな事訊くんだ……？

……。

あつ、

「もしかして記憶が……ん？ けど雫はさっき兄さんって……」

「懐かしい匂いがしたので。魂が憶えていたのだと思います」

「……んな馬鹿な」

……いや、雫なら有り得るな。

例え俺のクローンを数百、数千と作ったとしてもその中から本物
オリジナル
の俺を見つけ出しかねない。

「……俺は間違いなく、雫の兄であり姉さん……若菜姉の弟だよ。

――ノ瀬燈夜だ」

「私は分かっていましたが」

「ん……けど実感湧かないね」

しかし、なんで雫たちも記憶を失くしてんだ？ 俺は全部覚えてたのに……。

「……で、結局なんでこの世界に？」

「御神さんに導かれただけです」

「……またソイツか」

しかも、雫や姉さんはその御神って奴に会ってるって事になる。

「色々この世界の事も教えてもらって」

……俺には何も言わずに………。よし。

会ったら殴る。

「兄さんもこの世界に来ている、と聞いたので……」

「あたしたち、燈夜ちゃんが居ないと生きられないもんね」

ちなみに、これは比喻じゃない。

父さんと母さんは訳あって居ない俺たち一ノ瀬家。雫はしっかりしてるけどまだ中学生だし、姉さんはおっとりして天然。バイトなんて出来るはずも無い。

というわけで、収入源は俺だけだった。その上家事が出来ない2人じゃ、生きられても自堕落に過ごす事になっていただろう。

……まあ、俺のバイト先の店長は凄く優しい上にお金持ちだったらしいから、俺たちを凄く可愛がってくれた。

だからこそ、俺も趣味の遊戯王を続けられたり出来たんだよね……

…閑話休題。

「……はあ。んで、雫たちはなんでアカデミアに？ 制服まで着てさ」

「兄さんが居る所、私有りです」

「……つまり？」

「編入する事にしたの」

ですよ。だと思っただよ。

「本当はね？ 燈夜ちゃんと同じ第五位にして貰いたかったんだけど」

「御神さんがこのアカデミアの校長に掛け合って……第一位の特待生枠に入れて頂いたのです」

「やっぱり……ソイツとは一度語り合う必要があるな」

つか、あれ？

「特待生枠って、後1つじゃなかったっけ？」

「御神さんって、凄いね」

あ、さいですか。

まあ、雫と姉さんの遊戯王の実力は高いけどさ。実は本気を出せば俺でも勝てないくらい。

……………。

あれ、地球組で一番弱いのが……俺じゃね？

「……？ 何故膝を折っているのですか？」

「自分に絶望していたのさ」

はは。俺って、弱いね（自暴自棄）。

なんて冗談は置いといて、俺は自分用のお茶を一気に飲み干す。少し温くなっていたそのお茶は勢い良く俺の喉を嚥^{えん}下して、渴きを無くす。

「兄さん……」

「うん？」

「非常に残念なのですが、私たちはこれから校長先生の元へ向かわないといけないので」

「あ、そっか」

「また近い内に来るね？」

そう言って、雫と姉さんは立ち上がる。

入り口まで行って2人を見送ると、俺は玄関の扉を閉めてそのま
ま背を預けた。

ふう、と息を吐く。

「……………“役者”……………か」

ソルが言った言葉。その言葉の直後に雫と姉さんが来た。

ソルは、何か知ってるのか？ そっぴや幸仁とデユルしてる時も、
御神に選ばれたがどうとかって……………。

「……………あぁっ、もう！ 訳分かんねーッ！！」

『大丈夫、マスター？』

……………大丈夫じゃない。頭がこんがらがりそうだ。

「……………マナは何か知らないのか？」

『うん……………ごめん。お師匠様も良く分からないって……………』

そっか。

はぁー、と大きな溜め息を吐いて、俺はマナに再び、お茶を頼む
のだった。

「っ、コレは……ッ！」（後書き）

手が……指が勝手にキャラを増やしていく………ッ！！

姉や妹は居る設定だったけれども、まさか登場するなんて、私も予想外（苦笑）

ごめんなさい。

こんな小説ですが、
感想、評価等お待ちしております！

「マッサージ、してあげようか？」

「納得いきませんわ……何故このわたくしが第二位なのです……」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

いや、ね？ 愚痴を零すのは良いんだけどさ……。

「……なんで俺の部屋に来てるの？ つか、君誰？」

階級別の大会と雫、姉さんとの再会を終えて結構経った。

ただでさえ顔立ちの整った雫と姉さんなのに、その上第一位の特待生となれば人気が上がるのは必至。

……そんな2人が昼間はずっと俺の傍にいるから、俺に降りかかるもの。それは、

『クロス……クロス……』

「ひいッ!？」

トイレだって楽に行けやしない……誰か男の友達、欲しいなあ……。

それはともかく。階級別の大会だけど、何故かソルも対決を辞退して、済^なし崩^なし的に優勝は結姫になった。素直に喜べないかもだけど、おめでとう。心の中で祝福しておくよ。

「いや、まあえつと……落ち着けよ、な？」

結姫に直接言えない訳は、ただ1つ。

……男子に追い掛け回されてます。

「第一位の長谷部慧ちゃんに……」

「第二位の咲之宮結姫様……」

「第三位の御園凜那さん……」

「それなりに人気のある第四位の鴻……」

「拳句、編入してきた特待生の姉妹までエ……？」

「いや、な？ ほら、慧は昔から知り合いだし、結姫には世話なつてるから。凜那は普通の友達で、ソルやルナもあつちから近付いて来てるし、雫と姉さんは兄妹だからさ……」

「死に晒せエー……ッ……!!」

人の話聴けよっ!?

それから逃げ回って、俺は自分の部屋に帰還した。文字通り“命からがら”って奴だ。

つ、疲れる……。最近はコレばかりだ。俺の平穩はどこ逃げた。しかも、皆気付いてない振りなのかそうじゃないのかは知らない

けれど、誰も俺の苦勞なんて気付いてないしな。

「はぁー」

『大変そうだね、マスター』

「マナ……」

最早俺の癒しは自室しかない。マナが傍に居てくれるだけマシか。それはそうと、マハードは最近俺の傍に居ない。俺が頼んで、雫たちがなんで記憶を失ったかとかを調べて貰っている。

……………。

「マッサージ、してあげようか？」

「ん……ああ、頼む」

一瞬の内に実体化したマナは、俺に抱きつきながら耳元で囁く。最初はうるたえた俺だけど、最近じゃ結構慣れた。マナって人懐っこいんだな。出来れば俺以外にはしないで欲しい……と思うのは、俺の我侭だろうか。

「う、ふう……」

いやゝ、気持ち良い。マナって可愛いし気が利くし、流石だよな。うつ伏せで横になる俺に馬乗りして、背中を押して貰いながら俺はそんな事を思う。

と――、

コンコン、と扉がノックされた。

「ん……誰だ？」

「さあ？ 私は精霊化してるねー」

そう言つと、マナはすぐに俺しか見えない姿になる。

……ちよつとマツサージが名残惜しいのは秘密だ。
扉を開けると、そこに居たのは……。

「君は……」

確か、雫や姉さんと一緒に居た女の子……。

お嬢様！ と主張するかのようなクルクル巻きの金髪に蒼い瞳。

「失礼しますわ」

「お、おいちよつと！？」

勝手に中入るなよ！

なんて俺の主張は聞き入れられず、ソイツはじろじろと俺の部屋を眺める。

「……狭いですわね」

「第五位の部屋だから当たり前だろ！」

「……まあ、良いですわ」

いや、良くねえよ。勝手に座るなつて。

んで、冒頭。

無駄に深い溜め息を零しながら、ソイツはぶつぶつと愚痴を零し始めた。ここはお悩み相談所じゃないぞ。

「わたくしこそ第一位の座にうつてつけなのですわ……ここまで雫や若菜を案内したのもわたくしですのに、御神様ったら………」

「今、俺が会いたい奴No.1の名前が出たぞ」

「……？ 貴方、何故こんな所に？」

「こんな所で悪かったなっ！ つか、お前がこの部屋に来たんだろ
うが！」

「あら」

あらじゃねーよっ！

ソイツはすっ、と立ち上がって制服のスカートをつまむ。それこそアニメで見たお嬢様がお辞儀をするような仕草だ。

「今まで挨拶が遅れて申し訳御座いませんでした。わたくしは御神様に仕える者。リリア＝フォルゼン・レイランドですわ。リリア、とお呼び頂いて結構です、一ノ瀬燈夜様」

「はあ……俺の名前知ってるんだな」

「ええ」

まあ、不思議じゃないか。雫や姉さんを案内してくれたらしいし。

「姉さんたちを案内してくれたんだっけ？ ありがとな」

「……………」

「……どうした？」

そんな鳩が豆鉄砲喰らったような顔して。

「……いえ、思ったよりも礼儀が為っていたので、驚いただけです
わ」

「……そりゃどうも」

第一印象は悪いんだな、俺。ちょっとガックリ。
リリアは静かな動作で再び腰を下ろして、俺と視線を合わせる。

「しかし……まさか、貴方が……」

「ん？ 俺がどうしたって？」

「……………いいえ、真正面から話すような事では御座いませんから。
役者が全員揃った時にでも」

——また、役者か。

「本日は、貴方に御神様からの伝言を伝えに来たのです」

ほお、御神から。

「明日の放課。午後18時頃に、島の外れにある灯台にまで来て欲しい、と」

そこが決着の場所かつ！

ふふふ……やっと、やっとこの拳が光る時が……！

「尚、役者は全てこちらが集めるので、貴方はデュエルディスクと
デッキを持ってくるだけで宜しいらしいですわ」

「……ああ、了解。午後6時に外れの灯台だな」

憶えたぞ……………マナが。

「本日はそれだけですわ。それでは、また」

それだけ告げると、リリアは俺の部屋、第五位の寮から出て行く。

「……………うし」

決着は明日。

ディスクとデッキを持って来いつて事は、デュエルをするんだな？
なら、俺がやる事は決まった。

「マナ。デッキ構築、手伝ってくれないか？」

『うん、良いよ』

夜は、更けていく。

冷たい風が吹く。下ろした状態の髪が風に流れ、忙しく揺れて
いた。

まだ日も昇っていない真夜中。肌寒さは寝間着姿の自分を容赦無
く襲う。

「……………たのに……………」

呟く声は、波の音にさらわれた。

背後で灯台の明かりが海の向こうまで照らそうと背伸びしている。

「……………逃げて……………って……………言ったのに……………」

“彼”に、逃げる気なんて毛頭無い。そもそも逃げてとは言ったが、説明も無しにはいそうですか、と歩を返す理由も無い。そんな事、分かっている。分かっているけれど。

「……………ボクが……………」

彼を、護る。

「マッサージ、してあげようか?」(後書き)

マナ可愛いよ、マナ。

今更ですが。

この小説、登場人物……というかヒロイン沢山居ます。

……二桁到達しちやいそうな程(苦笑)

感想、評価等お待ちしております!!

「わたしが一ノ瀬君を……………護る」

潮風に身を委ね、青い世界を感慨深そうに眺める。雲1つ無い空。世界を照らす太陽は、広い海を輝かせた。

「やて……」

——どんな物語が、始まるかな？

今日は相変わらずだった。

朝、第五位と第一位の寮は遠いというのに、態々^{わざわざ}迎えに来てくれた慧と結姫、雫と姉さん。

昼、凜那を含めた大所帯で昼食。

そして、待ち合わせ時間まで後1時間となった頃。俺は死線を巡らせる男共（時折女有り）に追い掛け回され。

あつと言う間に、午後18時になった。

後ろには俺以外誰も見えない精霊化したマナが居る。

ちなみに俺しか見えないのが精霊化、他人も見えるけど触れないのが半精霊化、誰にでも見えるし触れるのが実体化、と呼ぶ事になっている。

「お……なんかいっぱい居るぞ？」

灯台近くまで来ると、幾つかの人影が見える。

えっと……慧に幸仁、基……雫と姉さん、リリア……ソルも居るな。後は……、

「あれ……結姫と凜那も居る？」

ソルやリリアが言ってた“役者”って、結姫たちも含んでたのか？
後1人、俺の知らない人が居る。遠目から見てもかなりの美形の男性で、正に優男、という感じだ。

……あの人が御神、って奴だろうか。

「おーい、みんな……痛っ!？」

何かにぶつかった。壁か？ いやいや、んな馬鹿な……目の前にや何も無いのに。

手を添えると、硬い物に触れた。

「なんだ……？」

「兄さん！」

俺が困惑していると、雫が声を張り上げる。けど俺の方へ走ろうとしたら、御神（多分断定）さんが手で制止した。

一歩、一歩。

御神さんが俺の方へ近付いて来る。

「やあ。君が一ノ瀬燈夜君だね？ 僕は御神新。^{みかみアラタ}宜しくね？」

「宜しくじゃない！ お前……慧たちの前には現れといて、俺の前

に出て来ないってのはどういう見だよ!？」

「おお、怖。それにはちゃんと理由があるから、そう怒らないでよ」

理由……？

何の理由があつて？

「まあ、まずは最初から説明しよう。君は知っているのかな？ この世界が滅びかけている事」

「滅びかけてるっていうか……歪みだかなら聞いたな」

「うん、まあそうだね。僕が幸仁君たちに説明した時もその言葉を使ったし、間違いないよ」

なんだ、その言い方……？ もっと別の言い方がある、みたいな……。

怪訝そうに俺が見詰めているのに気付いたのか、御神さんはふつ、と肩を竦めた。

「まず、1つ言っておこう。この場に居る全員が、元は地球の人間だよ」

「……は……？」

地球の……？

慧たちとはかく、結姫や凜那たちも居るんだぞ？ 俺に隠してたって感じもなかったし、結姫に関しては姉妹の話も聴いた。

有り得ないだろ。

「……いや、全員じゃないか。僕と鴻ソルは違っし——君の精霊は、あくまで精霊界の出だ」

その視線の先には、俺の後ろに居るマナに向けられている。

コイツ……マナが見えてるのか？　今は俺以外には見えない精霊化の状態なのに。

「この世界は壊れかけている。この世界だけじゃなく、平行世界パラレルワールドや地球、その他諸々の世界がだ」

数多くの世界、って事か？　なんか、元々大きかった話がさらに巨大化しそうな勢いだな。

「だから神は、この世界の救世主を選んだ。数ある世界で唯一、遊戯王デュエルモンスターズを考察している地球でね」

そう、驚いた事にこの世界には地球にあつた遊戯王Wikiとかが無い。多分、遊戯王が世界の中心だからこそ、色んな著者がルールとかに関して本を出しているからだろう。

「一ノ瀬雫、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁の5人は君も知って居る通り、地球で生まれ育つた」

「……………」

こく、と頷く。

「ただ、咲之宮結姫と御園凜那は不運だった。生まれてすぐ事故と病気に罹り死亡。神がこの世界に転生させたのさ。あ、ついでにリリアもそうだよ」

「わたくしはついでしたのね……………」

成る程。だから、“元は地球の人間”、ね。

それにしても、リリア可哀相。状況が状況じゃなければ、涙が出てきちゃいそうだ。

「じゃあ、ソルはどうなんだよ？」

「オレは、咲之宮や御園よりも特別だった、って事だぜ」

特別……？

確認するように俺が反芻すると、ああ、とソルは首肯した。

「鴻ソルは元々は選ばれた存在ではなく、極普通にこの世界で暮らしていた。しかし、もう1人地球で選ばれていた存在が鴻ソルと魂がリンクしてね」

「もう1人………」

誰だ？

「君も、会っているだろう？」

「——え、まさか」

「そう。鴻ルナだよ」

逃げて。

そう言った彼女の無表情な顔が思い浮かぶ。

あれ、けどその選ばれた人間が“役者”だとしたら、ルナは一体どこに……？

「地球で育った鴻ルナは、この世界の鴻ソルと魂が引かれ合い、ほんの3年前、とうとう融合した。GXで言う、《超融合》で十代とユベルが融合したみたいな感じだね」

うわ、なんかウゼエ。

しかし、2年前……？ 俺がまだギリギリ中学生の時か？

「志藤彩伽……」
しどうアヤカ

「っ……!？」

「それが、地球に居た時の鴻ルナの名前だよ」

志藤……彩……伽……。

知ってる。

中3の時、俺と同じクラスで……いつも独りで。そんな姿に俺が見かねて話し掛けたんだ。

ただ、卒業式の少し前……倒れて、意識不明になった、女の子――
――。

「ふ……。長谷部慧と同じ反応をするんだね、一ノ瀬燈夜君。この子も同じ話をしたら、何も言葉を紡げなくなっただよ」

そりゃ、そうだろ。驚くつての。

志藤とは、俺だけじゃなく慧も友達になったんだ。良く話したし、一緒に帰った事もあった。

「……んで……志藤は今どこに？」

「オレの中だよ」

「……は？」

中？

「さっき御神が言っただろ？ 融合したって。時々入れ替わる時はあるけどよ、今はオレん中で話を聞いてるだろーぜ」

それが、融合、か。

二重人格みたいなものだろうか？

「……………」

今、志藤はどんな気持ちで俺たちを見ているだろう。

志藤は、余り喋らなかつたし、笑いもしなかつた。いつも無表情で無口で、感情を表に出すのが凄く苦手で。

なのに動物が好きで、甘い物が好きで、俺が頭を撫でると顔を赤くした。

「……………せよ」

「うん？」

「出せよ。志藤を今すぐ、自由にしろよっ！！」

訳分かんねー。頭が混乱して、目の前にある壁に頭突きを何回もしたい衝動に駆られる。

「良いけど、後悔するかもよ？ それでも良い？」

「何の説明も無しに、じゃあ諦めます、なんて言うかよ」

「……それもそうか。良いよ。じゃあ——」

ソルが呻く。痛みというよりは気持ち悪さを抑えるように胸元を押さえた。

そして、ソルが分身するかのようにもう1人の身体がソルから出てきた。ソルよりも大分身長が低く、ツインテールの髪。

確かに、と思った。

髪を黒くして、ツインテールじゃなくてショートカットにしたら志藤彩伽だ。

——ばたり、と志藤は静かに倒れた。

「志藤ッ！！」

「さっき言っただろう？ 魂が融合したんだ。その殆どがソルの中にあるんだし、彼女の中にあるのはもう殆ど無い。欠片と言って良いね」

「……………」

後悔。後悔って、これの事が。

気付けなかった自分に齒軋りしていると、ゆっくりとした動作で志藤が動き出した。

ばんっ、と俺は目の前にある見えない壁に手を付ける。

向こうに、行けない。

「志藤……………」

魂の、欠片。それがどれ程の物かは分からないけれど、動くのさえ辛そうな志藤を見ていると酷い状況なんだろうな、って分かる。

あのメンバーの中で、志藤彩伽の時の彼女を知る唯一の存在である慧が肩を貸していた。

結姫や凜那も、慧に続いて志藤を支える。

「だ、大丈夫ですか……………」

「…………一ノ瀬…………君」

小さい声だ。俺には聞こえない。

「無理するな。碌に立てもしないと言うのに……………」

どん、と。

見えない壁を殴り付けても、傷1つ付かない。それどころか俺の手が痛むだけだ。

「……さて、辛そうではあるものの、命に別状はない。本当の意味で、全員が揃った今、本題に入ろうか」

「……本題……？」

『——逃げてください、燈夜殿っ！』

は……？

突然聞こえたマハードの声。振り向くと、血相を変えた顔で杖を俺に構えていた。

『お師匠様……！？』

『——黒・魔・導……！』

「わわっ！？」

やべ、死ぬ……！？

マハードの攻撃が俺に直撃……あれ、してない？

咄嗟に目を閉じた俺だけど、痛みなんて全くない。それどころか、熱も身体を襲って来なかった。

「……へ……？」

……壁。俺を囲うように、四角い壁が炎から俺を守ってくれていた。

え、と……？

『く……遅かったか』

も、もしかして、俺……………。

「閉じ込められてる……………!？」

「ご名答。流石の高位魔術師も、気付くのが遅かったみたいだね」

前、後ろ、左右……………下……………は地面か。後は上。

全部見えない壁に閉ざされて、俺は身動きが取れなくなってしまった。

「さあ、本題だ。静かに聴いてくれよ、一ノ瀬燈夜君」

視線を戻す。

慧と結姫に支えられて何とか立っている状態の志藤が視界に写った。

「この場に居る一ノ瀬雫、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁、咲之宮結姫、御園凜那、リリア＝フォルゼン・レイランド、志藤彩伽……………イレギュラーとは言え、鴻ソル……………いや、本名鴻ソフィア」

その名前は呼ぶなつての、とソルが嘆息する声が聞こえた。

……………これからソフィアって呼んでやろう、なんて悪戯心が湧き上がる状況を読めない俺。

「9名、然して10名は僕が選んだ。だが一ノ瀬燈夜君。君は違う。僕が選んだ訳では無い。誰が選んだか、僕にも分からなかった。と、すれば」

……………嫌な予感。

「世界を滅ぼす要因は、もしかしたら君なのではないか、と僕は考えた」

……ですよね。

「なっ、ち、違います！ 燈夜さんは世界を滅ぼしたりしません！」

「そうだよ！ 地球に居た時だって、いつも僕を助けてくれたし…

…！ 基と幸仁も何か言つてよ！」

「わりいけどよ……俺、お前に説明されてもまだ思い出せねえんだよ。アイツとダチだったなんてな」

「……同じく」

そんな、と嘆く慧。

「燈夜ちゃんが世界を滅ぼすなら、あたしも手伝う」

「ですね。私たちは兄さんこそ世界の中心ですから」

いやいや、ンな事しないから。

「……まっ、オレはどうでも良いな」

「私は……まだ判断しかねるな……」

「わたくしもですね。元々そんなに接触していた訳では御座いませんし」

なんでこんな事になってるんだ……？

本当……訳が分からない。分からなすぎる。

「ち……がっ」

そんな中。

小さな声が、俺の……俺たちの耳朵を叩いた。

「一ノ瀬君は……………違う」

「分からないだろう？ 例え違ったとしても、不安要素は消しておくさ」

「なら、ボクが……………！」

一歩ずつ、ゆつくりと。

慧たちから離れて、1人で歩いてくる。

そして、俺と皆を隔てる見えない壁に辿り着くと、志藤はその壁に背を預けた。

「わたしが、一ノ瀬君を……………護る」

そう言って、志藤はディスクを構えた。

「わたしが一ノ瀬君を……………護る」(後書き)

きゃー、鴻ルナ改め志藤彩伽格好いいー、で今回は終わりました。

ここである程度の秘密、設定は露呈しちゃいました。

勿論、まだ分からないコトは多いですけど(笑)

感想、評価等お待ちしております！

「君は、弱いね」

ずっと、独りで。

ずっと、孤独で。

苛められていたという事実は無くても、クラスメイトに一線を引かれていたのは間違いないと思った。

口数も少なく、いつも無表情で。わたしは、自らクラスに溶け込もうともせずに本ばかり読んでいた。

寂しかった……と思う。

けど。

「よ、志藤。何の本読んでるんだ？」

貴方が、わたしの傍に居てくれて――。

「はぁん……オレたち全員を相手にしようってのか、ルナ？ ……いや、志藤彩伽、だったか？」

わたしは小さく頷く。

「……オレが相手して良いか、御神？」
「どうぞ」

「うし」

御神新に許可を得て、ソル……ソフィアが数歩前に出る。
ソフィアのデッキは知っている……。堕天使を軸とした、闇属性
のビートダウン。

「そっぴゃ、テメーとデュエルするのは初めてだったな？ 選ばれた存在でありながら、そっち側に付いたテメーの力……見せて貰おうか？」

「……………」

勿論。

わたしが、彼を護る。

「「デュエルっ！」」

「先攻はオレだ、ドロー！ オレは永続魔法、《漆黒のトバリ》を発動！ そして《終末の騎士》召喚！ 効果により、デッキから《ネクロ・ガードナー》を落として、ターンエンドだ」

まずは順当。特に伏せカードも無い……。

「…………ドロー…………」

手札を確認する。大丈夫、悪くない手札。

「……………」

後ろで、彼が見てるのを感じる。

…………安心して、一ノ瀬君……………。

貴方の為なら、わたし……命を、張れるから。

「《ヘカテリス》効果……捨てて《神の居城・ヴァルハラ》をサーチ……発動」

「はぁん。オレが墮天使ならお前は天使か」

「——ヴァルハラの効果により……私は《光神テュス》を特殊召喚……《ジェルエンデュオ》召喚……バトル」

墓地にはネクガ……ソフィアのデッキは、時間が経つに連れて爆発力が一気に増す……ここは、攻める。

「《ジェルエンデュオ》で《終末の騎士》を攻撃」
「ッ……！」

ソフィアLP4000↓3700・

「……テテュスでアタック」
「うあああっ！！」

ソフィアLP3700↓1300・

……ネクガの効果は使わなかった……。
……。

「……わたしはカードを1枚伏せて、ターン終了」
「オレのターンだ、ドロップ！」

に、い、と。

ソフィアが笑う。

「この時、《漆黒のトバリ》の効果を発動するぜ。ドローフェイスにドローしたカードが闇属性モンスターだった場合、相手に見せることで墓地に送り、再びドロー出来る。引いたカードは《墮天使エデ・アラエ》！」

墓地に送られ、再びソフィアがドローする。

「トバリの効果は続けられるぜ。《墮天使アスモディウス》！ ドロー！ 《ダーク・ヴァルキリア》！ ドローっ！ ……………ここ
で打ち止めだな」

一気に墓地が肥えてしまった。

今……ソフィアの墓地の闇属性モンスターは5体。

「行くな、志藤彩伽。オレのフィールドにモンスターは存在せず、墓地に闇属性モンスターが5体以上存在する時に、《ダーク・クリエーター》を特殊召喚出来る！」

ザ・クリエーター

《創世神》のダーク化したモンスター。

コレは……結構、危ないかもしれない。

「ダクリの効果を発動！ 墓地の《終末の騎士》を除外し、《ダーク・ヴァルキリア》を特殊召喚！」

っ……。

デュアル召喚して、モンスターを破壊するつもり……？

「——用心するのはコイツじゃねーぞ？ 墓地の闇属性の数は3体！ 来い、《ダーク・アームド・ドラゴン》……！」

「だ、ダムド握ってたのかよっ！？」

後ろで一ノ瀬君が叫ぶ。

駄目……わたしの伏せカードじゃ………勝てない。

「ダムドの効果！ 《堕天使アスモディウス》を除外して、まずはその伏せカードを破壊だ！」

「っ……《光神化》！ ……手札の《マシユマロン》を、守備表示で特殊召喚………！」

「チッ。んじゃ、ダムドの効果が続けるぜ。《堕天使エデ・アーラエ》を除外して厄介な《マシユマロン》を破壊する」

駄目……時間稼ぎも出来ない………。

「《ダーク・ヴァルキリア》を再度召喚！ 魔力カウンターが乗るが……取り除いて、《光神テテュス》を破壊する」

そんな………。

「……《オネスト》警戒、てか。ダムドの効果だ。《ネクロ・ガードナー》を除外して、《ジェルエンデュオ》を破壊！」

これで、わたしの場合はヴァルハラのみ。

「バトル……《ダーク・クリエイター》でダイレクトアタック」

彩伽LP4000↓1700・

「《ダーク・アームド・ドラゴン》………」

駄目……殆ど魂の無い今の身体じゃ、あの攻撃に耐えられない……

…。

ごめんなさい、一ノ瀬君……………。

「トドメだ」

護れなかったよ——。

彩伽LP1700↓0・

静かに、倒れていく。

ダムドの吐く炎に覆われ、何も見えなくなる。

ただ、とてつもない量の煙の中に見えた小さな影が、静かに倒れていくのだけは、捉える事が出来た。

「志藤ッ！！」

煙が晴れる。

既にディスクを仕舞い込んだ鴻ソフィア。今にも志藤の方へ飛び出して来そうな慧や結姫たち。

そして、俺のすぐ近くに倒れている、志藤——。

「クソ……クソがッ！」

なんだよ、この壁……！　なんで破れねェんだよ！？

「マハード！　マナツ……！」

『——黒・魔・導・導！』

『——黒・魔・導・爆・裂・破！』

……壊れない。

びくともしない。

……どうして？

慧、結姫、凜那、雫に姉さん……5人が志藤の下へ向かおうとしている。けれど、御神が制止しているらしい。

俺と同じように、見えない壁があるのか、空気を叩いていた。俺と違うのは、閉じ込められているわけではない、というところか。

御神新だけが、静かに志藤の下へ歩いている。

「志藤に、近付くんじゃねエッ！」

「君は、弱いね」

っ……！

「悔しいとは思わないかい？」

悔しいさ……悔しくて悔しくて、自分を殺したくなる！

俺じゃ、何も出来ない。

俺は、弱いから。

俺は——。

『汝、力が欲しいかえ？』

力……欲しい。

御神をぶつ飛ばせるくらい、強い力がッ！！

『良いじやろう。妾^{わらわ}の力、汝に貸し与えたもう』

——どくん。

一際高く、心臓が躍動する。身体中の血液が巡り廻って、噴火しそうなほどに熱い。

「カオス・バースト」

巨大な、爆発。

それは俺を囲っていた見えない壁を破壊し、爆風だけで慧たちの壁をも消滅させるものだった。

「な、に……？」

御神の驚きに満ちた顔なんて無視だ。

俺はすぐに志藤の下へ駆け寄って、抱き寄せた。

「志藤……」

……気を失っているだけ、か。
ほっと胸を撫で下ろす。と同時に、慧たちが近くまで近付いてきていた。

「燈夜……どう、志藤さん……」

「……大丈夫だ。怪我は無いし……ただ、」

「魂が無い、かい？」

……その通りだ。

口を挟んで来た御神に、少しイラッとしたけど……間違いはないんだから仕方ない。

「どうすれば……」

「うん？」

「……どうすれば、治せますか」

「燈夜さん……？」

御神なんて、嫌いだ。

今すぐにでも殴り倒したい。殴って殴って、勝手に選んで……迷惑を掛けた皆に……志藤に、謝らせたい。

けど、駄目なんだ。

それじゃ、志藤はこのまま――。

「……はあ。本当なら、今すぐにでも君を消しときたいんだけど……」

数人が身構える。

「……そんな事をしたら、全面戦争になりそうだね。また今度にするよ」

「今度も今も無いです。燈夜さんは絶対に死なせませんから」

ふう、と嘆息した。

「……分かった。志藤彩伽は治しておくよ」

「っ……そんな事、出来るのか？」

「僕は何でも出来るよ。何でも、ね」

そう言って、御神は俺たちに背を向けた。

「明日には眼を覚ますだろう。ただし、覚えておくの良い」

もう結構離れているというのに、御神の声は良く聞こえる。まるで、頭に直接響いているかのようだ。

「一ノ瀬燈夜君。僕の予感……いや、予言だ。君が僕の敵にしる味方に付くにしろ……世界は君を中心に傾いていくよ」

そういった御神は、静かに闇に消えていった。

「君は、弱いね」(後書き)

なんかデュエル……呆気無さすぎた！。

ライフが8000と考えてしまうので、あつ、もう終わり？ ……

となるのが多い(汗)

ライフ4000で遊戯王小説を書いている方々は、どう考えているのでしょうか？

今回は、志藤彩伽の過去の一片。それと一ノ瀬燈夜に聞こえた“声”という秘密を置きました。

さて……皆さんはこの“声”の正体が分かるでしょうか？(笑)

感想、評価等お待ちしております♪

「……は、恥ずかしいです」

日が落ちて、また昇り。

1時限目の始まりを告げる金の音が響いても、講義が開始される事は無かった。

その理由は簡単である。

「本日から、第五位の教育係りとして、御神コーポレーションの会長である御神新さんが来て下さいました」

頭が痛い。

「災難ですね、兄さん」

「慰めないでくれ……」

名目上は、俺の教育係り。実際のところは、多分俺の監視つてところだろうか。

これから同じ寮に住むって言うんだから、俺の頭痛も分かるだろう？

第五位の寮に住むのは俺と彰正先生だけで充分だ！

「今日から、私が兄さんの部屋で寝泊りしましょうか？」

「なんか怖いからそれは良い」

「……チッ」

舌打ちしたよ、この子。マジで貞操奪う気だっただろ。

同じ理由で姉さんも駄目だ。特に姉さんは雫と違って胸も大きいし、俺の理性が持ちそうに無い。

「……何か失礼な事考えませんでしたか？」

「エスパーか」

「考えたんですね」

考えてません、なんて言ってももう遅いか？ 俺の馬鹿。

どうどう、と睨んでくる雫の静かな怒りを抑えていると、妙なタイミングで姉さん登場。

「う……」

揺れる胸を見て、雫が半眼に。

「……どうせ私はお母さん似ですから」

……なんか、ごめん。

しょんぼりとする雫に内心謝罪する。

——昼休み。

俺は毎日買っているドロパンを食べながら、大人数で中庭に居た。

俺、雫、慧、結姫、凜那。姉さんは新しく出来た友達と話していたらしく、少し遅れてきた。

そして、

「志藤、体は大丈夫か？」

「……平気」

志藤彩伽。

志藤は朝、俺が登校途中に起きたらしい。慧がそれを教えに来てくれて、俺はすぐに保健室へ向かった。

身体に多少の疲労が溜まっているだけで、後は健康体そのものらしい。良かった、良かった。

「……ところで燈夜」

「どうした？」

「……今日のパンはどうだった？」

「焼きそばパンでしたが、ナニカ？」

しかも俺が買う前の奴は、最早何が入っているのか分からないパンだった。失神したくらいだし、物凄いのだったんだろう。

……ヤになるね、もう。

………これから買うけど。

「引き運が強いということが良いじゃないか」

「良くない。これはプライドの問題だ。俺は……絶対に諦めない！」

「そんな格好良い台詞を叫ばれても……」

「ごもつとも。」

「そんなことより、もうすぐ文化祭みたいだね」

そんなこと………姉さん、以外と毒舌ッす。天然だから尚悪い。

「文化祭、ですか」

「階級なんぞ関係なく、数人が集まって出し物を出せるらしい」

そうなのか……詳しいな、凜那。

「僕たちも何か出す？」

「……何を……？」

「え？ えと……と、燈夜？」

俺に流すのかっ！？

「あ……こ、コスプレデュエル？」

ゴメン。GXの文化祭パクった。

「良いわね。燈夜ちゃんのコスプレ、見たいわ」

「こ、コスプレですか……は、恥ずかしいです」

「兄さん、カメラの用意は出来ています」

「撮るなっ！」

しかもどこから取り出したんだ、その高級カメラ……。

これだから零って油断ならない。

「それなら、コスプレデュエルとコスプレ喫茶を合わせないかい？」

「どっから湧いて出たんだお前はっ！」

神出鬼没だな、御神。

俺の背後に立って、御神がにつこり顔をしている。その無駄な爽やかスマイルが苦手なんだ、俺は。

「……………コスプレ喫茶……………」

そしてお前も、良く普通に話せるよな……………志藤。

「うん、そう。コスプレしたまま喫茶店をやって、休憩中とか、デュエルを挑まれた時に余興としてデュエル。勿論店員さんがデュエルするのもオツケー」

「うわ、メンドー……………」

「良いですね、それ」

「え、マジで？」

結姫だけじゃなく、凜那や慧も結構乗り気だった。予想外だ。

「どうする、燈夜？」

「兄さんの一言で決まりますよ」

「うわー……………視線が集中してるー」。

「栗や姉さん、慧はともかく……………なんで結姫や凜那も俺に任せるよ？」

「……………よし。」

「文化祭、盛り上げるかつー！」

「ぱんっ、と手を合わせながら俺はそう叫んだ。」

文化祭で行う出し物の申請も終わり、私、御園凜那は島外れの灯台に来ていた。

「……ここか」

昨日。ほんの昨日だ。鴻ソフィアの中から志藤彩伽が現れ、一悶着が起こった場所。

まだ然程時間が経っていないというのに、皆……それこそ、当事者でさえ、元気に講義を受けていた。

異常だ、と……私は表情を歪ませる。

「ん……凜那？」

「っ……燈夜、か」

当事者の1人、一ノ瀬燈夜だ。

ディスクも付けず、制服のポケットに手を入れながら歩いてくる。その視線は海、そしてその向こうへと注がれていた。

「まさか、お前や結姫も元は地球の人間だとは思わなかったよ」

「……私も、御神に教えられるまでは忘れていたさ」

「そうなのか？」

「ああ。転生したとは言え、記憶なんぞ無い。御園家に生まれ、御園家で育ち、偶然にもこのアカデミアにやって来たのだからな」

ふうん、と燈夜が呟く。

恐らく、咲之宮もそうだろう。隣で、同じような反応をしていた

のだし、間違いない。

「……私は、」

「うん？」

「……関係ない。地球だとか、救世主だとか……私には関係ない。強くならなくては……」

階級を上げ、このアカデミアの誰よりも……。

っ……燈夜相手に、何を喋っているんだ、私は。思ったよりも滅入っているな……。

「……すまない。忘れてくれ」

「……なあ、お前って何のコスプレ似合うかな？」

「はっ？」

何を突然……？

しかし、燈夜の眼は真剣だ。

「ううん、やっぱイメージ的に戦士族……か？ 凜那って可愛いというよりは綺麗だしなあ……」

「っ……」

こ、コイツは小声で何を……っ！！

頬が紅潮するのが分かる。そんな事言われた事も無いから当然だ。

「——俺も、強くないとな」

「……な、え？」

と、当然雰囲気が変わったな……。

どこか憂いを帯びた様子の燈夜は、眼を細めて真っ直ぐにアカデミアを見つめている。

「……………」

その横顔に私は、暫し見惚れてしまっていた。

「……………じゃあな。凜那も早く帰れよ？ 女の子の帰り道は危ないぜ？」

「っ！ わ、分かっている！」

笑いを噛み殺しながら、燈夜がその場を後にする。

「私は、何を……………」

夜風は冷たい。

けれど何故か、私の身体は少し、火照っていた。

「……は、恥ずかしいです」（後書き）

ここで文化祭の予告と凜那のフラグ立て。

しかし、文化祭開催はまだ少し先です。主要キャラ毎のイベントをやりたいなーと。文化祭前で2、3人……短いですよ？（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「それはズルイ、です……」

文化祭の準備も少しずつ始めて来た今日。

世界の救世主（ここ、笑うところ）メンバーの10人と+α（俺と御神）で喫茶店を切り盛りする事に決まって1週間。

最初はギクシャクした仲も、少しずつ改善されてきた気持ち良い日。

それこそ、

「そっぴゃ、志藤を治して貰った事……御神にお礼、言ってねえな」

なんて事さえ呟いてしまうほどに気分の良い日の朝。

教室……俺の机の上。

「……果たし状？」

無駄に可愛い丸文字で書かれているから、俺にとって差出人は分かり切ったモノだったとさ。

「……はあ」

「……？ あれ、姉さんは？」

「若菜さんなら、今頃どこかで告白されてるんじゃないかな？」

「……昨日は雫だったよな？」

「ちなみに結姫さんは一昨日いっさくじつでした」

「け、けど慧さんはその前でしたよね？」

モテモテだなお前らっ！？

いつもの如く、追いついてる野獣どもから逃げ切った俺は昼休み、ドローパンを持って中庭に来ていた。

「……この様子じゃ、明日は凜那か」

「冗談は止してくれ。私なんかを好きになってくれる人など居るものか」

「分からないぞ？ お前も、このメンバーに負けず劣らずの美人だからな」

全く。少しは俺の平凡な容姿を見習え！

って……あれ？ なんで固まってるんだ、凜那？ 他の皆も俺を睨んでるし……俺、何かした？

……はっ！？

「……お前ら……そうか。このカスタードパン、そんなに食べたかったのか」

「違いますっ！？ といつかなんでそんなにパンがあるんですかつ！？」

「数撃ちや当たる……試してみたんだ。10個……7個がカスタードパンだったよ……」

あ、涙が。

つか、パンの事じゃないならなんで俺は睨まれてたんだ？ 首を傾げ始めた俺に、溜め息吐く皆さん。

……あ、諦められた？

「これは……苦勞しそうです……」

「これからもライバルが増えそうだよ……」

「兄さん……昔から変わりませんね」

……えと、ごめんなさい？

なんで俺が責められてる感じになってるんだろっ……？

「それが燈夜ちゃんくおりにいっだから」

「わわっ！ 姉さんいつの間につ！？」

というか、抱き付かないで！

「姉さん。兄さんから離れて」

「嫌よ」

「……離れなさい」

「イヤ」

……あの、俺を挟んで喧嘩しないでくれませんか？

そして姉さん、俺の頭に柔らかい山が当たってるんですけどっ！？

「……燈夜。鼻が伸びてるよ」

「鼻の下な？ 鼻が伸びたら自信満々か若しくは嘔吐きだからな？

そもそも伸びてねえっ！？」

「……………」

「……」

あの、そろそろ離れて……………。

「デュエル（ゝ）！！」

一体どんな流れでデュエルになったのっ！？

つか、俺を離してデュエルして！ 慧たちも空気読んで離れなくて良いから！

「燈夜ちゃんが近くに居るから、負ける気がしないわゝ」

「く……勝てる気がしませんね」

じゃあ戦るな！

「私の先攻です、ドロー！ 私は《セイクリッド・シェラタン》を召喚します。このカードの召喚に成功した時、私はデッキより《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます。カードを1枚伏せて、ターンを終了します」

セイクリッド——現実世界、というより日本で出たDT13で出たカテゴリだ。
デュエル・ターミナル

雫や姉さんが俺に影響されて遊戯王を始めた時、丁度この弾が出た時期だったから、雫はセイクリッドをずっと愛用している。

「あたしのターン、ドロゝ。あたしは《ヴェルズ・マンドラゴ》を特殊召喚ゝ」

一方で、姉さんはヴェルズ。雫に対抗したのかそうでないのか、セイクリッドと同じくDT13で登場したカテゴリだ。

ちなみに、マンドラゴはフィールドの自分のモンスターが相手よりも少ない時、特殊召喚出来るモンスターだ。

「さらに、『ヴェルズ・ヘリオロープ』を召喚〜」

んで、ヘリオロープは通常モンスターだ。攻撃力は1950と中途半端だけど……良く考えたら、それはヴェルズ全体に言えるな。

「バトル〜。マンドラゴちゃんデシエラタンちゃんに攻撃〜」
「っ……！」

雫LP4000↓3150・

「ヘリオロープちゃんデダイレクト〜」
「ううっ！」

雫LP3150↓1200・

前から思ってたけど、ライフ4000って少ないよな。デュエルがすぐ終わっちゃう。

まあ、原作みたいに表側守備表示が無いだけマシだけど。

「カードを1枚伏せて、終了ね〜」

はぁ……早く終わらせてくれ。

ん？ あれ……もしかして、もし姉さんが勝ったら俺、姉さんに抱きつかれたまま？

それは……色々困る！ イロイロ！

「し、雫……も、もし勝ったら……えと、頭撫でてやるぞ？」
「私のターン、ドローします」

……今、雫の眼がキリツとなった。うし、勝つる。

「私は永続魔法、《セイクリッドの星痕^{せいこん}》を発動します。リバーズカードオープン、《リビング・デッドの呼び声》。シェラタンを特殊召喚します」

シェラタンのサーチ効果は通常召喚のみ対応してる。特殊召喚されて出てきた今回は、サーチする事が出来ない。

「私はシェラタンをリリースし、《セイクリッド・スピカ》を召喚します。このカードが召喚に成功した時、効果により、手札より《セイクリッド・エスカ》を表側守備表示で特殊召喚します。このカードもシェラタンと同じくサーチ効果を持っています。シェラタンと違うのは、特殊召喚にも対応している点ですね、兄さん」

「何故俺に訊く……まあ、そうだけど」

「エスカの効果により、私は《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます」

……まるでガジェットだな。レベル違うけど。

「LV5のスピカとエスカでオーバーレイ・ネットワークを構築。ランク5……来て下さい、《セイクリッド・プレアデス》！」

来たか……セイクリッドのエクシーズモンスター。

エクシーズ素材を1つ取り除く事で、フィールド上のカードをバウンスする強力な効果を持つカード。

「セイクリッドと名の付いたモンスターがエクシーズ召喚に成功した時、星痕の効果により1枚ドローします」

引いたカードを見て、雫は成る程、と呟いた。

「……プレアデスの効果を発動します。素材を1つ取り除いて、《ヴェルズ・ヘリオロープ》を手札に戻します」

「チェーン、《侵略の侵食感染》発動。1ターンに1度、ヴェルズと名の付いたモンスターをデッキに戻してヴェルズをサーチするのよ。ヘリオロープちゃんを戻して、《ヴェルズオランダ》を手札に」

「……そうですか。なら、」

雫は、手札の1枚を抜き取る。

「魔法カード、《簡易融合》発動します。1000ライフコストを支払い、」

雫LP1200↓200。

「《おジャマ・ナイト》を特殊召喚します」

「きゃあ、おジャマちゃん邪魔」

ああ、邪魔だ。おい、お茶飲むな！ そのちゃぶ台どこから出したっ！？

「墓地の《セイクリッド・シェラタン》をゲームから除外し、《^{ウル・コンヴオイ}魂の護送船》を特殊召喚します。再びLV5同士でオーバーレイ！

2体目の《セイクリッド・プレアデス》をエクシーズ召喚します！」

あ……なんか凄い泣きそうな顔でおジャマたちが消えた。

そっぴや、プレアデスはLV5の光属性2体だったな。《ヴェルズ・バハムート》はヴェルズと名の付いたモンスターが2体だった

から、忘れてた。

「2体目のプレアデスの効果により、『ヴェルズ・マンドラゴ』を手札に戻します」

「あゝ……」

…… ホント、ライフ4000って足りないよな。

「兄さんの応援を受けた私に、敗北の2文字はありません」

ヤバイ、格好良いよこの子。

「バトルフェイズに入ります。プレアデスでダイレクトアタック！」

「きゃゝ」

「う、うわああっ!?!」

若菜LP4000↓1500・

お、俺も巻き添えで怖えゝ……あの、早く離してくださいません、姉さん？俺も怖いんですけど……っ!?!

「2体目のプレアデスでトドメです」

「うにゃあゝ」

「うにゃあって何……うわああっ!?!」

若菜LP1500↓0・

「むう……仕方ないわねゝ」

や、やっと解放された……。

そんな何故か疲労困憊の俺に、雫はトコトコと近付いてきて、頭を差し出してきた。

「お前……俺に構わず攻撃してきたから、頭撫でるの無しな」
「そんな……」

しょぼん。

それこそ仔猫のように肩を落とす雫に、俺はふつと小さく笑い、なるべく優しく雫の頭に手を乗せた。

「え……」

「お疲れさん。良いデュエルだったぜ」

ワンキルだけどな。

「……兄さん……それはズルイ、です……」

雫の呟いた言葉は、俺の耳には聞こえなかった。

そして、放課。

俺は最近足に運ぶ回数が多いな、と思い始めた灯台の下へやって来た。

「果たし状……ねえ」

可愛らしい丸文字。流石にハートとかは無いとは言え、果たし状という言葉無しにすればラブレターに見えなくも無い。

……人生初のラブレターがこの世界、というのもなんか嫌だけど、そもそもラブレターって時代遅れ……… 勿論果たし状も。

さて。

「どこに居るんだ、“瀬野基”さーん」

「チツ……… ンで分かったよ」

「俺に果たし状を送ってきて、且つこんな丸文字の奴なんて、俺にはお前しか思いつかなかったんだよ」

「…… 慧に言われてもよ。やっぱ俺にや、ストーカーとしか思えねエ」

ああ、そついやそんな設定喋ってたな。すっかり忘れてた。

「慧、どんな話したんだ？」

「……… 別に。慧も、幸仁も、俺も…… テメエに救われたって事とかな」

救われた？

…… “あの” 事か？ 慧の時もそうだけど、全然自覚ねえなー。

俺としちゃ、普通に接したりしたただけなんだけど。

「俺あ話聴くのは苦手なんだよ。慧の話が本当で、俺とダチだったつーなら分かるだろ、俺の性格」

…… ああ。

「——困った時は、
拳で語る——」

「デュエルッ!!」
「」

「それはズルイ、です……」(後書き)

セイクリッドとヴェルズ、登場です(早っ)。

まだカード足りないんじゃないかな、とか思いながら書いていました、テヘツ(笑)

この話が出た時はまだDT13が最新でした。

やばい、そろそろストックが切れそうだ……！

ストックが無くなったら、一気に更新速度が遅くなりそう……

その時は、皆さんゴメンナサイm(――)m

感想、評価等お待ちしております！

「そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……」

——さて。

俺は意気揚々、というよりはノリの乗せられた感じでデュエルを始めてしまった訳だが。

アイツの溢れある闘気を、どう沈めてやろうか……？

「俺の先攻だぜ、ドローツ！ 俺あ《黒竜の雛》を召喚！ 効果発動！ このカードを墓地に送って、手札から……来い！ 《真紅眼の黒竜》ッ……！！」

早速お出ましか……！

基のフェイバリットカード、レッドアイズ。Lvが7の割には低い攻撃力が目立つ闇属性ドラゴン族モンスター。

遊戯王チームLEGENDsの主力カードで、一番攻撃力が低いけれど、それをサポートするカードは協力だ。

例えば、

「魔法カード、《黒炎弾》！ 俺の場にレッドアイズが居る時に、その1体を選択して発動出来る！ 相手にレッドアイズの元々の攻撃力分……つまりは2400ダメージを与える！」

「うあああッ……！！」

燈夜LP4000↓1600・

そう、例えば《黒炎弾》。このターンレッドアイズは攻撃出来ないけれど、今のようにならそのデメリットは無い。特にこ

の世界だと、ライフは4000だから《黒炎弾》の有用性は高い。

……そもそも、2400のダメージ自体は高い。

「カードを1枚セットして、ターンエンドだぜ、ストーリーカー」

「ストーリーカーじゃ……ねえよ！ 俺のターン、ドロー！」

伏せが気になるな。もしもデッキ構築が地球ん時と同じなら、基本的にアレは蘇生カードだ。

……慧や基、幸仁って俺と違って手札に主力カードを集めるしな。アレがりビデとかだったら、雛が蘇生されてレッドアイズ2体目、となる可能性がある。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド！」

「はっ！ いきなり防戦かよ。こっちは攻めて行くぜエ……ドロー

ッ！ 《真紅眼の飛竜》レッドアイズ・ワイバーン 召喚！ バトル！」

着実にアタッカーを増やしてきたか……。

「レッドアイズで伏せモンスターを攻撃！ 黒炎弾！」

……どっちもレッドアイズだ、と突っ込んだら負けだろうか。

「伏せモンスターは《見習い魔術師》！ このカードが戦闘破壊されたら、デッキからLV2以下の魔法使い族モンスターをセットする事が出来る！ 俺は《見習い魔術師》をセット！」

「チッ……たりい。ワイバーンでセットに攻撃！」

「《見習い魔術師》、効果発動！ 《執念深き老魔術師》をセット
！」

「……………俺はこのままターンエンドだ」

良し……特に何も無い。やっぱりあの伏せカードは蘇生系統、と考えるか。

「俺のターン、ドロー！ 永続魔法、《魔法族の結界》発動！」

正直言う。

……《魔法族の結界》は、使い辛い！

魔法使い族が破壊されるたびに魔力カウンターを最大4つまで乗せ、このカードと魔法使い族モンスターを墓地に送る事で乗っていたカウンター分ドロー出来るカード。

上手く出来れば4枚ドローだけど、時間が掛かりすぎるし、その上自分のモンスターを犠牲にしなきゃ行けないんだから……。

今のところ、好みで入れてるカードだ。大好きなんだよ、このカード。

それはともかく。

「反転召喚、《執念深き老魔術師》！ リバース効果！ 《真紅眼の黒竜》を破壊！」

「チツ……」

老魔術師の執念のような、呪いのような……なんか禍々しい気がレッドアイズに纏わりつき、破壊する。

こ、このお婆ちゃん……こええ。

「お、俺は《執念深き老魔術師》をリリースして、《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！」

「う……そのカードは……」

「このカードはLV8だけど、魔法使い族モンスター1体をリリースして、表側攻撃表示でアドバンス召喚出来る。そしてこのカード

の召喚に成功したターン、相手は魔法、罠カードを使えない」

伏せカードは気にせず攻撃出来る。闇属性だから、《オネスト》の警戒もしなくて良い。

そもそも、元々基のデッキに《オネスト》は入らない！ 光が居ないから！

「バトル！ 《ブリザード・プリンセス》で《真紅眼の飛竜》に攻撃！ ——フリージング・マジカル！」

命名、俺。ネーミングセンス0です本当にありがとうございまして。

「くっ……！」

基LP4000↓3000・

「俺はカードを1枚伏せて、ターン終了だぜ」

「……やっぱわかんねエ。なんで慧や咲之宮がお前に惚れんのか……」

「おいおい、慧はともかく結姫は——」

「隠してんじゃねエよ。端から見るとバレバレだぞ、お前」

……………。

「当人……慧とか咲之宮、後は鴻……じゃねエ、今は志藤だったか？ そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……俺や幸仁から見りゃ、一目瞭然つてやつだぜ」

俺ははぁ、と溜め息を零す。

「……別に、俺だって好きでやってる訳じゃねえよ」

「デメエ……いつまでそうしてるつもりだよ？」

「俺はもう、誰も好きにならないし恋人も作ったりしないって決めたんだ」

まあ、それでも慧を振り切れない優柔不断、チキンだけだな。

……慧が笑顔で居てくれないと調子狂うのも事実。そう自分に言い訳しておこう。

「お前こそ、沢崎………恵美はどうすんだ？」

「め、恵美がなんだってんだよ？」

「……良かった。沢崎の事は忘れてねえんだな」

「あ？」

「——お前が居なくなつて、沢崎、スッゲー怒ってるんじゃないかなーって思ったただけだよ！」

沢崎恵美。基の幼馴染で、俺たちが通っていた高校の風紀委員だ。俺から見ても相思相愛だというのに、奥手の基は好きじゃない、とか言うし。恵美は結構アタックしてるのにな。

「知らねエよ！ 俺は、アイツの事なんか……！ チッ、ドロー！」

途中で言葉を止めたか。アイツも、心の奥底では認めてんだろうな。

沢崎が好きだつて。

「リバーズカードオープン！ 《リビングデッドの呼び声》！ 戻つて来い、レッドアイズ！」

やっぱり、蘇生系だったか！

「行くぜ！ 俺は《真紅眼の黒竜》をリリースして、レッドアイズ・ダークネスト《真紅眼の闇竜》を特殊召喚する！」

うあ……来たか。序盤で出しても攻撃力の上昇幅は低いとは言え、基のエースカード！

「このカードは自分の墓地のドラゴン族モンスターの数、攻撃力が×300ポイントずつ上がっていく！ 墓地のドラゴン族モンスターの数は3体！ よって900ポイントアップ！」

《真紅眼の闇竜》 ATK 2400 ↓ 3300 .

《ブリザード・プリンセス》を超えた、か。ヤバイな。

「バトル！ ダークネスドラゴンで《ブリザード・プリンセス》を攻撃！」

「っ……！」

燈夜 LP 1600 ↓ 1100 .

《魔法族の結界》 魔力カウンター 0 ↓ 1 .

そろそろ、ダメージを受けるのは厳しいな。

けれど、手札にこの状況を打開するカードは無い。これは……やりたく無いけれど、無理矢理行くか？

「俺はカードを1枚伏せて、エンドフェイズ時、墓地の《真紅眼の

飛竜』の効果発動！ このターン、俺は通常召喚を行ってない。ワイバーンを除外して、レッドアイズと名の付いたモンスター……《真紅眼の黒竜》を攻撃表示で特殊召喚するぜ！」

《真紅眼の闇竜》 ATK 3300 ↓ 2700 .

「エンドフェイズ時、リバーズカードオープン！ 《リミット・リバーズ》！ 墓地の《見習い魔術師》を蘇生し、効果発動！ このカードが召喚、特殊召喚、反転召喚した時、魔力カウンターを乗せられるカードにカウンターを1つ乗せることが出来る！ 乗せるのは《魔法族の結界》！」

《魔法族の結界》 魔力カウンター 1 ↓ 2 .

「さらに《リミット・リバーズ》！ 2体目の《見習い魔術師》！ 効果により、さらに《魔法族の結界》に魔力カウンターを乗せる！」

《魔法族の結界》 魔力カウンター 2 ↓ 3 .

基は何かをする様子は無い。俺のターンだ。

「ドロー！ 俺は1体の《見習い魔術師》を守備表示に変更！ この時、《リミット・リバーズ》の効果により《見習い魔術師》は破壊される！ そして勿論、《魔法族の結界》に魔力カウンターが乗る！」

《魔法族の結界》 魔力カウンター 3 ↓ 4 .

「《魔法族の結界》の効果発動！ このカードと俺の場の《見習い

魔術師』を墓地に送り、魔力カウンターの数……4枚ドロ―する！」
「……無茶苦茶だな、お前」

分かってる。良いじゃないか、別に。

無茶苦茶だって分かってるけれど、これで手札は補充出来た。

……そうか。これで“勝て”って言うんだな？

「行くぜ、基！」

「来いッ！」

「――俺は《熟練の黒魔術師》を召喚！ 速攻魔法《ディメンション・マジック》！ 俺の場の《熟練の黒魔術師》をリリースして、来い！ 《ブラック・マジシャン》！」

『はっ！』

気合いと共に登場するマハード。
行くぜ！

「《ディメンション・マジック》の効果で、《真紅眼の闇竜》を破壊！」

「チッ……………！」

「さらに、《千本ナイフ》<sup>サウザン
ド</sup>！ 俺の場にブラマジが居る時、相手フィールド上に存在するモンスターを1体破壊する！ レッドアイズを破壊だ！」

「く……………」

無数のナイフがレッドアイズに突き刺さる。ドラゴンだったから
まだしも、もし人間だったら……グロイな。

「……魔法カード、《死者蘇生》！ 対象は、《真紅眼の黒竜》だ
！！」

「なっ……！？」

「——猛れ！ レッドアイズッ！！」

基の墓地から咆哮を上げながら羽ばたく漆黒の竜。格好良いな！

そんな姿に見惚れていたから。

俺は、基の手が一瞬、リバーズカードのオープンボタンに行った
のを見逃したんだ。

「行くぜ？ バトルフェイズ！」

「……そっか……やっとな、思い出せたぜ……燈夜！」
「っ……！」

そりゃ、良かったな。やっぱりお前とは話し合いより、戦りあつ
た方が合ってるみてえだ！

「行くぜ、基！ 《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック
！——黒・魔・導！」

基LP3000↓500。

「トドメだ！ 《真紅眼の黒竜》でダイレクトアタック……！——
黒炎弾！！」

基LP500↓0。

「その……悪かったよ。忘れてて、さ」

「別に良いっての。慧もそうだったし、幸仁はまだ忘れてるし。そもそも、そんな事したのは御神だろ？」

「……ああ」

それにしても、良かった良かった。このまま思い出さないままだったら俺自信、凄く滅入ってただろうな。

記憶を思い出させるにはデュエルが良いのかな。

ただ、幸仁に勝つのは……うん、難しそうだ。

「俺、先帰るわ。ちと頭ン中整理しねエと」

「……お前、考えるの苦手なんだから止めとけば？ 知恵熱出るぞ？」

「ンだと？」

はは、と笑う。それに吊られたかのように基も笑った。

「じゃあな、燈夜」

「ああ」

その場から基が離れていく。
清々しい気分。

けれど……それを邪魔する奴が1人。

「お疲れ様、一ノ瀬燈夜君」

「……何しに来たんだよ？　つか、フルネームは止めてくれ」

すっげえ違和感がある。

「そうかい。じゃあ、燈夜君で良いかな？」

「……まあ、良いけど」

「そう、じゃあ燈夜君」

俺が海の方に視線を向ける。真っ直ぐに俺を見つめている視線を感じるけれど、俺は無視するように視線を逸らした。

「先日。僕が君に言った言葉は憶えているかい？」

「言った言葉？」

「そう——『君は、弱いね』……と」

……ああ。俺は同意を込めて首を縦に動かす。
良く憶えてる。だからこそ、俺は強くなりたいてって思ったんだ。

「彼の最後の伏せカード。なんだったと思う？」

「……なんだよ、その質問。まさかまた……」

「《激流葬》、だよ」

「っ……！」

《激流葬》……？

「それ……本当、なんだよな？」

「嘘を言っても、僕にメリットが無いね。本当だよ」

「……………！！」

握り拳が自然と出来る。

慧だけじゃない。

基も、手加減しやがった、のか……！？

「先日、僕が君を消さなくて良かった、と本気で思うよ」

波の音が聞こえない。

聞こえるのは御神新の声と、

「君程度のイレギュラーなら、僕が手を下す程の存在じゃないからね」

煩い程の、俺の鼓動——。

「そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……」(後書き)

少しずつ、ゆっくりと、一ノ瀬燈夜は悔しさに歪んでいく――。

はい、今回は燈夜と基のデュエルでした。

《魔法族の結界》の辺りは大好きですww ちよつと無理あるかな
ー、とは思ったけど……(笑)

ヤバイ、明日の投稿間に合うかな……この辺りから少しずつ更新が遅れていくかもしれません、すみません(汗)

感想、評価等お待ちしております！

「殺されるぞ、視線で……………」

文化祭の準備を本格的に始めて数日。

第五位の寮は小さく、食堂も残念ながら喫茶店にするには少し小規模過ぎた。

そこで俺が考えたのは至極当然の答え——外に机を並べてよう、というモノ。

そうすればコスプレデュエル中も観戦できるし、悪くない案だと思う。

そして今日。

俺は今、巻き金髪お嬢様のリリア＝フォルゼン・レイランドと2人きりで街に出向いていた。

「…………どうしてわたくしたちですか？」

「今更何だよ…………。仕方ないだろ？」

なんか、喧嘩し始めちゃったんだから…………。

俺は肩を竦めながら、昨日の出来事を思い出していた。

「大分、様になってきたな」

並べられた数十個のテーブルと椅子を眺めながら、俺は腕を組みながら頷いた。

アカデミアの講義も終わり、放課後。

ソフィアを除いたメンバーが文化祭の準備をしている今。俺が何故か仕切りながら第五位を喫茶店へと染めて行ってる。

「そろそろ材料とか買い集めた方が良いんじゃないかな？」

「ん？ あゝ、そうか……後2週間だしな」

慧の言葉に、俺は文化祭への短さを感じていた。

ある程度の材料は前日に御神が持ってきて来ってくれるらしいけれど、一部の人は練習も必要かもしれないしな。

「このメンバーで料理が出来る奴って誰が居る？」

「えっとね……燈夜と僕だけ、かな……」

「……………」

す、少ねえ……。

正直、慧辺りは良い客寄せ虫（言い方悪い）だから厨房よりもホールに行って貰いたいし……ローテーションするにしても、流石に人数が少なすぎる。

「こりゃ、明日にでも少し材料を買ってきて、練習して貰った方が良いか……？」

「買い物って、どこに行くんですか？」

休憩に入ったのか、結姫や凜那が近付いて来る。

全員集合、って感じだな。ソフィアや御神は居ないけど。

「ん、流石に購買じゃ足りないし……島から出て町に行くかな」

——っ……？

なんだ……今、空気が張り詰めたような……っ！？

「それじゃ、私が一緒に行きますよ」

「そんな……僕が行くよ。結姫さん、疲れちゃうでしょ？」

「……わたしと、行こ……？」

あの……俺が行くのは確定なのか？ 俺が仕切つてるとは言え、材料書けば俺居なくても大丈夫だよな？

なんて言ってもその主張は聞き届けられる事は無いだろうから、俺は空笑いしか出来ない。

「やれやれだな。そういえば燈夜、町を歩いた事は無いんだったか……。私が買い物がてら、案内してやる事も出来るぞ？」

「その必要は御座いません。兄さん、私が全身全霊を持ってご案内いたしますが」

「皆必死ね。ここは1つ、お姉ちゃんと一緒に逃避行しちゃう？」

どんな妥協案だっ！？ つか、逃避行って言い方はそこはかとなく駄目な気がする！

しかし、ここで「俺は行かないぞ？」とか言ったら皆どんな顔をするだろうか。見てみたい気もする。

「なんつーか、必死だな……将来苦勞するぜ、燈夜」

「はあ……既に苦勞してるっつーの」

「……それもそうだな」

基の慰めに、俺は深い溜め息を零す。

「なあ……ここで俺が、基と行く、とか言ったらどうなると思う？」

「殺されるぞ、視線で……………俺が」

……………そっか。

流石の基も、恋する乙女には勝てないか……………。

「そっいえば一ノ瀬様」

今までどこに行ってたのか、何も知らないリリアが近付いて来る。

「第壱校の特待生と仲が宜しいから、という理由で注目を浴びているのですが」

ふむ。

「御神様がそれを利用して、町でエキシビジョンデュエルを行いたいらしいのです。なので明日^{あす}、わたくしと一緒に町へ向かって頂けませんか？」

『え？』

おお……………皆息ピッタシだ。

俺もついえ？ と聞き返すところだったし。

それより……………、

「え？ ど、どうしてわたくしは皆様に睨まれますのっ!？」

リリア……不憫な子っ……！！

sonde、また色々言い争いがあつた上で、俺はリリアと2人だけで町へ来る事に。

その時、またリリアは皆の反感を買つたという。

「なんか……災難ですわ……」
「お疲れ様」

同情しておくよ。

俺が^{おかしな}言葉^をを呟くと、本当に……、とりリアは重たい息を吐く。

「ところで、どうして俺が噂になつてゐるんだ？」

町でデュエルした事なんて無い……いや、結姫を襲つた不良たちが居たか。

まあそれも^{ひとけ}人気の無い場所だつたし、そもそも噂の内容は“第壱校の特待生と仲が良い”らしいし、俺はどうやって噂になるのか分からない。

「それは簡単ですわ。第壱校の特待生は時折、テレビ出演するのはご存知でしょう？」

ああ。俺が第壱校に慧たちが居ることを知つたのもテレビだった

しな。

「その際……好きな人は居るのか、という質問に慧様が……」
「あ……成る程」

口を滑らした訳ね……。ってことはアレじゃね？ 慧ファンの人たちに反感買ってるんじゃないか、俺？

くそ……慧め、厄介な事を……！

「その上昨日の撮影では、基様が貴方の事を語ってしまい……」

基、お前もか。

「……まだありますのよ」
「今度はなんだっ！？」

聞くのが怖い……！ けれど聞かないのも怖い……！

「結姫様が父親に貴方の事を喋ってしまい、本日は家族全員でエキシビジョンマッチを見に来るらしいですし」

咲之宮家全員参加！？

「凜那様の家は幾人ものプロデュエリストを輩出した教育場なのですが……ご両親が貴方を見にいらっしゃるというお話ですし」

……おおつ。

「御神様が様々な業界のお偉い方を連れて来ると仰っていましたが」
「ら」

御神……やっぱりお前とは、一度拳を交えないと行けないようだな……！

つか、プレッシャーヤバっ！？

「俺……今日を乗り切ったら、」

「文化祭を頑張りますのでしよう？ 分かっておりますわ」

死亡フラグを切られたっ！？

空気読めよ、リリア！ そういつの、“KY”って言っただぞ！

「はあ……」

今日一番の溜め息を、俺は零したのだった。

「うわあ……」

と俺が声を上げるのも最もだと思う。

檜都町の真ん中に位置する中央公園が、俺のエキシビジョンデビューをする場所だというから来て見れば、そこには人、人、人。

それこそどこぞのライブのように人が集まり、フェンスで前へ出て来られないように遮られている。

そのフェンスの前に居るのは、椅子に座った複数の大人たち。

「前に居る方たちが、咲之宮家や御園家……その他、有名な企業や会社の方々ですわ」

「マジか……」

ざつと2、30人は居るんじゃないだろうか。俺の緊張も鰻上りである。

「あそこに居るのが咲之宮家の一家です」

そう言ってリリアが指差したのは、並ぶ椅子の中心辺りに居た家族だ。

なんと言つか、厳格そうな男性とずっと微笑んでいる女性。女性の方は母親だろうか？ 子持ちとは思えないほど若そうだけど、結姫に似てる。

そして並ぶ3人の女性たち。約2名は、俺よりも少し年上か？ という感じた。一番隅に座っているのは、小学生……くらい？ の女の子。

……なんか、無表情だ。腕を組んで、脚を貧乏揺すりしている。

（あれが……結姫の家族、か）

姉2人は勿論、妹にさえ劣っている、と泣きそうな声で話してくれたのを思い出す。

——私、捨てられたも同然なんですよ。

——自殺する理由が出来るなあ、って……。

「……………」

「……？　どうか致しましたの、一ノ瀬様？」

「……いや。なんでもない」

大きく深呼吸する。

……　よし。頑張るかね。

そう気合い入れると、俺は両頬を2回ほど叩いた。程好い痛みが
気付けとなって、身体の強張りを消していく。

『本日は皆さん、良くお集まり頂きました！』

やっと開始か……と、俺が会場に視線を送る。
と、

「……司会はお前かよ」

御神新が、マイクを持って微笑みを持ちながら喋っていた。

『——と、前口上はこの辺りにしておきましょう。今や世界中でも
注目を浴びている第壹デュエルアカデミア櫛都校……その特待生筆
頭、瀧川幸仁君を呼びましょう！』

はっ……！？　幸仁、来てるのか！？

俺がキョロキョロと視線を泳がせると、リリアの後ろで静かに立
っている姿が見えた。

なんつーか……前の世界でもそうだったけど、影薄いな、お前。
無口だからだろうけどさ。

『瀧川幸仁君、どうぞー！』

無言で会場に顔を出す幸仁。その瞬間、耳を劈くような歓声が沸き起こった。

主に、女性の甲高い声。

「凄い人気ですね……わたくしには、あの方の良さは分かりかねますわ」

……まあ、顔だろ。好みじゃないんだろうしな。
なんて言ったらおしまいな気がして、俺は黙した。

『続いて、1ヶ月前に第壱校へ編入し、特待生の一ノ瀬若菜、一ノ瀬雫と血を通わし、瀬野基と長谷部慧と友人関係を結んでいる注目の人間！ 一ノ瀬燈夜君の登場です、どうぞ！』

う……来たか。

俺はもう一度深呼吸して、会場へと一歩踏み出す。
歓声は無かったけれど、壮大な拍手と共に俺は生唾を呑み込む。

『質問タイム……と言いたいところですが、まずはデュエルから参りましょうか！』

え、いきなり？

「燈夜君、幸仁君。準備は良いかい？」

マイクから口を離し、御神は俺たちに問う。

幸仁は静かに頷き、ディスクを構えただけだった。

「ふう……よし。大丈夫だ」

昨日調整が終わったばかりのデッキだ。
いつも思っけれど、事故らないでくれよ……？

「――ノ瀬燈夜」

俺はデッキに祈りを捧げていると、静かな口調で幸仁が話し掛けて来る。

「俺にはまだ、お前と過ごした記憶は無い……」

……………。

「だが基も慧も、そして俺も……記憶が無かった数ヶ月間、何か“足りない”と感じていた」

――俺は、ディスクからデッキを取り出し、ベルトに取り付けたケースに入っているデッキと入れ替えた。

「その足りない“何か”がお前なのか……試させて貰う」
「上等だ。お前こそ腕が鈍ってないか、試してやるよ」

「「デュエルッー!!」」

「殺されるぞ、視線で……………」（後書き）

やっべー、この先の展開考えてねー（汗）

どうしよう…………どうしようっ！？（↑本気で考えてない奴）
これは…………読者様には少し待ってもらうしか（ry

感想、評価等お待ちしております…………はああorz

「確かに、どこか懐かしい感じがする」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は俺だ。

幸仁に出し惜しみなんてしていたら、一発でライフは0だ。ただでさえライフポイントは少ないのに。

「俺はモンスターをセット！ ターンエンド！」

「……ドローだ。俺は手札よりフィールド魔法、《竜の渓谷》を発動する」

辺りが竜の飛び交う渓谷へと早代わりする。

元々はドラグニティで活躍するよう作られたカードだが、実際、《竜の渓谷》はデッキから好きなドラゴン族を落とせる効果を持つ。そこに、“ドラグニティ”の要素は必要無い……！

「《竜の渓谷》の効果を発動する。手札の《青眼の白龍》を捨て、デッキから《伝説の白石》レジェンド・オブ・ホワイを墓地へ送る。この時、《伝説の白石》の効果によりブルーアイズを手札に持ってくる」

手札の消費は無いに等しい。

この動きをしたということは、幸仁の手札にはドロー強化のカードがあるはず。

「《トレード・イン》発動。手札のLV8モンスター……ブルーアイズを捨て、2枚ドロー」

やっぱあったか。

「《シャインエンジェル》を召喚し、バトル。《シャインエンジェル》でセットモンスターを攻撃する」

「っ……モンスターは《水晶の占い師》！ リバー効果により、俺はデッキの上から2枚めくる！」

めくられたカードは《魔導戦士ブレイカー》と《魔法族の結界》。

ここは――。

「俺は《魔法族の結界》を手札に加え、ブレイカーをデッキボトム……デッキの一番下に戻す」

手札にブレイカーはある。後続を加えておくのも良いけれど、ここはドロー強化しておこう。

……ま、時間も遅いし成功するかも分からないんだけど。

「俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドローっ！」

さて、どうしようか。

出来れば《シャインエンジェル》は戦闘破壊したくない。だからと言って、《竜の渓谷》も残しておくとか後々厄介そうだ。

……と、すると。

「俺はまず、《魔法族の結界》を発動！ そして相手の場にモンスターが存在し、俺の場にモンスターが居ない場合、このカードは特殊召喚出来る！ 《太陽の神官》！」

サイドラのような――SS（特殊召喚）方法を持つ《太陽の神官》。

別に効果は意味が無い。

要は、“魔法使い”族である事が重要なんだ。

「俺はチューナーモンスター、《ナイトエンド・ソーサラー》を通常召喚！」

チューナーモンスター、という俺の言葉に観客席がざわつく。それはそうだろう。

チューナーといえば、シンクロ召喚の際に必要なモンスターであり、この世界ではその“シンクロ”は未だに日の目を浴びていないのだから――。

「そして――LV5の《太陽の神官》に、LV2の《ナイトエンド・ソーサラー》をチューニング！」

ここは……叫ぶしかないよなっ!?

「魔導の道標を、至高の光よ！今此処に、全てを解き明かし式を並べん！シンクロ召喚！《アーカナイト・マジシャン》――！」

うは、厨二病くせえ……とは思いながらも、妙にワクワクした気持ちで踊る。

ちなみに今の台詞は即興だ。適当に叫んだけれど、それなりに言葉になって良かったと思う。

「シンクロ……って、確か……」

「ああ、第壱校の特待生しか知らなかった召喚方法……」

「それも、特待生から話には聞いたけど、実際見るのは初めてだよな……」

……そうなのか？

まあ確かに、幸仁や基、慧は勿論、この前初のテレビ出演を果たした雫と姉さんもシンクロはしないしな。

幸仁はシンクロモンスターのカタストルが嫌いで、総じてシンクロはしたくないらしいし、慧はシンクロするとネオスの影が薄くなりそうだから、だと。

んで基は、「レベルの計算が面倒臭エ」らしい。

「《アーカナイト・マジシャン》がシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ乗せる！ このカードの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター1つに付き1000ポイント上がる！」

《アーカナイト・マジシャン》 魔力カウンター0 ↓ 2・

《アーカナイト・マジシャン》 ATK400 ↓ 2400・

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ フィールド上の魔力カウンターを1つ取り除き、フィールド上のカードを1枚破壊出来る！ 対象は《シャインエンジェル》！」

「く……」

《アーカナイト・マジシャン》 魔力カウンター2 ↓ 1・

《アーカナイト・マジシャン》 ATK2400 ↓ 1400・

「2回目の効果！ 《竜の渓谷》を破壊する！」

《アーカナイト・マジシャン》 魔力カウンター1 ↓ 0・

《アーカナイト・マジシャン》 ATK1400 ↓ 400・

そっぴやライフは4000だっけ……一度《竜の渓谷》を残して

ダイレクトアタックしても良かったんじゃないか？

……けどそれだと、攻撃力400のモンスターがそのままになっちゃうか。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

何はともあれ、俺のターンは終了。

怖い、幸仁のターンだ。

「ふっ……成る程。確かに、どこか懐かしい感じがする」

「幸仁……？」

「——俺のターン、ドロー」

今、何を呟いたんだ？

「俺は《サファイア・ドラゴン》を召喚する。バトル！ 《サファイア・ドラゴン》で《アーカナイト・マジシャン》を攻撃！」

アーカナイトの守備力は1800。1900の攻撃力を持つサファイアには勝てない。

《魔法族の結界》 魔力カウンター0 ↓ 1 .

「メインフェイズ2。カードを1枚伏せ、ターン終了」

あの伏せ……1枚は《正当なる血統》の可能性が高いな。
墓地にはもうブルーアイズが居る。用心しておかないと。

「ドローっ！ ……よし、やるか。俺は永続魔法、《魔力俵約術》を発動！ これで、魔法カードを使う際に払うライフコストを払わ

なくても良くなる。そして、《黒魔術のカーテン》――」

奈落とかは、無いでくれよ……そう願いながら、俺は一度大きく息を吸う。

「このカードはライフを半分支払い、デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！」

《ブラック・マジシャン》、というモンスター名を告げたからか再び周囲のざわめきが強くなる。

これで俺も注目の的なんだろうなあ……御神辺りは、その辺りを分かっている上でこのデュエルを計画したんだろう。

なんか、簡単に踊らされてる気がするのは癪だけど……今は良い。

いつか見返そう、と決意しながら俺はデュエルを続ける。

「来い、マハードッ！」

気合いの入った吐息と共に、マハードが降誕する。

何かを発動する気配は………無い。

「魔法カード、《黒・魔・導》！俺の場にブラマジが存在する時、相手の魔法、罠カードを全て破壊する！」

擬似《ハーピィの羽根簞》だ。

幸仁は何を発動するまでも無く、大人しく破壊されていた。

《正当なる血統》。案の定、って感じだな。

「バトル！《ブラック・マジシャン》で《サファイア・ドラゴン》を攻撃！この時、伏せから《マジシャンズ・サークル》発動！

お互いに攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！ 来い、マナ！」

『いづくよー！』

「……俺のデッキに魔法使いは居ない」

よし、押し切れる！

「続行！ マハード、あのドラゴンに攻撃だ！」

『はあっ！』

幸仁LP4000↓3400・

「続いて、《ブラック・マジシャン・ガール》……マナでダイレクトアタック！」

『えいつ！』

幸仁LP3400↓1400・

なんか……マナの気合いの入る声、可愛いです。

和むなあ……なんて、言ってる場合じゃないっての、俺！

「俺はこのままターンエンドだ！」

「ふ……」

俺がエンド宣言をすると、幸仁が静かに笑っていた。

「1つ訊きたい。お前は……舞のことを、知っているのか？」

舞——おきのマイ興野舞。幸仁の恋人で、今は大学2年生だ。

活発な性格で、中学、高校と陸上部で走り回っていた、というのを俺は聞いていた。

「——ああ」

「……………そうか。やはりな」

物静かに納得する。三度ふつ、と笑みを浮かべた幸仁は静かな動作でディスクに手を乗せる。

「俺のターンだ。ドロー」

ドローカー드를暫く見つめる幸仁。そして成る程、と肩を竦め、違うカードを手札から抜き出す。

「魔法カード、《思い出のブランコ》。墓地の存在する《青眼の白龍》を特殊召喚する！」

つ……………来たか。

「さらに《古のルール》……………手札のブルーアイズを、特殊召喚するッ！」

に、2体目来たあ……………！

「LV8の《青眼の白龍》の2体でオーバーレイ・ネットワークを構築する」

「え……………」

「ランク8……《サンダーエンド・ドラゴン》、エクシーズ召喚……！」

ま、まさかそっち……！？ 地球に居た時はそのカード、使って無かったぞ！？

「1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、このカード以外のモンスターを全て破壊する……！」

『く……！』
『きゃあっ！』

マハード、マナ！

うわぁ……まさかの全滅。その上、

《魔法族の結界》 魔力カウンター1↓2・

同時破壊だから乗るカウンターの数は1つだけ……っ、辛い。

「バトルフェイズ。《サンダーエンド・ドラゴン》でダイレクト」
「うあぁっ！」

燈夜LP4000↓1000・

歓声が湧きあがる。勿論女性の黄色い歓声の方が大きい。

うあぁ……耳が痛い……っ！

それにしても……ヤバイ状況だ。俺の場には伏せカードが1枚と《魔力儉約術》、2つのカウンターが乗っている《魔法族の結界》のみ。

その上……俺の手札は0枚だ。

「俺は——このまま、ターンを終了する。来い、一ノ瀬燈夜」
「っ……………」

仕方ない……合計3枚のドローに賭けるか！

「エンドフェイズ時、リバーズカードオープン！ 《リミット・リバーズ》！ 墓地の存在する《水晶の占い師》を特殊召喚する！
そして俺のターン、ドローツ！！ 《魔法族の結界》の効果を発動！
俺の場に居る《水晶の占い師》とこのカードを墓地に送り、俺は2枚ドローする！」

……………。

成る程な。ここで引くのか……………。

「幸仁！」

「……………」

「俺は慧とデュエルして、基とデュエルして……………次はお前だろうな、
って勝手に思ってたんだ。だから俺は、お前とのデュエルの為に数
枚、このデッキに加えられたカードがある」

デュエルをしたら記憶が戻るんじゃないか、と思った。もしかしたら本当に葬なのかもしれない。

けれど……………2人とのデュエルでは、共通点があったんだ。

慧はネオス、基はレッドアイズが俺の場にやって来た時……………2人の記憶は戻った。

なら……………。

「まずは、俺もお前と同じカードを使わせて貰うぜ。《思い出のブランコ》！ 墓地の《ブラック・マジシャン》を蘇生させる！ そして《千本ナイフ》！ 《サンダーエンド・ドラゴン》を破壊する！」
「っ……」

これで幸仁の場はがら空きだ。

「お前とのデュエルの為に入れたカード……見せてやるよっ！ 俺は装備魔法……《自立行動ユニット》を発動する！」

成る程、と言った様子で幸仁は息を吐く。

「このカードのライフコストは1500……それは《魔力儉約術》で不要になつてる。相手の墓地からモンスターを攻撃表示で特殊召喚して、このカードを装備する。対象は、《青眼の白龍》だ！」

俺の場に降臨する神々しい龍。白銀の身体は太陽の日差しに煌き、つい息を吞んでしまうほどに威圧感に溢れていた。
目を見開いて、幸仁の時間が止まる。

「——バトルフェイズ。《青眼の白龍》で、幸仁にダイレクトアタック！」

幸仁LP1400↓0・

“滅びのバーストストリーム”が、幸仁を包み込み。

エキシビジョンデュエルは、俺の勝利に終わった。

「確かに、どこか懐かしい感じがする」（後書き）

私って、《魔法族の結界》……好きだなあ（笑）

そして《魔法族の結界》に助けられる主人公、一ノ瀬燈夜。
さらには何気にこの小説初のシンクロ召喚。

ふう……疲れた（爆）

シンクロ召喚の時の台詞とか、全て自己流なんで……考えるの辛い
ですよ↑

感想、評価等お待ちしておりますね！

「その時は、お前も守ってやるよ」

……勝った……。
信じられない……。

けれど、幸仁の場に伏せカードは無い。慧や幸仁のような“手加減”は無い。

俺は——！

『なんと、勝者は編入生である一ノ瀬燈夜君でした！　しかし驚愕に満ちている方、ご安心ください。瀧川幸仁君の持つ、たった1枚の手札……』

……？

まさか……。

『《死者蘇生》でした。《サンダーエンド・ドラゴン》の効果を使用後、《死者蘇生》により墓地の《青眼の白龍》を蘇生させれば幸仁君は勝っていましたので』

心に、影が差す。

まるで太陽がどす黒い暗雲に隠されていくように、俺の目の前も闇が覆う。

——君は、弱いね。

御神の鋭い台詞が、的を射る。

「燈夜……そうか、思い出した。何故忘れていたのか……」

幸仁が近付いて来る。

思い出してくれた。それは凄く嬉しい事だ。嬉しい、はずなのに

……………！

「——来るなッ！！」

俺は、気付けばそんな言葉を吐いていた。
はっとなって、俺は辺りを見渡す。

御神は全てお見通し、という様子で俺を見つめている。珍しく目
を見開いて俺を仰視する幸仁。

観客席には、様々な視線が俺を突き刺す。結姫のご家族も、凜那
の両親も。

「…………ッ」

逃げる。

この視線から、早く……………！

「一ノ瀬様っ！？」

俺はその場から、背を向けて走った。

どれくらい走っただろうか。

気が付くと、そこは公園だった。中央に噴水があり、その周りにはベンチが4つ。四方向に分かれた道はどこまで続いているのだろうか……？

俺は1つのベンチに腰を下ろして、はぁ、と息を零した。

「何やってんだ、俺……？」

そんな自問には、誰も答えてくれたなかった。

《死者蘇生》、《激流葬》、《聖なるバリア・ミラーフォース》……はは、パワーカードのオンパレードじゃんか。

俺、やっぱ弱いんだなあ……。

もしかしたら……いや、もしかしくても、他の奴より俺は弱いんじゃないか？

零と姉さんには何回も負けてるし、結姫の植物デッキもシンクロが無い分、コントロール色が強いだろうし……そもそもテイタに苦戦しそうだ。

凜那のアルカナも、かなり苦勞するだろうし……そもそも、展開力が早すぎだろ。

志藤の巨大天使にはパワーで押し切られて、ソフィアの除去能力の高さは折り紙付き。

リリアのデッキも、前デュエルしているのを見た時……俺のデッキには結構刺さったし――。

「……ここにいらしたの」
「……………」

リリアだ。

顔を上げると、そこには額に汗を垂らしたリリアが肩で息をしていた。

「……俺を追いかけて来たのか？」

「ええ。ここ、座らせて貰いますわ」

そう言っリリアは俺の隣に座った。
少しの間、沈黙が続く。

「……………悪かったな」

「え？」

「……突然、逃げ出しちゃってさ」

頬を掻きながら、俺はそう切り出した。

「俺、強くないとな」

皆を、守れるように。

「世界を守るとか、歪みがどうか………そんなの俺には分からない。
非現実的過ぎて、実感が湧かないんだよ……………」

「それは皆さん、そうだと思いますわ……………事実、わたくしもそうでしたし」

「……………けど」

俺は、強くなる。

「皆を守るように……………強くなりたいって思った。御神に弱いつて言われてから、ずっと考えていたんだ」

「そうです……………」

俺は小さく頷く。

俺は弱い。

弱いからこそ、強くなりたい、という思いは人一倍強いんだ。

「その時は、お前も守ってやるよ」

「え……？」

世界は要らない。

俺が守りたいのは、“世界”じゃない。

「俺は俺の友達……仲間だけ守れば良いんだ」

仲間、なんて言葉……地球に居た時は臭いなあ、なんて思ってたけど……。

自然と俺の口から出たのは、仲間、という一言だった。

「——さっ—」

俺は勢い良く立ち上がって、リリアに手を差し伸べる。
今はまだ、俺は弱い。

けど、少しずつで良い。俺は強くなっていく……そう決意して。

「御神や幸仁には悪いけどさ……買い物、行くっぜっ—」

——平々凡々だけど、他の殿方よりは礼儀の為った男性。

そんな何とも言えない印象だった彼、一ノ瀬燈夜様。

正直、会って見なければ彼のことは全く分からなかった、というのが本音でしたわ。

雫に彼の事を訊けば、「絶対至高の存在」。

若菜に彼のことを訊けば、「愛すべき愛弟」。

それも、血の繋がった家族とは思えない惚気^{ノロケ}を延々と聞かされるのですから、彼女たちに一ノ瀬様の事を訊くのは自分の中でタブーとなっていました。

そんな彼が、真摯な瞳でわたくしを見つめながら言った真っ直ぐな言葉。

——その時は、お前も守ってやるよ。

「はふう……」

正直、ドキッしましたわ。

わたくしが今まで接した事がある殿方とえば、御神様とレイラ
ンド家の財産を狙って近付いて来た打算的な男性のみ。

けれど……一ノ瀬様の瞳は、濁っていなかった。

と、言う事は——。

「衣装は慧と基が作ってくれるらしいし……やっぱ問題は料理だな。当日は購買にある程度のを予約したけど……練習、必要だよな」

全く。

この心臓……早く、収まって下さいまし……。

「その時は、お前も守ってやるよ」(後書き)

今回は短いです。

リアのフラグを無理矢理立てました。ニヤニヤ(笑)

次は誰か、皆さんならおお気付きますよね？ 私は作者の癖に、思
い出すのに数分掛かってしまいました……。

決意を新たにする燈夜。しかし、その胸の奥には、本人も気付いて
いないどす黒い感情が――。

え、ネタバレ？

違います、未来予告です。きっと。

感想、評価等お待ちしております！

「……この前は、燈夜さんを私の部屋にご招待したりー」

アルバイト――。

俺はカードを売って結構な金銭を得た……うん、それは良かった。要らないなー、というカードも良い金になってくれた。

けど、それは卒業までの学費や寮費、その他諸々に使う為、俺が自由に使える金は少ない。

イコール、デッキを強化出来ない……その上文化祭に使うお金を富豪の娘達――まあ結姫とかリリアとかに払わせるのは、男として恥ずかしいと思うんだ、俺。

……全部御神が出してくれば良いのに………あ、冗談な、冗談。多分。

てなわけで――俺は購買のお姉さんに頼んでアルバイトをさせて貰っている訳だが。

「いやまあ落ち着けよ、餅搗けよ、おい餅はどこだマシユマロでも良いぞ《マシユマロンのメガネ》はどこだっ!？」

「可愛いわよ、燈夜ちゃん」

「こっつうのは慧かイケメンの基や幸仁で良いだろ、おいっ!？」

うあゝ……脚がスースーするう……ハイソックス? そんなん知るかって話。

第壹デュエルアカデミア櫛都校。そこは購買の他にも、食堂と呼ばれるレストランのような場所もあるという。俺は初めて知っただけ。

俺がアルバイトをする、と言って連れて来られた場所がこの食堂だったわけだ。

どこぞのファミレスや喫茶店のように、他にもアルバイトしている子たちが制服を身に着けて動き回っている。

そして――俺、一ノ瀬燈夜も同じく。

女性用の制服を着せられ……とどのつまり女装、している訳だ。ご丁寧にウィッグ（カツラ？）を取り付けられて。

「もう……お嫁行け……じゃない、お嫁さん貰えない………」

「あらあら。それならお姉さんが貰ってあげるから大丈夫よ？」

「全然大丈夫じゃ有りません。眼がギラギラしてるんですけど………」

何ソレ怖い。

はぁー、と溜め息を零す。ここまで重い溜め息を零したのはいつ振りだろうか。この世界に来た時もここまでじゃなかったぞ。

「うーん、やっぱりお姉さんの思ったとおり、可愛いー！ 女装ってね、瀬野君や瀧川君みたいな“格好良いイケメンタイプ”、よりも一ノ瀬君のような平凡な顔立ちの方が映えるのよ？」

「知りたくなかった新事実………」

というか、平凡な顔立ちって……。まあ、自覚してるけどさ。

俺はこれで接客しろ、という事だろうか。多分そうなんだろうなあ。

というか、化粧って面倒臭いな。して貰った俺が言うのもなんだけど、こんなのを毎日している女性方は、最早尊敬に値するね。

「今日は料理を運ぶのと、注文を聞きに行くのをお願い。さっき教

えたとおりだからね」

「はあ……」

「あ、後なるだけ声は高くね。今でもそこまで低いわけじゃないけど、とにかく高く、それと女性らしさを意識すれば大体は騙せるから」

さいですか……。

俺はやる、と決めたからには最後までやりとおすタイプ。数回咳払いして、軽く息を吐く。

——高く……高く……。

「い……いらつしゃいませ」

「お……予想以上！ うん、オツケーだよ。アルバイト中は燈夜^{トウカ}じゃなくて燈歌^{トウカ}って名前だね」

なんか……キャバクラみたいだな。燈歌^{トウカ}って言うのは源氏名？とやらで。いや、キャバクラとか行った事無いんだけど。

「それじゃ、お願いね」

「はあい……」

高めの声で、俺は溜め息交じりに返事を返したのだった。

「新人さん？ 俺、第二位なんだけど……この後一緒にどう？」

「おい、抜け駆けは無しだぜ。俺と一緒にさ！」

「い、いえー……すみません、まだまだ終わりそうに無いので……失礼しますね」

はあー……ナンパも日常茶飯事、か。

というか、俺が男って気付けよ……骨格とか肩幅とかで気付かないか、普通？ いや、慧みたいに華奢だと分からないだろうケド……俺は普通だぞ、普通！

一度ホールに戻る。

少しの間静かな空間が支配する。水を貰って飲み込むと、ちょっと落ち着いて来た。

と――。

「つかー！ 腹減ったぜ」

「ふ……思ったよりも長引いたからな」

は、基に幸仁ーっ！？

そ、そんな……く、クソ、バレる訳にはいかねエ！？

「燈歌ちゃん、瀬野君と瀧川様にメニュー訊いて来て」

お、俺がつ！？ つか瀧川“様”って……。ファンクラブの方ですか、そうですか。

うあー、緊張するー……。

大きく深呼吸して、いざ、出陣！

「ご、ご注文はありますか？」

……………こ、声裏返ったーっ!!

顔が赤くなつていくのを感じる。けれど流石幸仁、何の反応もなく日替わり定食を頼んだ。

基は少し怪訝そうに俺を見つめていたが、無視するように醤油ラーメンを。

「日替わり定食1つと、醤油ラーメンを1つですね。畏まりました」

素早く礼をして、俺は逸早くその場から離れようと背を向ける。

「なあ、お前……………」

ビクウッ。

「……………いや、何でもねエ。気のせいだろ」

「し、失礼しますー……………」

し、死ぬかと思ったー……………ヤベえよコレ、ヤベえよコレ。大事な事だから2回言いました。

これ……………いつバレるか分かんないぞ、本当に。

再び溜め息を零したい気分になるも、どうにか俺は抑えたのだった。

基と幸仁が帰って、俺も安堵しながら仕事を続けた。

人間、慣れというものは怖いもので、俺は高い声を出し続けるのも女装でさえ楽、と感じるようになっていた。

……なんて思っていたから、神は俺に試練を与えたんだろう。

「燈夜、どこに行っただろうね……」

「……行方不明……」

「アルバイトする、って言ったのは分かってるんだが……購買には居なかったし」

「教えてくれませんでしたしね……」

「おかしいです。兄さんリーダーが反応しません」

「う……燈夜ちゃん成分が足りないい」

「……雫様と若菜様の発言には、突っ込んで宜しいのでしょうか？」

「……おい、どんな仕打ちだコレは？」

あいつ等、いつもは中庭で食べてるじゃないか！？　なんで都合良くこっちに来るんだよ！？

「結構な団体さんだねー。それも、皆君と一緒にいる女の子達だよね？」

「……ええ、まあ」

「行っただけじゃない？」

悪魔っ！？　俺には行っただけじゃないの漢字が誤字変換されて、“逝”ってに聞こえたぞ！？

「行かなきゃお給料は無いよ？」

楽しんで……絶対楽しんで……！！

ええい、行つてやるさ！ 行けばいいんだろ、逝けばっ！？

「じ、じ」……ご注文はお決まりですかー？」

ひい……怖い！ 特に雫にバレた時にや、俺の貞操が……危ない！

「あ、私は――」

「くんくん……兄さんの匂いがします」

お前は犬かつ！

なんて突っ込みを入れるわけにもいかずに黙っていると、7人の視線が俺に集中する。

これは……絶体絶命のピンチ……！？

えと……えと！？

「お、お兄さんって、一ノ瀬燈夜さんの事ですか？ それなら当たり前ですよ。私、燈夜さんと仲良いですしー」

……何言ってるんだ、俺？

いやしかし、言ってしまったからには、これで突破するしかない！

「仲が良いって……どういことですか？」

あれ……視線が怖い。それも皆だ。姉さんでさえ微笑みながら眼が細まっている……！

「私の名前、燈歌って言うんですけど……名前が似てるのと、好みとかが似てるから気が合っちゃって……この前は、燈夜さんを私の

部屋にご招待したりー」

な、何言ってるんだこの口はっ！

アレだ……俺はモテないからって、見栄を張っているんだ。うん、見栄張りたくなるよな？ 俺、実は結構モテるんだぜ！ みたいな。………雫や姉さんの前でこれを言ったのは、間違いだったと思うけど。

死亡フラグ乙です。

「……今日は帰らせて頂きますね」

「……私もお供しよう」

「僕は一度、第五位の寮行くから……」

「校舎内はお任せくださいまし」

「見つけたらDPで連絡ね？」

「兄さん……ふふふ」

……俺、バイト終わったら死ぬ？ 死ぬよな、コレ？

ふらふらとしながら食堂を出て行く6人の美少女達。凄くシュールだけど、そんな事を考える暇も無く、俺は命の危険を感じていた。

「………」

くい、と。

制服の裾を掴んで、志藤が俺を見上げていた。

「……一ノ瀬君……バレてる」

「え……」

「……凶星？」

う……。

「……良く分かったな。雫でさえ分からなかったのに」

「……カマ……かけた」

「え？」

「……事は俺、今自分でバラしたってことか!？」

「うわぁ……何してンだよ、俺。阿呆か。」

「はぁー、と溜め息を零す俺。」

「一ノ瀬君………燈歌」

「うん？　じゃなくて………はい、なんでしょうか？」

「一応、今はアルバイト中。高い声を出しながら、俺は接客を続けた。」

「………オムライス」

後日談。

志藤にはバレたけれど、特に問題は無く。
女性6人に問い詰められたけど、適当に言い逃れて……それも特

に問題は無く。

問題は、1つ。

『わーい、燈歌ちゃん可愛いー!』

『確かに……慧殿にも負けず劣らずです』

「いつの間に写真撮ったんだお前らーっ!？」

マナとマハードの手元には、3桁にも及ぶ写真の数々。

軽いパンチラまであるのは、俺の精神を大きく削る、というか……。

「あ、燈歌ちゃんってパンツも女性用だったんだね？」

「もう止めてくれーっ!！」

御神にもバレていた俺は、本気で不登校になりかねなかった、と。

はああ……。

「……この前は、燈夜さんを私の部屋にご招待したりー」（後書き）

や、やってしまったー……！

もう1つの遊戯王小説、通称“僕らの”でもやった女装ネタ。まさか燈夜までも犠牲になるとは……！

燈夜には……頑張ってもらいたいです。色んな意味で。

感想、評価等お待ちしております！

「――俺が、友達になってやるよ」

講義も終わり、アルバイトも終わり。

とうとう明日は、待ちに待ったアカデミア行事――文化祭だ。

――時刻は夜。

薄暗闇が島を包み込む、睡眠の時間。

彰正先生と御神も眠っているだろう遅い夜中の時間帯……俺は最後の見直しをしていた。

『元気だね、マスターは』

「まあな」

講義中、ずっと寝てたしな……げふん、げふん。

そんな事実は全然全くこれっぴちも無きしにもあらずだから。なんてマナに言っても無駄だろうケド、心中で言い訳をしておく。

幾つも並べられた机と椅子の数を確認……よし。

更衣室の代わりとなっている第五位の寮の食堂奥。衣装の数……よし。

昼間に貰った食料……よし。どれくらい繁盛するかは分からないけど、充分足りるだろう。

主に女性陣がやってくれた飾り付け……うん、よし。結構様になる。つてる。

「明日は、マナとマハードも手伝ってくれよな」

『はい』

『わ、私も……ですか』

「モチ。期待してるぜ？」

基、幸仁、そしてマハード……御神も顔は滅茶苦茶良いし、人気の高い彰正先生も手伝ってくれるという。女性客は集まるだろう。

男性客？ 言わずもがなだろう？

唯一浮くのは俺んだけど……まあ、俺はキッチンで仕切ったりや良いだろ。ナンパしてくる輩が出てきたら仲裁役として俺が出て行く程度で。

『——燈夜殿』

俺が外に並べてある1つの椅子に腰を下ろすと、どこか真剣な表情でマハードが話し掛けて来る。

ちなみに、マナはいつも通り俺にくっついて来ている。マナの顔が俺の真横にあったり胸が背中にあたったりとかかなりの役得具合だが、正直慣れっこなので無視。

『あの日……御神新殿が全て話した時の事を、憶えておりますか？』

「……………」

あの日は、色々あった。

御神との出会い。結姫たち含め、全員（正確には“殆ど”）が元は地球の人間だという事、ソフィアの中から志藤が出てきて、ソフィアとのデュエル。

そして、俺は——弱さを、突き付けられた。

『志藤殿がデュエルに敗北し、倒れた時……燈夜殿から起こった突如の爆発。あれは一体——？』

「俺を、選んでくれた奴だよ」

『っ……！？』

マナが俺から離れる。

俺から放たれる異質な気配……オーラを感じ取ったのかもしれない。

『燈夜殿を、選んだ……？』

『けど、マスターを選んだのは私たちのはずだよ？』

ああ……そうだ。

「俺を選んだのは、マナとマハードだよ、間違い無く。けどお前ら他にも、俺を選んでくれた奴がいるんだ」

『それは、一体……？』

「……………」

——まだ、その“時”では無い。

脳裏に、あの時間こえた女性の声が響いた。

「まだ秘密だな。近い内に、ちゃんと教えてやるよ」

「……誰と話してやがんだ、オメー？」

「っ……なんだ、ソフィアか」

「その名前で呼ぶんじゃないよ」

気が付くと、ソフィアが怪訝そうに俺を見つめていた。

当たり前だけど、精霊化しているマナやマハードは他人には見えない。慧や結姫たちも見えないんだから、ソフィアが見えるはずも無い、か。

だから、俺が独り言を喋っていたように見えた、と。

……うわー、痛い子だわー、俺。

「で、誰と話してたんだよ？」

「え？ えっと……さっきまで居ただけど……どっか行っただけかな？」

「……………」

う……視線が痛い……。

けれど無理矢理納得してくれたのか、ソフィアは静かに椅子に座り込んだ。

「お前はもうしたんだよ？ 明日にや文化祭だぜ？」

「別に……オレ、元々夜行性だからよ。いつもこの時間は適当に歩き回ってたんだ」

「へー。んじゃ、講義中はどうしてんだ？」

「まあ、サボり？」

「……………」

居眠りしてる俺より悪いな、こいつ。だからって睡眠学習もやっちゃいけない気がするけど。

「……あの、よ」
「ん？」

暗くて、ソフィアの顔は見え辛い。どこことなく顔が赤く感じるのは、照れているからだろうか？

「彩伽は……アイツは、元気かよ？」

彩伽——志藤彩伽。

へえ、と俺は笑みを浮かべる。

「心配してんのか？」

「べつ、別にンなんじゃねーよ！ただ、その……こ、このアカデミアに来てからずっと一緒だったから……」

それが、心配してるってことなんだよな。

とは言わないが、俺はソフィアに感じていた印象が変わるのを感じていた。

「元気だよ。相変わらず口数は少なかったりするけど、ちゃんと周り見て行動してるし、何より結姫や凜那みたいな友達と一緒に入れて、楽しそうだ」
「……そうか」

——笑っていた。
ソフィアは微かに、口元を緩ませていた。陰になって良くは見えなかったけれど、それだけは確かだ。

「お前はどんなんだ？」

「……オレ？」

「ああ。お前は友達、つくら——」

「イラねー」

俺の言葉を遮るように、ソフィアが拒絶する。

「ダチなんて、裏切るだけじゃねーか。どれだけ一緒に居て、親友だとか何とかほざいても……結局、最後はオレの傍から居なくなっちゃう」

過去……ソフィアの過去に、何があつたかなんて俺なんかには想像出来ない。

それと同時に、ソフィアはその過去を話したくないんだろう。誰にだって、話したくない過去はあるもんだ。

それが大きい小さいかの違いはあれど、な。

「——地球に居た時、」

「は？」

俺にだって話したくない過去の1つや2つ、ある。だから無理に聞くんなんて野暮な事はしない。

「慧って、お化け屋敷が嫌いだし。基は逆に大好きで、いつもお化け屋敷に連れて行こうとしてた。幸仁はその仲裁に入って、俺はその後、いつも二手に分かれよう、なんて妥協案を出してた」

「な、何言い出してんだ？」

「……俺が通つてた高校の文化祭に雫が来た時、喫茶店の接客して

きた俺を単独指名、とか言って教師を困らせた。姉さんさ、なんだかんだ高校のミスコンに出て、優勝しちゃって……優勝者の特権で、俺にキスしようとして来てさ。あの時は焦った」

「おい、一ノ瀬……？」

「遊戯王の大会に出た時、スゲエ気の合ったプレイヤーが居てさ。俺、一回戦負けで慧たちをずっと待ってたんだけど……その人とずつと話し込んでんだ。会社に対する不満とかぶつけ合って、途中、2人で強制退場されるころまで盛り上がったんだぜ？」

「おいッ！」

つと、話しすぎたか？

ノリに乗って雫と姉さんの話までしちまったぜ。やれやれ、自重しないとな。

「友達つてさ、結構大事なんだぜ？ そりゃ、家族だろうが友達だろうが、“他人”に変わりないし……何考えてるか分からない」

当たり前だ。

二次元の世界とかならともかく、相手の気持ちが全て分かる人間なんて居ない。

「もしかしたら、疎ましく思っているんじゃないか？ 俺の発言に、怒ってるんじゃないか？ 嫌われて、しまったんじゃないか……？」

俺も、昔はそんな事ばかり考えて、他人と触れ合うのが怖くて仕方なかった。

まあそれは、雫や姉さん、慧と触れ合っている内に解けていった

んだけど……閑話休題。

「けど分からないからこそ、友達同士は笑い合える。そう思わないか？」

「……笑い、合える……」

「ああ、コイツ、俺の此処が嫌いなんだ……」って思ったら、笑い合えないだろ？」

なんか、説教みたいになっちまったな。

こちら辺で切り上げるか。

それこそ、こんな説教垂れて嫌われちゃだからな。

「——俺が、友達になってやるよ」

「……とも、だち？」

「ああ。俺がお前の友達第1号だ！ んでもって、明日の文化祭にや栗や姉さん達含め、皆お前の友達だ。裏切るとかそんなの考えずに、一緒に過ごす仲間——な？」

最後、ちよつと臭かったか？

ソフィアは暫く無言だった。俺も夜風を感じながら、沈黙を守る。

「……今日は、帰るな」

「……ああ。お休み、ソフィア」

「……その名前で、呼ぶなっの」

静かな抗議をして、ソフィアが帰っていく。

「……さて！」

明日は、文化祭だ。

「――俺が、友達になってやるよ」（後書き）

きやー、燈夜君格好良いー！！

てな訳で“今のところは”順調に毎日更新をしている廃棄人形です。

デュエル？ 無いですねー。『僕らの』でもそうですけど、私が書く遊戯王の二次創作はデュエルが少ないみたいです。反省。

しかし、私はストーリー重視！ プロットとかそんなの有りませんけどストーリー重視！

ちなみに、この小説のストーリーはカップ麺が出来る程度の時間で確定しました（爆）

感想、評価等お待ちしております！

番外編〜誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜〜（前書き）

今回は番外編です。

ですので短いです……すみません（汗）

ゲストは我等が主人公、一ノ瀬燈夜！

番外編〈誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜〉

作者「わーい、初めての番外編だー」

燈夜「……なんで棒読みなんだ？」

作者「眠い」

燈夜「一睡もしないで書いてるからだろ!？」

時刻は午前7時前です。

作者「しかも書いた日の前日は友達の家泊まりに行ってたさー。
疲れた、疲れた……」

燈夜「帰ってから早々アニメばっか見てるしな。仮眠取れよ」

作者「だが断る」

作者「はてさて、この番外編では、この小説の誕生秘話（笑）と……
最後には主人公、一ノ瀬燈夜の紹介をしようかと思っていたりしてるんだと思うよ？」

燈夜「なんか、凄い曖昧だな」

作者「……眠いからテンションがおかしいんでございます。大事
じゃないから1回程度しか言わなかったんじゃないかな？ だよな

？」

燈夜「俺に訊くな」

作者「てなわけで！ 誕生秘話を……！！」

燈夜「（餡^{あん}の入ったドローパンを食べ始める）」

作者「メインの方の『遊戯王 僕らの進んで行く道』で、今とある理由で番外編STORYをやっているんです。遊戯王の二次創作なのに遊戯王が殆ど出てこないから、なんかしっくり来なくて……というわけで、この小説を書こうと決めました」

燈夜「んぐっ……。けどさ、設定とか殆ど練ってないんだろ？ 現在進行形で」

作者「ぎく。だってぶっちゃけると、ソフィアの“友達”に関する過去………全く考えてませんもん、テヘ」

燈夜「それはぶっちゃけ過ぎてないか！？」

作者「世界の名前も考えてないし……文化祭の内容も全然だし……その他色々なイベントも考えてない！」

燈夜「威張んな！」

作者「まあある程度考えている事と言えば燈夜の過去や留年の秘密（留年していて、基や幸仁よりも1つ年上、という事を忘れている人は多いはず）」

燈夜「ふむふむ」

作者「基と燈夜の馴れ初め。謎の声の正体。御神の秘密……程度？」

燈夜「少なっ！　良くそんなんて投稿しようなんて思えたよな」

作者「そういえば、忘れかけてたけど燈夜も小説書いてるんだよね。君はどうなの？」

燈夜「俺はちゃんとプロット作ってやってる。0から全部作って、話の流れを書いて、後は腕次第って感じだ」

作者「尊敬するよ！　流石私の書いた人物！」
キャラクター

燈夜「……………」

作者「それはともかく……ヒロイン、多いよねー」

燈夜「お前が言うのか、それをつ！？」

作者「雫と若菜……結姫に凜那、慧、彩伽やソフィア、リリア……
そしてマナたち」

燈夜「待て。雫と姉さんは……まあ、まだ良いとして、だ。マナたち”ってなんだ」

作者「え？」

燈夜「なんでそんな事訊くの？」みたいに首傾げるなよ！」

作者「君は知っている、という設定にしよう。燈夜は僕が書いてるメイン小説、“僕らの”は知ってるでしょ？」

燈夜「なんか突然頭に浮かんだ内容だけど、まあ一応」

作者「私の中では、主人公の諏訪晃すわアキラの精霊は皆ヒロインって感じだよ？」

燈夜「多すぎじゃね！？ “LEGENDs”なんて目じゃないよな！？」

作者「……と、“僕らの”も読んで下さっている方でしか分からないお話はここまでで。話を戻すと、今の私たちの会話……精霊のヒロインはまだ増えるって言うフラグだよ？」

燈夜「お前って………」

作者「例えば、『サイレント・マジシャン LV8』辺りは既に喋ったよね」

燈夜「お前って……お前って……！！」

燈夜「ところで、毎日更新とか凄いらしいな」

作者「そりゃ凄いことだよ！ 私だって驚いてるもん！」

燈夜「して、頑張っている理由は？」

作者「早めに完結させて“僕らの”のストックを作りまくって、何よりオリジナル小説を書きたい」

燈夜「……そっか」

作者「ただね？ こんな設定をちゃんと練っていない小説なのにメインの“僕らの”を超える人気だっていう……」

燈夜「分かる、分かるよお前の気持ち。そついうのってなんか、すげえやりきれないよな」

作者「やつぱ皆、シリアスばっかの“僕らの”より（超苦手な）コメディ入れてる“LEGENDs”の方が良いんだね」

燈夜「それと、早い更新も関係あるんだろうな」

作者「ですよー」

作者「眠いー……けど後は燈夜の設定を少しだけ書き込むだけだ」

燈夜「ああ、頑張れ」

作者「うあゝ………適当のモン加えて良いよね？」

燈夜「止めるよ？ 雫に殺されるぞ？」

作者「……………あい」

いちのせとウヤ
一ノ瀬燈夜。

主人公。

年齢：18歳。

性別：男性。

身長：考えていない。平均辺り。

体重：同じく考えていない。平均辺り。

趣味：遊戯王、料理、小説執筆、読書

特技：特に無し。

メインデッキ：《ブラック・マジシャン》軸の魔法使い族デッキ。

本作、『遊戯王 LEGENDS〜伝説の名の元に〜』主人公。

平均だけどころなく童顔気味の顔立ち。しかし、女装が似合う辺り結構に中世的な顔立ちなのかもしれない。

実はバイ。バイとは、男性でも女性でも恋愛関係、若しくは性行為を行える事である。

食堂でアルバイトしている。その際は常に女装していて、その時の名前は燈歌。この事を知っているのは数少なく、精霊以外のヒロイン勢だと彩伽のみ。

両親は既に居らず、高校に通いながらもアルバイトをして生計を立

てていた。そのアルバイトも、数件を掛け持ちしていた。
そのアルバイトの際、料理に興味を持ち始めた。

幾つかのデッキを持っているが、その殆どが“魔法使い族”モンスターが軸とされたデッキ。

また、ある程度を除いて殆どのカードを売却してしまった為、余りのカードは無いに等しい。

たまに魔法使い以外のデッキも使う。

御神新の「君は、弱いね」という発言から強くなる事を決意する。
しかし、慧、基、そして幸仁と手加減……というよりは実質的に負けていた事を知って、酷くショックを受けてしまう。

作中の“選ばれし存在”で唯一、御神新に選ばれていない存在。
マナとマハード以外のある存在にも選ばれているが、それが何なのかは不明。

それを知っているのは燈夜のみである。

燈夜「……思ったより長かったな」

作者「うん、私も驚いてる。もっと少ないかと思った」

燈夜「……ま、まあお疲れ様。次からは文化祭編だろ？」

作者「そうだよ。結局のところ、どれくらい長くなるかは分からないんだけど……一応、文化祭編として分けておくつもり」

燈夜「頑張れよ。俺たちもそうだけど……何より読者様の為にさ」

作者「ありがとう。私、頑張るっ！——と、言う事で」

燈夜「……………?」

作者「お休みなさいm(——)m」

燈夜「…………えと、じゃあ締め^しめるか」

深呼吸。

燈夜「これからも、《遊戲王 LEGENDS》伝説の名の元に、
《を宜しく願いますッ！》」

番外編〈誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜〉（後書き）

会話にもあったとおり、次からは文化祭編です。多分。

ちゃんとデュエルもありますし、遊戯王の二次創作……ですよ？

そういえば、他の作者様の二次創作を読んでいると、人気投票なるものがありますね。

私もやりたいなー、なんて……。

誰でも良いので、それについての意見を下さい。お願いしますm（

——）m

感想、評価等お待ちしております！！

「皆、楽しもうぜッ!」

朝は清々しいほどに晴れ渡り、暗雲は勿論白い雲さえ見当たらない。温かな日差しは第壱校の文化祭を祝福しているかのように俺たちを包んでいる。

——文化祭開始まで、残り20分。

今頃女性陣は食堂奥で、用意された衣装に袖を通しているだろう。各言う俺も、基、幸仁、彰正先生と御神の5人と共に寮裏で着替えていた。

「……あの、今更なんだけど……彰正先生、そのモンスターで良いんですか?」

「うん、何か問題あるかな?」

「……いえ……」

いやしかし、《古代の機械騎士》は……目元以外、顔隠れてるし。流石に槍と盾は無いけれど、それでも凄くゴツイ印象だ。

……まあ、多くは突っ込むまい。

「チッ、なんか動きづれエな……」

「当たり前だろ……なんで《アックス・ドラゴニート》なんだよ」

「ご丁寧に翼まで。彰正先生と同じく斧は持っていない。しかし、本当になんで《アックス・ドラゴニート》? 確か基のデッキには入っていないはずだけど……」。

「……………落ち着かないな」

「……いや、なんかもう予想通りというかなんというか」

俺、実は誰が何の衣装を着るかは聞かされていない上に、ちゃんとその衣装がなんなのかを見てはいない。

だから男性陣は勿論、女性陣が何を着るかは分からない。自由意志にしたからな。

それはともかく。

幸仁……お前、やっぱり《正義の味方 カイバーマン》か。基や彰正先生より全然コスプレっぽくない。マスク以外は普段着でいても……まあ、ある程度は許容される格好だ。

……だというのに、なんつー存在感だ。
幸仁の元々のオーラか………それとも、どこかの世界に居るといふ海馬社長のプレッシャーか。

流石社長……侮れないぜ！

「燈夜君、僕はどうかだい？ 似合っていたら嬉しいけれど」

「……いや、そのモンスター分らないんですけど」

「おお、これは失敗。まだカード化されていないじゃないか」

ワザとらしい………けれど、無駄に似合っているから口を挟めない。服装はなんか、普通だ。それこそモンスターなのか、と疑問に思っってしまうほどには。

けれど、違うのは背中。

右側に白い翼。左側には黒い翼が対になって生えていた。いや、生えていたという言葉は語弊ごへいがあるけど………生えていたというより、映えていた、か。

「んで、お前のその格好は……」

「俺か？ 俺は見ての通り、《ブラック・マジシャンズ・ナイト》

だけど？」

「……………それなりにマイナーなモンスターだな」

紫色の甲冑に黒マント。表側は黒いけれど、その内側は赤い色をしているこのマントは、凄く格好良いと思う。

この衣装を作ってくれた手芸部の方々……………本当にお疲れ様です。そしてありがとう！ この恩はいつか覚えていたらきつと返すと思うよ？

ちなみに、ブラマジナイトが持っている剣も造ってくれたようで、腰に下げられている。本当に良い仕事をしてくれたよ、うん。

「さて、それじゃあ行くかい？」

「そうだね」

……………彰正先生と御神、キャラ被ってるよ……………。

俺たちが揃って食堂の方へ向かうと、既に皆、外に出ていた。おお、皆個性的だな。つい頬が緩んでしまっ……………自重せねば。

ふんっ。

「燈夜君。何変な顔してるのかな？」

「……………変な顔で悪かったな」

力^{りき}んだだけだいつ！

それはともかく。

俺たちに気付いた女性陣は、小走りで俺たちに近付いて来る。

「燈夜！ どう、かな？」

真っ先に声を掛けてきたのは、慧だ。

慧が着ているのは、《E・HERO エレメンタル・ヒーロー ブルーム》。

緑色で、且つ葉っぱのようなドレスを身に纏っていた。胸元はオリジナルなのか、葉で覆われていた。

「ああ、良いんじゃないか？」

「そ、そうかな……えへへ」

まあ、知っている人も少ないと思うけど。

「兄さん。私、兄さんの為だけに着替えました」

「それは嬉しいけど……この文化祭中は、客の事も考えてな？」

「はい」

雫は《セイクリッド・グレイ》だ。本当なら彰正先生のように顔は見えないはずだけれど、兜を上にして顔を覗かせている。

……けれど、さ。

「なんつーか……似合っていない事は無いんだけど、違和感の塊だぞ？」

「それは、私も思っています。しかし、セイクリッドシリーズにはグレイくらいしかコスプレ出来そうに無かったので」

「それは……確かに」

その他は男性型だったり、人間じゃなかったりするしな。

「燈夜ちゃん。あたしはどうかかなぁ？」

「ん……ねえさ………え？」

……。

「姉さん………えと、それ何？」

大きく黒い翼は姉さんの手にくっつけられていて、口には嘴くちばし、だ
ろうか？

拘束具のようなベルトが身体に取り付けられていて、胸が妙に強
調されている。その部分は凄く………なんつーか、エロい。

えと………姉さんのデッキで、且つ翼に嘴、とすれば………まさか。

「勿論、《ヴェルズ・フレイス》よ？」

「………やっぱりか」

ぱたぱた、と口で喋りながら翼を動かす。

流石姉さん………予想外過ぎる。

「………アレは、手芸部もかなり手を焼いたようだ」

「………だろうね。という凜那は………」

《コマンド・ナイト》。赤い鎧を着込んだ、場の戦士族モンスター
を強化する女性モンスターだ。

腰には剣も掛けられていて、元々の凜那の雰囲気もあってか、か
なり似合っている。

「流石凜那。自分に合ったモンスターを選んでるな」

「う……そ、そんな見るな。恥ずかしいだろう」

そういうもんか？ 確かに、俺もずっと今の姿を見られると恥ずい
いな。

「あの……と、燈夜さん。私はどうでしょうか？」

「お？」

結姫だ。結姫の姿をまじまじと見つめる。

格好は……余り憶えていないけれど、確か《ローズ・ウィッチ》
って名前の、モンスターだったはず。

頭には大きな華の帽子を被っていて、赤と緑を混合させた服を着
ていた。

赤と緑……マリオとルイージ……いや、そんな事考えちゃ駄
目だ。駄目ったら駄目だ！

「ああ、綺麗だと思うよ」

「そ、そうですか？ ありがとうございます……！」

しかし、似合っていることに間違いは無い。俺は邪念を捨て去り
ながら結姫にそう答えた。

「……お、ソフィアもちゃんと着替えてくれたんだな」

「し、仕方ないから着てやったんだよ。ん、んなに見るなッ！」

ソフィアは……えっと、《墮天使ナース・レフィキュル》か。

背中には6枚の翼。体中を包帯で纏わせたソフィアの姿がそこに
居た。

「そうか？ 結構似合ってるぜ？」

「っ……………あ、ありがと……………よ」

あれ、素直だな……………前なら睨んできそうな感じなのに。

昨日、友達になろうという会話が実を結んだかな？ だとしたら嬉しい限りだ。

俺がその事に微笑んでいると、リリアが腕を組みながらふふん、と鼻を鳴らしている姿が視界に映る。

「さあ、わたくしの姿を見て跪きなさい、一ノ瀬様」

「いや、しないから」

リリアは《ネフティスの導き手》だ。リリアのデッキは《ネフティスの鳳凰神》を軸としたビートダウンだから、予想通りって感じだ。

しかし、低攻撃力の導き手が偉そうに仁王立ちしている、というのもなんか……………シニールな光景だな。

「跪きはしないけど、似合ってるぜ」

「あ、当たり前ですわ」

くい、と。

俺の羽織っているマントを引っ張る感触がした。

俺が振り向くと、志藤が無表情で俺を見上げていた。

「……………一ノ瀬君……………格好良い……………」

「ありがと。お前もすげえ可愛いぞ」

「……………うん」

顔を赤く染めて俯いてしまう。照れているのだろうか？ という

か、今思つと凄いい恥ずかしい台詞言わなかったか、俺？

志藤に釣られたかのように、俺も赤面してしまう。

志藤の格好は『勝利の導き手フレイヤ』だ。チアリーディングとかで使う……ボンボン？　みたいなのは背中、というよりお尻辺りに仕舞われている。

……なんか、尻尾みたいだ、とか思つたら負けなんだろうか？

さて——文化祭が始まるまで残り10分も無いだろう。

今頃檉都町や、もしかすると他の町の人たちも船に乗つてこの島に来て、文化祭開始を今か、今かと待ち侘びている頃だろう。

最終チェックだ。

「皆、集まってくれ」

俺の一言に合わせて、皆が皆集まってきたくれる。

合計人数は俺含めて13人。結構な人数だ。

「最終確認だ。交代は3時間毎。最初は御神、幸仁、慧、凜那、リア、ソフィアだ。次に彰正先生、基、結姫、雫、姉さん、志藤。それを交互に行く」

「あれ……そういえば一ノ瀬君はどうするんだい？」

「俺は仮にもリーダーを任せられてるしな。取り敢えずはぶっ続けだ」

そりゃ、少しの休憩は取らせて貰うつもりだけど、と続けた。

「そ、それじゃ不公平ですよ」

「そうだ。燈夜の分も——」

「要らないって。俺がしたいんだからな」

それに。

ずっと働いていた方が、余計な事を考えなくて済む。

「……………」

「——話を戻すけど、基本的に俺はキッチンに入ってる。料理を出来るメンバーは限られてるから、多分キッチンとホールの交代は無いと思う」

俺を筆頭に、御神と彰正先生はずっとキッチンだろう。客寄せとして暇な時に行って貰う事はあるだろうけど。

「以上！ 時間は無いから、異論とかは無しにしてくれ。それじゃ

——」

『只今より、第64回第壹デュエルアカデミア檜都校文化祭を、開始致します』

「皆、楽しもうぜッ！！」

多種多様の返事が、俺たちを包み込んだ。

「皆、楽しもうぜッ!!」(後書き)

はい、という訳で文化祭編開始です!

今回は皆さんのコスプレ内容の紹介とシフトを。

コスプレに関しては、はい、一言言いますと……………。

「うわー、凄いカオスだ」

特に若菜が。次に彰正辺りかな? 顔隠れてるし。いや、幸仁だろ
うか……海馬、もといカイバーマンですし。

あ、それと。

書きながら思ってたんですが、「あ、リアデュエルしてない」。
だからデッキが何なのかも知られていなかったオチ……なんとい
う不覚。流石私、馬鹿だ。

はい、ネフティスデッキです。もうぶっちゃけますが。

感想、評価等お待ちしております!

「それは違いますっ！」

「燈夜、オムライス1つ」

「燈夜、ヤキソバ1つだそうだ」

「一ノ瀬様、カレーライスがお1つだそうですわ」

「なんで俺ばかりに頼むんだよっ!？」

慧、凜那、リリアの順番で俺に言ってくる。

言われた通りにメニューを用意しながら、俺は次々と品をテーブルに並べていく。それを凜那とリリアが持って行った。

「だって……料理してるの、燈夜だけだよ？」

「ええい、御神とソフィアはどうしたっ!？ キッチン担当はアイツらだろ!？」

「えと、御神さんは食料の調達をしに購買へ……ソフィアさんを連れて」

「早っ!？ まだ文化祭始まって1時間だぞっ!」

「……思ったより、繁盛してるね」

お前らのおかげでな……!

アカデミア屈指の美少女集団、慧、凜那、リリアが揃ってるんだ。結姫たちが居ないだけまだマシだけど、もし集まったら渋滞が起きるんじゃないだろうか。いや、起きるな……確実に。

その上、第一位の特待生且つ、女子が設立したファンクラブの数々……その一角を担っている幸仁も居るんだ。

だ、としても。

………疲れる。

「ほい、オムライスとヤキソバ」
「うん」

慧に入れ替わるように、凜那が戻ってくる。

「大変そうだな、燈夜」

「ああ……そうだ、凜那、料理は苦手そうだったけど盛り付けは出来るだろ？ カレーは出来たから、福神漬とか置いてくれ」

「ああ」

スプーンを添えて、カレーライスの入った皿を渡す。後は凜那に任せて大丈夫だろう。

次は……………。

「やあ。頑張ってるね、燈夜君」

「労いは良いから、早く手伝ってくれ」

御神とソフィアが、手に荷物を持ってきながら帰ってきた。見たところ結構な量だけど、確かにこのペースなら、すぐにでも必要だろう。

俺には何も言わずに行っただのは止めて欲しいけれど、結果的にはこれで良い……………のか？

「燈夜」

ん…………ソフィア？
テーブルに食材を置いたソフィアが、外を指差しながら声を掛けてきた。

「3番席に、お前を呼んでる奴が居るぞ？」

「は……俺？」

一体誰だ……？

手を洗って、布巾で拭いてから外に出る。

3番席、3番席……ここか。

「えっと、俺………私に何か御用でしょうか？」

そこに座っていたのは、1人の男性と3人の女性だった。

男性は厳格そうな雰囲気醸し出している。筋骨隆々、素手で熊と戦っていそうな体格だ。

一方で、女性3人は綺麗な人たちだ。基本的には桃色の髪形をしていて、薄い桃色だったり濃い桃色と個性豊かだ。

って………。

「あれ……もしかして、結姫の………！？」

「あら、やっぱり貴方が一ノ瀬燈夜さん？ お察しの通り、私は結姫の母です」

「……ふん」

やっぱり………！

檉都町で見た事はあった。あの時はもう1人、小さな女の子が居たけれど……。

「貴様か。結姫を誑たぶらかせた男というのは」

「たぶつ………？ そ、そんなんじゃないやありませんよ！ 結姫………さん

とは、階級の差なんて無いように、仲良くして貰っているだけです」

「どうだかな」

うわぁ……なんか、雰囲気通り怖え……。

「まさか、本当に第五位とはね……結姫の趣味って、はっきり言って悪いわね」

「全くね。顔が良い訳でも無いし、デュエルモンスターズが強い訳でも無い。我が妹ながら、やれやれだわ」

……スゲエ言い草。流石の俺もイラツと来たぞ。

とは言え、彼女たち（多分結姫のお姉さん方）が言っている事は確かだ。結姫の趣味は知らないけれど、俺は顔も平凡、遊戯王も微妙……。

うわ、自分で言ってる泣きなくなってきた。

「それは――」

「それは違いますっ！」

「ゆ、結姫っ？」

結姫が居た。

珍しく怒った表情で、席に着く家族たちを睨んでいた。もしかすると、結姫の怒った表情を見るのは初めてかもしれない。

「あらあら。結姫ったら……」

「……ふん。第五位なんぞの人間に誑かされおって」

気付くと、俺たちは注目の的だった。

食堂から出て来た御神たちも遠目で見ているし、お客さんたちも俺たちに視線を集中させていた。

それはそうだ。

咲之宮家のトップは、たまにテレビ出演もしている。今や経済界

にも顔を出している結姫の姉2人も、かなり有名だ。少なくとも、俺でさえ知っているくらいには。

——だからこそ、注目を浴びないはずも無かった。

「それは、違います。私は燈夜さんが燈夜さんだからこそ、一緒に居るんです」

……………。

「燈夜さんは私が危険に陥った時、助けてくださいました。私が泣きたい時、隣に居てくださいました。お父様たちはそういう時、傍に居てくれた事など有りませんでしたのに……………」

「……………」

「取り消してください」

静かに。

結姫が、視線を鋭くする。

「私は燈夜さんに誑かされてなどおりません。取り消してください！」

結姫はやっぱり、俺の事……………好きに、な……………ちやっただのか？

——端から見るとバレバレだぞ、お前。

基に言われた言葉が脳裏に浮かぶ。

そう……………俺は、“あの時”からいつも鈍感のフリをしていた。

もう誰も好きにならない、恋愛なんてしないって……………そう決めたから。

慧に始まり、雫と姉さん……志藤、ソフィア、凜那、リリア……
そして結姫。

数人は、ほんの少し前からだ。特にソフィアは、朝……いつもと
様子が違った。それがもしかしたら恋なんじゃないのか、って思っ
たんだ。

自惚れか、ただのナルシストか。それだったら良かったのに。

——俺なんかを、好きになっちまって……！

「結姫……」

けど。

俺は、逃げてたんだ。

皆の気持ちに気付いていないフリをして、正面からぶつかるとか
ら逃げてた。なのに……。

結姫は、俺の為に、怒ってくれてる。実の親に、反抗してくれて
る。

「結姫」

俺は結姫の肩に手を置いて、一歩前に出る。

「確かに俺は、顔が良い訳でも、デュエルモンスターズが特別強い、
という訳では有りません。特徴といえば、伝説のカードを使ったり、
シンクロやエクシーズ召喚を行うところでしょうか」

そんな事を知らない一般のお客さんがざわつくのを尻目に、俺は

結姫の家族を1人ずつ順番に見つめていく。
その後。

結姫の父……咲之宮家のトップの眼を、真っ直ぐに見据える。

「けれども俺は、結姫さんの……結姫の大事な友達です。彼女が困
つていれば助けるし、笑っていれば一緒に笑います」

「燈夜さん……」

逃げちゃ、駄目なんだ。

どんな事にも、俺は――。

「もしも、第五位の俺なんかでは、娘さんを任せるのが不安だとい
うのなら……」

いつの間に居たんだろう。

御神が隣に居て、俺のデュエルディスクを手に持っていた。

俺はそれを受け取りながら、左腕に装着する。

「コレで、俺の実力を見極めてください」

燈夜さんの言葉が、胸に響く。

初恋――私はやっぱり、燈夜さんが好きです。

優しくて、明るくて、けれどどこか寂しげで……ドローパンが好

きで、甘い物が好きで、鼻にクするような辛い物は嫌い。

私は、やっぱり。

例えば燈夜さんが私じゃない誰かを好きになったとしても、一緒に居たいです。

「そう……良いわ。なら、アタシが試してあげる!」
「っ…………!？」

声が聞こえたのは後ろからだった。
振り向くと…………。

「ゆ、結羅^{ユウラ}!？」

咲之宮結羅…………私の妹で、最年少のプロデュエリストとして活躍している子。

「結姫、あの子は…………？」

「…………私の、妹です」

「妹、って言う…………プロデュエリストの?」

こく、と私は頷く。

燈夜さんが、結羅とデュエル…………いくら燈夜さんとは言え、プロのデュエリストでは…………。

「結姫」

「…………燈夜さん」

「…………俺を、信じてくれ」

ッ…………!

「……………はい」

燈夜さんが信じて、と言うのなら、私は信じる以外の選択肢なんて有りません。

「——デュエルッ！——」

お客様の全員が全員、そのデュエルに注目している。有名なプロデュエリスト、咲之宮結羅のデュエルを生で見られるのだから当然と言えば当然なのかもしれない。

勿論、慧さんや凜那さん……お父様やお母様も、そのデュエルを静かに見据えていた。

「アタシの先攻よ、ドロォッ！ アタシは魔法カード、《E・エマージェンシーコール》を発動！ デッキから《E・HERO エアーマン》を召喚！」

「HEROデッキ……！？」

「エアーマンの効果を発動するわ！ サーチ効果により、アタシは《E・HERO オーシャン》を手札に加える。カードを1枚伏せて、ターンエンドよ」

そう、結羅のデッキはE・HERO……何度も融合し、相手を追い詰めるデッキ。

燈夜さんの話では、遊戯王GXという漫画、及びアニメの主人公がE・HEROを使っているらしいです。

「俺のターン、ドロォッ！ ………………あ」

今初めて手札を確認した燈夜さんが、呆けた声を上げました。
どうしたんでしょう？

「……で、」

で？

「デッキ間違えたーッ！！」

え、えええっ！？

「ぶ、ブラマジデッキじゃないのか……くう、仕方ない。このままやるしかないか。俺は《テラ・フォーミング》を発動！ デッキからフィールド魔法、《フューチャー・ヴィジョン》を手札に加える！」

《フューチャー・ヴィジョン》……？

効果は知っていますけど、燈夜さんが使うのは初めて見ます。一体どんなデッキなのでしょう？

「《フューチャー・ヴィジョン》発動！ 自分、または相手が通常召喚に成功した時、そのモンスターは次の自分のスタンバイフェイズまでゲームから除外される！」

「っ……厄介ね」

「——《フォーチュンレディ・ライティ》を召喚！」

フォーチュンレディ！

しかし、本当に燈夜さんは魔法使いが好きですね。新たな好み、発見です。

「ヴィジョンの効果により、ライティ―は除外される。その時、ライティ―の効果を発動！ カードの効果により場を離れた時、デッキからフォーチュンレディを特殊召喚する事が出来る！ 来い、《フォーチュンレディ・アーシー》！」

地属性のフォーチュンレディ、ですね。

フォーチュンレディはLVによって攻撃力と守備力が増減するモンスター。アーシーは確か、LV×400ポイントでしたから……。攻撃力は、2400です。

「バトル！ アーシーでエアーマンを攻撃！」

「っ……！」

結羅LP4000↓3400・

「この時、リバーカードオープン！ 《ヒーロー・シグナル》！ E・HEROが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキからE・HEROを特殊召喚出来るわ！ 《E・HERO フォレストマン》を守備表示で特殊召喚よ！」

「くう……次のターン、融合されるかもな……俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

結羅の手札にはオーシャンが居るのは分かっています。そしてスタンバイフェイズ、フォレストマンの効果で融合が手札に加わる……。。

となると、結羅は少なくとも氷のHEROと大地のHEROは出す事が出来る、という事になります。

「アタシのターン、ドロ―！ スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果でデッキから《融合》を手札に加えるわ！ ……《融合》

発動！ 場のフォレストマンと、手札の《E・HERO ザ・ヒー
ト》を融合！ 融合召喚、《E・HERO ノヴァマスター》！
「そ、そっちな！」

火炎のHERO、ノヴァマスター。大地でも氷でも無かったのは
予想外だったのか、燈夜さんの顔が驚愕に染まる。

「さらに《E・HERO オーシャン》を召喚！ このカードはヴ
イジョンによって除外されるわね。安全だわ、ありがとう」
「……どういたしましてっ」

ヴい、ヴィジョンを利用されちゃいました……。

オーシャンは自分のスタンバイフェイズ、墓地のHEROを回収
出来るモンスター。戦闘破壊される心配は無くなったので、結羅が
笑みを浮かべた。

「バトル！ ノヴァマスターでアーシーにアタック！」
「っ……っ」

燈夜LP4000↓3800・

「ノヴァマスターがモンスターを戦闘破壊したら、1枚ドロ―出来
るわ。カードを1枚伏せて、ターン終了よ」

「ただだぜ！ エンドフェイズ時、俺はこのカードを発動する……
！」

1枚の伏せカードが、オープンする。

「《フォーチュン・インハーリット》ッ……！」

デュエルはまだ、始まったばかりでした。

「それは違いますっ！」（後書き）

デュエルは途中で止めました。残りは次回（笑）

しかし、アレですね。結姫の妹、結羅ちゃん……なんか、大人びてる？

確か設定年齢は12歳程度だった気がする……あれか、姉（結姫以外）の影響か。そういうことにしておこう。

感想、評価等お待ちしております！

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き？」

——《フォーチュン・インハーリット》。

フォーチュンレディが破壊されたターンに発動可能の、通常罠カードだ。

効果を知らないのか、結姫の妹……結羅ちゃんは眉を潜めていた。

「このカードはフォーチュンレディと名の付いたモンスターが破壊されたターンに発動出来る。次の俺のスタンバイフェイズ、手札からフォーチュンレディと名の付いたモンスターを2枚まで特殊召喚することが出来る」

「……へえ。良いわ。アタシはこのままエンドよ」

「俺のターン、ドロー！」

手札を確認する。

これは……？

「スタンバイフェイズ、ライティーが帰還！　そしてインハーリットの効果により——」

手札のフォーチュンレディは3体。

その中の炎のフォーチュンレディは出しても意味は無い……と、すれば、だ。

「俺は手札より、《フォーチュンレディ・ウォーテリー》を2体特殊召喚する！」

「水のフォーチュンレディ……？」

「ああ。このカードは、フォーチュンレディが表側表示で存在する

時に特殊召喚に成功した場合、カードを2枚ドロする！　俺はウオーテリー2体の効果により、4枚ドロする！」

「4……っ!？」

一気に手札が肥えた。

……ブラマジと違って、手札が潤沢してくれるのはフォーチュンレディの良いところであり、悔しいところだな。閑話休題、今はそんな事考えている暇は無いな。

「さらにスタンバイフェイズ、場のフォーチュンレディ達はLVが上がる。メインフェイズ、魔法カード、《ワーム・ホール》！　俺の場のモンスターを1体、次の俺のスタンバイフェイズまでゲームから除外する！　対象はライティー！」

「っ……!？」

「そして、ライティーが“効果”によりフィールドを離れた為、効果を発動！　来い、《フォーチュンレディ・ファイリー》！」

今度は炎のフォーチュンレディだ。

コイツは、強力だぜ？

「ファイリーの効果を発動！　このカードがフォーチュンレディと名の付いたモンスターによって、表側攻撃表示で特殊召喚に成功した時、相手の表側表示モンスターを1体破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「なっ……!？　それじゃ、《破壊輪》と同じじゃない！」

「ああ。《破壊輪》と違うのは、俺はダメージを喰らわないところだな——俺はファイリーの効果で、《E・HERO　ノヴァマスター》を破壊する！」

「っ……ちっ！」

結羅LP3400↓800・

後ファイリー1体でも倒せるライフポイント。

「バトル！ ウォーテリーで、プレイヤーにダイレクトアタック！」

「通さないわ！ リバーズ罠、《和睦の使者》！ このターン、アタシが受けるダメージは0よ！」

「くっ……！」

この世界では、《和睦の使者》や《ガード・ブロック》の採用率が比較的高い。

俺の考えだけど、理由としては、やっぱりライフポイントが4000と少ないからだろう。

地球なら8000だから、別に入れなくても生き残る確立は高かった。少なくともこの世界よりは、格段に。

俺ももしかしたら、ライフが4000と考えると採用してしまうかもしれない。

……… 売っちまったけど。

「俺はカードを3枚伏せて、ターン終了だ」

「……アタシのターン………」

結羅ちゃんの手が、震えていた。それこそ遠目から見ても分かるくらいには。

『——成る程、のう……。どうする、新たな主人？ 咲之宮家の娘の為に、このデュエルを始めたのは自分でも分かっておるっ？』

脳内に響く、女性の甲高い声。どこか近くに居るだろうマハード

やマナが何も言わないのを見ると、この声には気付いていないんだろう。

俺は心中だけで返事をする。

（ああ）

『しかし、あの末っ子も子供……プレッシャーに押し潰されそうになって居るぞ？』

……………。

周囲の視線はまだ、慣れたものだろう。仮にもプロデュエリスト、視線なんていつも浴びっぱなしだろうし。

しかし——多分、彼女を縛り付けているのは父親の眼差しだ。

結姫を遠ざけたくらいだ。一番年下とは言え、何をするか分からない。

『さて、どうするのかのう……………？』

……………。

……………。

よし。

「結羅ちゃん！」

「っ……………な、何よ？」

「そういえば、まだ自己紹介して無かったよね？俺は一ノ瀬燈夜。結姫とは、いつも仲良くして貰ってる」

「……………咲之宮、結羅よ」

しかし、なんか口調が鋭いな。見たところ12、3歳くらいなの……結姫とは、やっぱり環境の違いか。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き？」

「え……？」

「と、燈夜さん？」

「……檜都町で俺を見た時、結羅ちゃん、結構俺を敵視してたよね？」

沈黙。

もし……俺の考えが正しければ、だけど。

「そして今回も。ただ俺とデュエルしたかった、なんて理由じゃないよね……——姉……結姫を、取られる気がしたの？」

「……！ アタシは……！」

「大丈夫だよ」

大丈夫。

「結姫は、君の傍から居なくならないから」

「ッ……！」

結羅ちゃんが、結姫を見つめる。暫し、視線が絡み合う。

「……そっか……そうだね……だって、アタシのお姉ちゃんだもんね」

顔に笑みが浮かぶ。

プレッシャーなんて無かったように、その姿は自然体だった。それこそ、結姫の母親があらまあ、と眼を細め、上の姉2人が驚き、

父親が暫く呆けてしまうつくらいには。

『お前も、罪な男よの』

(……さて、ね)

俺は、負けたかな？

「アタシのターン……ドロー！ スタンバイフェイズ、《フューチャー・ヴィジョン》で除外されていたオーシャンが帰還して、効果を発動！ アタシは墓地の《E・HERO エアーマン》を手札に加えるわ！ そして、《大嵐》！」
「げっ……！？」

まだ《運命湾曲》とか引いてねえよっ！？

「チェーン！ 《強制脱出装置》！ 対象はオーシャンで、さらにチェーン！ 《亜空間物質転送装置》！ ウォーテリーをゲームから除外しておく！」

そこでチェーンは終了。オーシャンは手札に戻り、《フューチャー・ヴィジョン》と《死霊の巣》を巻き込んで《大嵐》の処理は終了了。

「《E・HERO エアーマン》を召喚して、サーチ効果を発動！ デッキから《E・HERO プリズマー》を持つてくる。魔法カード《融合》！ 場のエアーマンと手札の《E・HERO オーシャン》を融合！ 来て、《E・HERO アブソルートZero》！」

「来たか……」

氷のHERO……一番厄介で、且つ俺が一番好きなHEROだ。
HEROの中でトップを誇っているのは、アブソとネオスが同率だ
ったりする。

フュージョン・リカバリー

「《融合回収》！ 墓地の《融合》と《E・HERO オーシャン
》を手札に戻すわ。そして再び《融合》！ 場に居るアブソルト
と手札のプリズマーを融合して、再びアブソルトZeroを融合
召喚！」

「そして、フィールドの離れたアブソルトZeroの効果で俺の
モンスターは全破壊、か……」
「そういうこと」

やれやれ……デュエルで力を証明するとか言いながら、

「魔法カード……《ミラクル・フュージョン》！」

——負けちゃったら、意味無いじゃんか。

「墓地の《E・HERO エアーマン》と《E・HERO プリズ
マー》を除外し、融合！ 《E・HERO The シャイニング
》！」

《E・HERO The シャイニング》ATK2600↓32
00・

「バトルよ！ The シャイニングでダイレクトアタック！」

おっと、シャイニングからアタックしてきたのか。

燈夜LP3800↓600・

「トドメ！ 《E・HERO アブソルトZero》でダイレクトアタック！——瞬間氷結（Freezing at moment）！！」

「うわあああっ！」

寒ッ……！！

名前の通り、絶対零度の攻撃を受けて、俺のライフポイントは0を示した。

負けた、か。

はぁ、と俺が肩を落としていると、結羅ちゃんが俺の元へ歩いてきていた。

その顔はとても清々しい。それは多分、“勝利”という二文字が全てではないんだろう。

「ありがとう、燈夜お兄ちゃん」

「お……っ？」

お兄ちゃんっ？

萌える、なんて言っている暇も余裕も無い。ただただ驚いて、俺は呆けてしまっていた。

「あたしね……確かに、お姉ちゃんが取られちゃったんじゃないか、
って不安だったの」

あれ……誰、この子。別人？

「上のお姉ちゃんたちはいつも仕事ばかりで……あたし、いつも
結姫お姉ちゃんの後ろをくっついてばかりだった」

親は、仕事で。姉も、仕事で。

結羅ちゃんの傍に居てあげられた家族は、結姫だけだった。
だから、居なくなるのが怖かったんだ。

「けど……違ったんだね。例えば結姫お姉ちゃんが別の場所で住むよ
うになっちゃっても、アカデミアに通いだしても……結姫お姉ちゃ
んは、結姫お姉ちゃんなんだね」

「……そうだよ。君にとつて、代わりなんて居ない……たった1人
の、“咲之宮結姫”という姉だから。心配しなくて良いんだよ」

そう言つて、俺は結羅ちゃんの頭を撫でた。

少し驚いたように眼を見開いた結羅ちゃんだけど、頬を赤く染め
て、嬉しそうに顔を緩めた。

「……そうだろ、結姫？」

「……燈夜さん」

いつの間にか、俺たちの傍に結姫が……いや、結姫だけじゃない。
咲之宮家大集合だ。

「……俺は、力を証明出来ませんでした。すみません」

「……ふん。確かにお前は結羅に負けた。だが——」

「貴方はどうやら、ちゃんと結姫を……会って間もない結羅のこと
も、見てくれていたようですし」

「まあ……良いんじゃない？ デュエルしてる時は、ちょっと……
ちよーっと、格好良かったし」

「お姉様、顔が赤いわよ」

「う、うるさい！」

……どうやら、多少は認めてくれたようだ。結果オーライだな。

後は、家族水入らず……俺は喫茶店のオーナー（役）として、1
つ咳払いをして頭を下げた。

「どうぞ、この喫茶にてお寛ぎを。幸福な時間を、貴方に——」

休憩時間。

俺は寮裏に廻って、壁に寄りかかりながらふう、と息を吐いた。
煙草でも吸っていたら様になっただろうか、なんて変な事を
考えてしまう。

『マスター……大丈夫？』

「ああ……うん、大丈夫だよ」

多分。

精霊化しているマナが実体化して、俺の隣に腰掛ける。そして俺の肩に頭を乗せる形で寄りかかってきた。

軽めの重力感が俺に押し掛かる。

普通の人間と大差ないような暖かい温もり。静かな時間。柔らかひとときな一時。

「俺……また、負けたんだよな」

「……マスター……」

「俺……また、また……ッ！」

——負けた。

この世界に来て、俺は負けばかりを味わっている。

アカデミアに来て……慧の《聖なるバリア・ミラーフォース》

然り、基の《激流葬》然り、幸仁の《死者蘇生》然り……今回然り。

その他、この世界に来て何回もデュエルした。

いつものメンバーの中でも、御神以外とは全員デュエルをした。けれど。

「俺……弱いなあ」

雫の《セイクリッド・プレアデス》のバウンスに勝てず。

姉さんの《ヴェルズ・バハムート》のコントロール奪取にやられ。

結姫の《椿姫ティタニアル》の制圧力に負けて。

凜那の《アルカナ・ナイトジョーカー》のパワーに押されて。

リリアの《ネフティスの鳳凰神》で成す術も無く終わり。

ソフィアの《堕天使ゼラート》による効果により、ワンターンキル。

志藤の《神聖騎士パーシアス》に圧倒された。

「っ……」

「マスター……！」

涙が、出て来た。

もう、俺は18歳だつて言うのに……何、泣いてンだよ、俺？
膝を畳んで、俺はその間に顔を挟んだ。

俺の精霊だとは言え、余り泣き顔は見られたくない。

まだ、俺は子供なんだ。

カードゲームで負けて、泣いてしまつ子供^{ガキ}。

「俺……っ！ 皆を………ッ」

——守れないんだなあ………！

涙が、折角の衣装を濡らしていく……。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き？」（後書き）

いえーい、結羅ちゃんフラグ立てたぜー。

これはヒロイン増加かーっ？

私の馬と鹿。ただでさえヤバイ人数のヒロインなのに、そろそろ把握し切れませんで。私と読者様が。

いやしかし、元々見切り発車で投稿始めた小説だから別に云々。

てか、この小説……メインの小説のPV超えちゃったっ！？ 馬鹿な、まだ1ヶ月も過ぎてないのに！

燈夜の涙。悔しさ、辛さ。

共感出来る人、出来ない人、それぞれだと思います。

妹を、姉を、友達を守りたい。なのに、自分が弱いせいで守れない。

それどころか、自分は“守られてしまう”。

それに、燈夜は涙を流しました。

これから彼は、どんな道を歩むのか……自分でも分かりません（笑）

感想、評価等してくださいお願いします（切実）

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」

「彰正先生、良く仮面外さないで料理出来るよな……」
「……ああ」

メンバーが交代して、俺は基とそんな話を話した。

《古代の機械騎士》のコスプレをしている彰正先生だが、流石に料理をする時は仮面を外して視界を広げるんじゃないか、と思っていた俺だが……。

まさか、外さないなんてな。流石、御神の次に完璧超人の彰正先生。

「つと、んな事言ってる場合じゃないな。基、6番席にこれとこれを頼んだ」

「はいよ」

「——志藤！ それ以上やると焦げる！」
「っ……」

今回のキッチン担当は俺、彰正先生、志藤だ。

雫と姉さん……特に姉さんにキッチンを任せると、それこそ大惨事。喫茶店を続けられなくなってしまう。

結姫は、流石お嬢様。料理なんてした事がないという。

志藤は結構飲み込みが早く、練習したら一部の料理は作れるようになっていた。だから、その一部の料理は全部任せている。

「……兄さん」

「ん……どうした、雫？」

昼時も過ぎ、何とか一段落付いたところで、外から雫がやって来

た。

俺は手を洗って、タオルで汗を拭きながら雫の方へ向かい直る。

「大丈夫ですか？」

「……？ ああ、これくらいのスピードなら、まだ食材は——」

「兄さんが、です」

俺？

「俺はまあ、結構楽しんでるし。そりゃ疲れるけど……その分、遣り甲斐あるよな」

「——眼、赤いです」

「ッ……！」

大丈夫か、って“その事”だったのか。

少し前、俺が休憩中……マナの前でだらしく泣いてしまった。

涙の痕とかは顔を洗って取ったけれど、眼の充血は無くなっていなかったのだろうか？

「……大丈夫だ。俺はそんな、柔^{やわ}じゃないさ」

「……そうですか」

そう言って、外へ戻って行く。

……まさか、気付かれてたなんてな。俺ももうちょっと気をつけないと。

なんて決意をしていたら、今度は姉さんがこっちに来た。

「燈夜ちゃん、疲れた」

「ええい、我^{わがまま}俥言わないっ！ そして引っ付かない！」

ぺいつ、と姉さんを引つpegしながら俺は溜め息を吐いた。
姉さんの台詞も、本気じゃないという事は分かってる。いや、疲れたのは本当だろうケド、だからと言ってサボりに食堂へ来たわけじゃない。

多分……気分転換に俺に会いに来ただけだろ。

「燈夜ちゃん……キスしよう？」

「しません」

「えゝ、どうして？」

「どうしても何も有りません。俺たちは弟姉でしょうが」

「……………」

……本気で分からないって顔された。解せぬ。

「常識的に考えてみなよ。弟姉って事はつまり血の繋がりがあつて事だぞ？」

「常識的ゝ？　じゃあ、キスしても大丈夫だねゝ？」

「どういつ常識を浮かべたんだっ！？」

「……恋する乙女の常識……………」

「志藤が答えるのか！？　そして姉さんは頷かない！」

全く……。

それに俺が言うつと随分と酷い奴に聞こえるけど、まだ皆片思いなんだから。恋人同士という前提があるならまだしも……。

その後、結姫が貰つてきた注文の料理を俺は作りにキッチンへ戻つていった。

「……………ぷはっ！」

水うめー。

コップ1杯分を一気に飲み干した俺は、疲労で身体が凝り固まってきた身体をほぐす為、大きく伸びをした。

うは、気持ち良い！……………まだ5時間しか経っていないというのに、俺の身体も弱くなったものだな、うん。

「———ないっ！！」

「……………ん？」

叫び声？ というよりは怒鳴り声だろうか？

外がなにやらざわついている。揉め事だろうか？ だとしたら、

俺の出番ってことになるけど……………。

「燈夜！」

「基？」

外で客寄せ、もといホールをしていた基が妙に慌てた様子でやってきた。

ううん？

「どうしたんだ……………うおっ！？」

「ほら、お前の出番だぜ……………！」

「ちょ、押すなって……………！ うわっ！？」

地面とのキス。あれ、キスってこんな味したっけか……あはは、不味いぜ。

つか、それより鼻が痛い……鼻血出たんじゃね？………良かった、出てない。

「私がまだ第三位なのは、ただ単に私の力不足……！それは疑いようの無い事実！だが、友は関係ない！」

「そうか？聞いたところによると、今お前の傍に居る中に、第五位の存在が居るといふが？」

「それは……！」

………？

起き上がって、土埃を払う。

さっきの怒鳴り声……凜那だったのか。12番席に座る男性に大声を張り上げながら、凜那は怒りに肩を震わせていた。後ろを振り向くと、基がぐっ！とサムズアップ。なんで俺やねん。

なんて聞こうとして、結姫が俺の傍に来た。

「私が頼んだんです」

「うん……？」

「仲裁役は、燈夜さんに任せましょうって」

……Why？

「私は……いいえ、私と結羅は燈夜さんに助けられたんです。いつもぎくしゃくした空間が、今日は和やかなのも、燈夜さんのおかげですし」

面白い事に――咲之宮家家族は、未だに3番席で楽しんでる。勿論結羅ちゃんも一緒だ。

理由としては、結姫を含めた家族全員で文化祭を廻りたいからだという。今は結姫のシフトだから、それが終わるまでずっと居るらしい。

……20分ごとに俺が呼ばれるのだけは、ご勘弁願いたかったんだけどな。

閑話休題。

「だから今回も、俺に行けと？」

未だに言い争いしている御園親子を指差す。なんか、周りのお客様も引いてるってば……。出来れば俺もお近付きになりたくない雰囲気……。

「はい」

「………良い笑顔だね。逝って来ます」

結羅ちゃん、頑張つてとか言いながら手振らないで。結姫のお父様、威圧感込めて俺を睨まないで下さい。

……やれやれ、だ。

………。

「どうか為さりましたか、お客様方？」

今は凜那も客だからな。

「っ……燈夜」

「……誰だ？」

わたくし

「私めはこの喫茶店のオーナーをさせて頂いている、一ノ瀬燈夜と申します。何か揉め事のようなのですが、何か——」

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」

言葉を遮らないで欲しかった。渾身の演技げふんげふん。渾身の格好良い姿と台詞だったのに。

「やはり、落ち零れの傍に居るという話は本当のようだったな……
凜那」

「っ……！ 燈夜は落ち零れなどでは——」
「凜那」

今度は逆に俺が、凜那の台詞を止める。
そして凜那の前に出て、俺は椅子に座っている男性と対峙した。
結姫の父親とは別の威圧感。

そういえばこの人も、エキシビジョンデュエルの時に居たっけな。
確か……道場？ だか教育場とかいう場所をやっているらしい。
かなり有名らしいから、余程名を知られているんだろう。

だからこそ、多分。

俺のような、第五位という底辺に居るといふ人間が嫌いで、そして一向に上の階級へ上がれない凜那へも怒りを持っているのだろう、と俺は推測した。

「貴方は、このアカデミアのレベルの高さをご存知でしょうか？」
「ああ。俺もかつてはこの学園の第一位へのし上がった男。このアカデミアのレベルの高さを買って、凜那を通わせているのだからな」

「そうですか——しかしそれは、数十年前のお話では？」
「……何が言いたい？」

ふう、良かった。どうやら図星のようだ。

「あの時よりも、さらにレベルが高くなっているとしたら……
凜那を怒る資格、御座いませんよね？」

「……………」

「誰か1人、この場に連れてきてください。別に貴方でも宜しいですよ。そして俺とデュエルしましょう」

「何？」

「燈夜っ？」

これは、俺が俺に与える試練でもある。

俺は、負けてばかりで……このままじゃ守りたい存在も守れない。

そんなのは……“嫌だ”。

だから。

「もし俺が勝ったのなら、凜那はレベルの高いアカデミアの中で頑張っているのだと、認めてあげてください」

「……もし、お前が負けたらどうする？」

だから……！

「俺が負けた時は、このアカデミアを出て行きますよ」
「なっ……！？」

——だから俺は、敗北した時、自分に罰を与える。

ざわめきが起こる。それは凜那や凜那の父親だけではなく、遠目に見ていたお客、咲之宮家家族……そして、俺の学友たちにも及んでいた。

「な、何を言っている！？ これは御園家、私たちの問題だ！ 何故お前が退学する必要があるんだっ！？」

「——どうしますか？」

「燈夜ッ……！！」

凜那の事は無視して、父親の瞳を真っ直ぐに見据える。

これは、決意だ。

生半可な罰じゃ、彼は動いてくれないだろう。仮にも教育場とやらを経営している敏腕。様々な人間の瞳を見てきただろう。

ここで、自分に甘くしちや駄目なんだ。

「……………良いだろう。しかし、手加減はしない……………俺のところに居る、一番強い者を連れてくるが、良いか？」

「父様っ！？」

「望むところですね」

「燈夜……………！ 何故……………ッ」

悪いな、凜那。

俺は、お前を利用してるんだ。

これで勝てなきゃ、俺は世界はおろか、お前らを守る事さえ出来ない……………それなら、俺は居ない方がマシだ。

その場合、皆の気持ちを裏切る形になるけれど——そもそも、凜那や他の皆みたい綺麗な子達は、もっと相応しい人が居るはずだ。この覚悟に押し負けるくらいじゃ、俺は駄目なんだ。絶対に。

「一刻ほど待て。今から呼ぶ」

喫茶店は、一時休業になっていた。

それでも、何故か客は増えていく一方。その1人1人には一応、料理は出せないけれど水は差し出している。

その中——私、御園凜那を含めた喫茶店運営をしている全員が集合していた。

「燈夜……どうしてそんな事言っただの？」

「そんな事って……なんだ？」

「惚けんじゃねエよ！ アカデミアを出て行くがどうかだッ！」

「ああ、それね。大丈夫だって、俺が負けなきゃ良いんだろ？」

そう言つて、飄々としている一当事者（燈夜）。

その姿は、まるでいつものと変わらない。

「……………一ノ瀬君……………」

「んな心配そうにするなつて、な？」

「兄さん……兄さんが出て行く時は、私も一緒ですから」

「あたしもよ」

「…………俺が負けること前提になつてないか？」

それはそれで悲しい、と燈夜は溜め息を零した。

「燈夜お兄ちゃん！」

「ん……結羅ちゃん？」

「結羅？」

結姫の妹だという女の子が近付いて来る。この子、確かプロデュエリストじゃなかったか……？ いやしかし、雰囲気の違いすぎる。……同姓同名、だろうか？

「お父さんから伝言だよ。『そうになったら咲之宮グループで雇ってやる』だって」

「なんで皆負けること前提なんスか！？」

「……しかし、御園ヴェーベルと言えば、有名だぜ？」

「ヴェーベ……？ 教育場だからって、そんな名前なんだ」

御園ヴェーベル……父が設立し、早12年。プロデュエリストを輩出した人数は既に3桁を超え、今や世界的にも有名な教育場だ。そんな教育場で、父様は一番強い人間を連れてくると言う。

「正直、勝てる見込みが見当たりませんわ」

「はつきり言われて傷付きました……」

「………燈夜は強い。俺は心配などしては居ないがな」

「俺の味方は幸仁だけだよっ！」

「僕も信じてるよ、燈夜君」

「あ、御神は良いです」

私の、所為か……。

もしも……もしも負けたら、私の所為で燈夜が……ッ！

「安心しろよ、凜那」

どくん、と。

真っ直ぐに私を見つめる燈夜に、鼓動が高鳴る。

「お前を縛る糸は、解いてやるからよ」

もっすぐ、一刻が過ぎる――。

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」（後書き）

自己犠牲精神が激しい主人公、一ノ瀬燈夜でした（笑）！
この辺は晃と同じですね！。

しかし自分の小説を読み返したら、私は思った。

「燈夜…… 実際、負けてばかりじゃねww?」

まともに勝ったのが結姫を襲った暴漢という………これはヤヴァイ、うん。

とは言え、この凜那の為のデュエルで勝つか負けるかは、未来の私に寄ります（爆）

感想、評価等お待ちしておりますね〜！

『甘えるのかの?』

船に乗って来てくれたのは、男性だった。

どこか高圧的な視線を持つ、第一印象はそれ程良くない男。しかし、態々連れてきたんだし実力は確かなんだろう。

俺はふう、と息を吐く。

「先程の言葉、忘れていないな?」
「貴方こそ」

位置について、ディスクを展開する。
デッキを装着して、数秒眼を閉じた。

『さて……どうなるかの、一ノ瀬燈夜?』

俺にしか聞こえない、女性の声が俺に問い掛ける。

俺はそれに答えず、ゆっくりと瞼を上げた。

「態々僕が呼ばれるとはね。先生の気紛れにも困ったものだ」

「それは悪かったな」

「本当だよ。第五位という底辺に位置する人間とデュエルしなければならいなんて……しかし、やるからには勝たせて貰おうか」

「そう簡単に行くと思うなよ?」

周りには、それこそかなりの人だかりがある。下手をすると結羅ちゃんとデュエルした時よりも多い。

俺は腰に取り付けてあった剣を取り出して、地面に突き刺す。

「僕の名前は風科雄斗^{かざしなユウ}! 未来のデュエルキングだ、覚えて置くが

良い！」

「上等だ！ 俺は一ノ瀬燈夜だぜ！」

「デュエルツー！」

「先攻は俺、ドロー！ 俺はフィールド魔法、《魔法都市エンディミオン》を発動！」

俺と風科……観客全員を巻き込んで、魔法都市が建つ。

「《テラ・フォーミング》！ デッキから2枚目のエンディミオンを持つてくる！ この時、魔法を使った為、エンディミオンに魔力カウンターが1つ乗る！」

《魔法都市エンディミオン》 魔力カウンター 0 ↓ 1 .

「《魔力掌握》！ 対象はエンディミオン！ 効果により、魔力カウンターが1つ乗るぜ！ さらにデッキから同名カードを手札に加える事が出来る！ 効果適用後、エンディミオンにカウンターが乗る！」

《魔法都市エンディミオン》 魔力カウンター 1 ↓ 2 ↓ 3 .

「《おろかな埋葬》！ デッキから《神聖魔導王エンディミオン》を墓地へ送る！」

《魔法都市エンディミオン》 魔力カウンター 3 ↓ 4 .

「そして、《黒魔力の精製者》を召喚！ 効果を発動！ このカードを守備表示に変更し、エンディミオンに魔力カウンターを1つ乗

せる！」

《魔法都市エンディミオン》 魔力カウンター4 ↓ 5 .

「へえ。このターンで一気に5つまで乗せたか。第五位にしては、良くやる方つてところか」

「お褒めに預かり光栄だ。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」
「僕のターン、ドロー」

さて……風科はどんなデッキを使う？

俺は緊張で息が詰まるのを感じる。このデュエルに負けたら退学、とか宣言したんだ、仕方が無い。

「僕は《ジェネクス・ウンディーネ》を召喚。このカードが召喚に成功した時、デッキから水属性モンスターを墓地へ送り、《ジェネクス・コントローラー》を手札に加える……僕が墓地に落とすのは、《黄泉ガエル》だ」

「……ジェネクス、か？ ……いや………」

地球の話だが、一時期、ジェネクス帝というデッキが流行った。と、すれば。

純ジェネクスと考えるのは尚早だ。もしもジェネクス帝としたら、帝モンスターの効果によってエンディミオンは除去される可能性が高い。破壊耐性はあっても、除外、バウンス耐性は無いからな……。

……相性が悪いか？

「僕はカードを1枚伏せて、ターンを終了するよ」
「俺のターン、ドローッ！」

……何にせよ、早めに決着を付けたほうが良さそうだ。

「俺はまず、『マジカル・コンダクター』を召喚！ さらに『魔力掌握』を発動する！ そして魔法を使った事により、エンディミオンに1つ、『マジカル・コンダクター』には2つ魔力カウンターが乗る！」

《マジカル・コンダクター》魔力カウンター0 ↓ 2・

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター5 ↓ 6 ↓ 7・

「『魔力の精製者』を攻撃表示に変更し、効果を発動！ 守備表示にして、魔力カウンターを乗せる！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター7 ↓ 8・

ライトロードのライラと同じで、『魔力の精製者』は効果で守備表示にする為、表示形式を変更しても効果を発動出来る。

これで8個……！

「魔法都市に乗っている魔力カウンターを6個取り除いて、墓地に存在する『神聖魔導王エンディミオン』を特殊召喚する！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター8 ↓ 2・

魔法都市の王、エンディミオン。このデッキのキーカード！

「エンディミオンがこの方法で特殊召喚に成功した時、墓地の魔法カード……『おろかな埋葬』を手札に戻す！ そして発動！ デッキから『氷結界の風水師』を墓地へ！」

《マジカル・コンダクター》魔力カウンター2↓4・

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター2↓3・

「《マジカル・コンダクター》の効果を発動！ 1ターンに1度、魔力カウンターを取り除き、その取り除いた数と同じレベルのモンスターを手札か墓地から特殊召喚することが出来る！ 俺は3つ取り除き、墓地に存在する《氷結界の風水師》を特殊召喚！」

《マジカル・コンダクター》魔力カウンター4↓1・

「LV4の《マジカル・コンダクター》にLV3の《氷結界の風水師》をチューニング！」

「なっ……それは、まさか……！」

「——魔導の道標よ、至高の光よ！ 今此処に、全てを解き明かし式を並べん！ シンクロ召喚！ 《アーカナイト・マジシャン》ッ！」

攻撃表示！

シンクロ召喚した事により、ざわめきが起こる。アカデミア生徒はもう周知の事実だから良いけれどな。

「このカードのシンクロ召喚に成功した時、魔力カウンターが2つ乗る！ 1つにつき、このカードの攻撃力は1000ポイント上がる！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター0↓2・ATK400↓2400・

「リバーズ罫、《漆黒のパワーストーン》発動！ このカードに魔力カウンターを3つ乗せて、1ターンの1度、魔力カウンターを乗せられるカードに1つ、移し替える事が出来る！」

《漆黒のパワーストーン》魔力カウンター0↓3・

「《漆黒のパワーストーン》のカウンターを1つ、《アーカナイト・マジシャン》へ！」

《漆黒のパワーストーン》魔力カウンター3↓2・

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター2↓3・ATK2400↓3400・

ハア……魔力カウンターの増減が激しくて、頭が痛い。

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ 《漆黒のパワーストーン》に乗っている魔力カウンターを1つ取り除いて、相手のセットカードを破壊する！」

《漆黒のパワーストーン》魔力カウンター2↓1・

「……速攻魔法、《エネミー・コントローラー》！ 僕は《ジェネクス・ウンディーネ》をリリースして、《アーカナイト・マジシャン》のコントロールをエンドフェイズまで得る！」

アーカナイトの攻撃力は3400・

残念ながら、エンディミオンでは倒せない……！ その上、相手の墓地には《黄泉ガエル》が居るのに伏せカードが無くなり、尚且つダメージも与えられない。

……最悪だ……！

「……俺は、ターン終了する」

《アーカナイト・マジシャン》がこっちのフィールドに帰ってくる。

「僕のターン、ドロ……！……ハハ、まだ4ターン目だけど、そろそろ終わりにしようか。折角来たんだし、僕も文化祭、見て廻りたいからね」

そんな……終わる……！？

「スタンバイフェイズ、《黄泉ガエル》が帰還する。手札から再び《エネミー・コントローラー》！《黄泉ガエル》をリリースして、またこっちに来て貰おうか、《アーカナイト・マジシャン》？」

「ッ……！」

「まだスタンバイフェイズだ、《黄泉ガエル》が帰還する。メインフェイズ！」

俺は……。

「僕は、《黄泉ガエル》をリリースして《風帝ライザー》をアドバンス召喚。効果により、モンスターのエンディミオンにはデッキの一番上へ戻って貰う」

やっぱり……。

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動。魔力カウンターを1つ取り除き、」

《アーカナイト・マジシャン》 魔力カウンター3 ↓ 2 ・ ATK 3
400 ↓ 2400 ・

「《魔力の精製者》を破壊する」

弱かったんだ。

「バトルフェイズ——《風帝ライザー》で、ダイレクトアタック」

燈夜 LP 4000 ↓ 1600 ・

燈夜、と声を上げてくれる皆が居る。

兄さん、とか。

燈夜ちゃん、とか。

一ノ瀬君、とか……。

凜那の声も、涙が混じって聞こえた。

「《アーカナイト・マジシャン》で……………直接攻撃だ」

燈夜 LP 1600 ↓ 0 ・

幾つかの結果を述べるなら。

まず、凜那は認められた。俺が第五位にしては良い動きをしたから、だという。ライフを1ポイントも削る事が出来なかったのにな……親はやはり子供に甘い、ということだろうか。

そして……。

「お前はこのアカデミアを去る、と言ったな」

「……はい」

「父様！ 別にそこまでしなくても……！」

「俺は別に、お前の退学を強制する気は無い」

「……え？」

退学しなくても良いって、事か？

「父様……！」

希望の光が見えて、凜那が笑みを浮かべる。

「……………」

退学は、しなくて良い。

皆の傍に、居て良い……………！

『甘えるのかの？』

どくん、と。

脳裏に響いた声が、俺の心臓を躍動させた。

『自分が決めた事じゃろう？ 良いのか、それで。誰かの言葉に、

好意に甘えて……お主は、それで良いのか？』

……。

良くない。

良い訳が無い。

「……いいえ」

俺は小さな声で、呟いた。

「俺は、自分で言ったんです。このアカデミアを去る、と。約束は破りたく有りません」

「燈夜ッ！？」

「俺は——このアカデミアを、退学します」

そうか、と……凜那の父は、眼を閉じた。

「何を言っているんだ！ 父様は強制しないと云ったんだ！ そんな簡単に決めていいのかッ！？ お前は——！」
「ただ……」

凜那の言葉を遮って、俺はどこか、力無い笑みを浮かべる。

「明後日の文化祭が終わるまで……で、良いでしょうか？」

「……ああ」

「——燈夜ッ！！」

ああ、この後。

皆に、色々言われるんだろうなあ……。

そんな事に内心げんなりしながら、俺は地面に突き立てた剣を取りに行ったのだった。

『甘えるのかの?』(後書き)

また……また負けた……ッ!

Q:こんな主人公で大丈夫か?

A:大丈夫じゃない、問題ある。

はい、燈夜の退学決定〜! どんどんぱふぱふ。祝い事じゃない?
ですよね〜。

しかし、実質負けてばかりだなあ……なんでこんな主人公なんだ。
面白(r y

さて、と。

この後の展開、どうしようかなっ(爆)

感想、評価等お待ちしております!

「女性って、怖いな……………」

——その後、特に何事も無く文化祭の一日目は終了した。

まあ、強いて言えば…………俺以外のメンバーが何度もデュエルを挑まれた事くらいだろうか。俺だけ蚊帳の外。解せぬ。

俺はそのコスプレデュエルの司会をしたり、観戦者に水を運んだり…………そんな事ばかりしていた。

…………完全に脇役だな。いや、脇役で良いんだけどさ。

てな訳で。

「皆さん、お疲れ様ー！」

しーん…………。

あの、えと…………皆、元気ないね？ 疲れた？

既に俺たちは衣装を着替え、制服に直っている。

御神と彰正先生はその衣装を洗いに行ってくれていた。明日、明後日と着るんだしな…………まあ、あの完璧超人2人ならそこら辺、問題は無いだろう。

「あのー…………どうしたんだ？」

「どうしたも何もねエだろ！」

ひっ！？

なんか久し振りに基が怖いっ！！

「退学…………ってなんだよ」

「まあ、そういう約束しちまったしなあ……」

「なんでそんな約束したのか、オレは訊いてんだッ！」

そ、ソフィアも怖いッス……。

俺は所在無さげに頭を掻いた。

「ん、勢い？」

「ふざけないで下さいっ！」

ふざけてないのに……。

「燈夜は、それで良いの？」

「良いも何もなあ……俺が決めた事だし。それに——」

「それに……なんですか？」

——それに、俺が居ても居なくても、世界は変わらない。

「……なんでも無い。とにかくっ！俺はこのアカデミアを出る。学費とかはもう全部自分で出したから問題は無いしな」

まあ、本当は卒業までの学費、寮費を一気に払ったからかなり勿体無いんだけど……しかし、約束は約束。破りたくは無い。

俺は目の前にあるお茶を一口飲んで、喉を潤した。

「兄さん、私——」

「駄目だ。雫と姉さんはこのアカデミアに残ってくれ」

雫の言葉を遮って、俺はそう伝えた。

これには、俺なりの理由がある。

元々、雫と姉さんは俺ばかりに構ってしまっからか、友達が少な

かった。そんな2人にも、結姫や凜那、リリア、ソフィア……志藤。勿論基や幸仁、慧もそうだ。

沢山の友達が出来た……というのに、俺の自分勝手な行動の所為で離れるのは罪悪感が……。

と、俺なりの考えがあつての事だぞ？ うん。
恥ずかしいから口には出さないが。

「燈夜ちゃんはある……その後、どうするの？」
「その後？」

……いや、ぶっちゃけ考えてないけど。

「取り敢えずは適当に旅するかね。元々結姫に会わなきゃそうするつもりだったし」

「そう、ですの……しかし、それでは……」

「金なら心配ないぞ？ 結構貯金も溜まってるし、旅の途中も多少は働くつもりだからな」

彰正先生、若しくは御神辺りに頼んで、雫と姉さんの口座を作つて貰うつもりだ。スズメの涙程度になるかもしれないけれど、仕送りもするつもりだし。

俺、なんて家族想いなんだ……！ くう、泣ける。

なんて内心、自画自賛をしながら欠伸を零した。今日は一日中働いたから、疲れたな……。……。

「……一ノ瀬君……」

「ん？ なんだ、志藤？」

「……また……会える？」

.....。

「ああ、会えるさ。時間が空いたら会いに来るしな」

「.....そう」

.....きつと、な。

俺はそう内心で呟いて、淡く微笑む。

「——はいっ！ これでこの話は終わりな。明日の話をしようぜ」

明日は文化祭2日目。今日よりも多い人数が来るはずだ。

「シフトは、一箇所だけ変更。最初に彰正先生たちのグループで、その後に御神たちだ。今日と同じで3時間毎。それで大丈夫か？」

「ああ、問題は無い」

幸仁の言葉に、皆各々に頷いてくれる。

良し、スムーズだ。俺も早く寝たい.....げふんっ。

「じゃあ——」

「1つ、良いか？」

凜那だ。

「どうした？」

「.....皆に、提案があるんだ」

“あの時”から、凜那は元気が無かった。だから接客の時もなるべくキッチンの方で動いてもらった。

俺の所為.....なんだろうな。間違いなく。

「明日は……燈夜を、休ませてやらないか？」
「は……っ？」

何言ってるんだ、コイツ？

「今日、燈夜はずっと働いていただろう。キッチンで料理を作り、購買や食堂まで食料を取りに向かい、マナーの悪い客を止めに入り………」と

「そうだね。僕は賛成だよ」

真っ先に賛成したのは、慧だった。

「べ、別にいらねえって。3日目は喫茶店出来ないんだぞ？ その時に休むから——」

「それなら尚更、明日は休んでください、燈夜さん」

——3日目は、このアカデミア文化祭最大のイベント、ミスコンがある。

生徒会に頼まれて、第壱校髄一と言って良い人気を持つこの女性陣がミスコンに参加するらしい。

……今更だけど、美少女ばかり集まったものだ。類は友を呼ぶ、とはこの事だろうか。

……え、俺？ 類じゃ有りませんが、何か？

「明日一日くらいなら、オレたちだけで大丈夫だからよ」

「そうです。兄さんは、残り少ないアカデミア生活を楽しんでください」

「……まあ、退学するという事自体納得している訳では御座いませ

んが……わたくしも、その方が宜しいと思えますわ」
「燈夜ちゃんは、自分の事を蔑ろにしすぎよ？」
「皆………」

ああ、もう……ホント、敵わない。

「……分かったよ。明日は、皆に任せる。それで良いかな？」
「ったりめエだろ！ 俺たちに任せとけっての！」

こう言う時の基は、頼りになるしな。幸仁も口数は少ないけど、リーダーシップあるし。

何より、御神や彰正先生が居るから大丈夫だよな。

なんて考えていると、志藤が俺の顔を真っ直ぐ見つめながら口を開いた。

「……じゃあ……明日……私が働いていない時、デートしよう………」

「ああっ！ ズルイですよ、彩伽さん！」

ズルイ、て。一応、俺はまだ結姫の気持ちは知らない設定なんだけど……。というか、慧以外は那不是。雫と姉さんは例外として……だから、ね？

「……早い者勝ち」

「私も立候補します！」

「わ、私も……つ、罪滅ぼしを、だな」

「やれやれ、ですわ。わたくしを差し置いては困ります」

「オ、オレは……（こによこによ）」

「燈夜、僕と一緒に廻らない？ 色々興味があるんだよね」

「兄さんは私と行く事が決まっていたいました。前世から」

「あらあら」。燈夜ちゃん、モテモテね？ あたしも良いかしら
」？」

「皆落ち着けつてっ！？」

もう何がなんだかつ！？

基と幸仁も、静かにお茶を飲んでるだけじゃなくて止めるよ！
このままじゃ食堂が力オスになるぞ！

それから、少しして。

結論。

「女性って、怖いな……………」

俺は悟りを開いたのだった。

「女性って、怖いな……………」（後書き）

はい、今回は短めでした。

燈夜が悟りを開いてしまった……大丈夫か、この主人公。

てなわけで、文化祭第一日目が終了！ 思ったより短くなってしまったけど、本当に重要なのは2日目と3日目です。いやまあ、退学するというイベントもこれ以上ないほどに重要なんですけどね。

プロットは作っていなくても、小説を書いている内に、「あ、次はこうしようかな」という案は脳内で浮かべるもの。

一応、2日目と3日目の大まかな流れは出来上がりました。ふむ、カオス（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「確信犯かよチクショウっ!？」（前書き）

何気に投稿初めて一ヶ月……。

一日更新、まだ続いてます（驚愕!）。

「確信犯かよチクショウっ!？」

空は、晴天。

心は、曇天。

未来は……雷雨。

「はい、どうぞ」

「……もう一度初めから細かくしつかりとご説明お願いしても宜しいでしょうか」

「だからあ。明日のミスコン、燈歌ちゃんも登録したから参加してねって事だよ?」

「……じゃあ、それは?」

「明日のミスコンの時の衣装」

訂正します。

未来は……暴風雨だ……ッ!!

「ミスコン……ミスコンう……?」

はあ……鬱だ。

文化祭2日目——俺はまず、退学する旨とアルバイトを辞める事を伝えようと向かった。

……間違いない。なのに、俺と顔を合わせてすぐに伝えられたのは、ミスコンに出場して、というお願い。

……俺が着替えている姿とかを盗撮して、ひらひらと写真を揺らしながら頼むのはお願いじゃなくて、脅迫だと思っるのは俺だけじゃないはず。

………ちなみに、今の俺の服装は制服だ。ブラマジナイトの衣装は寮に置いて来た。

「あれ………そういや、結局一緒に廻るとかってどうなったんだ？」

昨日、いつまでも話し合い（？）が終わらなかったから、皆は帰らせただけだ。

………まあ、良いか。静かで。

なんて考えていると、突然背中から強烈な衝撃が………ッ！

「燈夜お兄ちゃん！」

「あたた………あ、結羅ちゃん」

咲之宮結羅ちゃんだ。

結羅ちゃんに向かい合って、ぎゅーっと抱き付いてくる結羅ちゃんの頭を撫でる。

気が付くと、咲之宮家の家族が大集合していた。結姫以外。結姫は今頃喫茶店だろう。

「どうしたの？」

「燈夜お兄ちゃんと一緒に廻りたかったから、探しちゃった」

えへ、と恥ずかしげに笑う結羅ちゃん。可愛い事言ってくれるよ、結羅ちゃんは。

「そっか。どこ行きたい？」

「燈夜お兄ちゃんと一緒なら、どこへでも！」

「あはは……」

随分と懐いてくれてる。それは嬉しいんだけど……。

「……………」

咲之宮家トップの殺気が、凄く肌に刺さるんですね…… それこそ、痛みが具現化されそうなくらいだ。

俺はそれから逃げるように、結羅ちゃんの手を引いて歩き始めた。

アカデミアの構造は、日本の学校とは造りが違う。例えば、1つの巨大な教室に全階級の人間が集まるところ、とか。

だから、このアカデミアで“教室”と呼べる部屋は5部屋のみだ。4年で卒業できるこのアカデミアだからな。1つは予備らしい。

つまり——実質、校舎内には殆ど出し物は無いに等しい。それこそ小さなものしか無いんだ。

「外行こうか」

「うんっ」

確か…… 第五位は喫茶店で、第四位の寮では演劇。第三位がコスプレ場。そこではお客に衣装を貸して、コスプレをさせる場所らしい。

第二位がお化け屋敷。第一位は皆第五位の手伝いに来てくれてい

るから、何も無しだ。

途中、俺と咲之宮家の皆さんはたこ焼きを買って食べながら、個人の出し物が立ち並ぶ道を進んでいた。

「結構美味しいね、このたこ焼き」

「うん。熱くない、結羅ちゃん？」

「少し熱いけど……大丈夫！」

元気だな、結羅ちゃん。第一印象とは大違いだ。

はふはふ、と熱を冷ましながらたこ焼きを食べる姿に、俺は微笑ましく見つめる。そういえば雫も小さい頃……。

「燈夜お兄ちゃん？」

「え？」

「どうしたの？」

……なんか、変な顔してたかな？

「何でも無いよ……。あ、そろそろ結姫が休憩に入る頃だよ。行ってあげな」

「本当っ！？ 燈夜お兄ちゃんはどするの？」

「俺は……ちよつと、1人で行きたいところがあるからさ。結羅ちゃん、結姫を元気付けてあげて？」

「……うんっ、分かった！」

元気良く返事をした結羅ちゃんは、手を振りながら俺に背を向ける。それを追いかけるように、咲之宮ファミリーも歩き出した。

——その時、だった。

結姫や結羅ちゃんの父と母……咲之宮グループの社長と社長補佐

をしている2人が、小声で俺に言った。

「……余り、無理はするな」

「っ……！」

「突き詰めすぎると……倒れてしまいますよ」

……あの2人には、お見通しか。敵わないな。

俺は咲之宮ファミリーを見送りながら、残ったたこ焼きを口に含む。

普通に美味しいな、コレ。

それから、少しだけ時間が経った。とは言っても、20分くらいだろうか？

既に第五位の喫茶店は次のシフトに廻っているだろう。結姫は結羅ちゃんたちと共に楽しく廻っているに違いない。

そんな俺は、第四位の寮の近くまで来ていた。

さっき貰ったパンフによると、後数十分で演劇が始まるらしい。

最近はともかく、仮にも小説を書いていた身。こういうのは結構興味がある。

安い入場料を払い、チケットを貰って中に入る。第五位よりは良いけれど、それでも流石第四位。まだまだ廃れていると言える。

俺は幾つか用意されていた席で、一番後ろに腰を掛ける。

……と。

「居た……っ！」

「ん？」

1人の男性が、俺の目の前まで走ってきた。
なんだ？

「お前……ッ、第五位の一ノ瀬燈夜だよなっ！」

「あ……ああ」

「ちよつと来てくれッ！」

「は……ちよ、ちよつとっ！？」

無理矢理連行される俺。一体なんなんだ。
舞台裏まで拉致され……俺が見たものは。

「し、志藤……？」

「……ん」

志藤彩伽だった。

それだけじゃない。元々フレイヤのコスプレをしていたはずなのに、今は純白のドレスを着ている。それこそ、もうちよつとドレスを変えればウエディングドレスだ。

「え、と……コレは？」

「……演劇する……私と一ノ瀬君で」

「はあ！？」

演劇？ 俺が！？

「ちょ、ちょっと待って……説明してくれよ」
「実は………」

俺を拉致してきた男性の説明によると。

主役である男性は体調を崩してしまった。もう1人の主役である女性は、昨日失恋してしまったらしく、自室に閉じこもってしまった……らしい。

その代役が、ミスコンにも出るアカデミア屈指の美少女、志藤彩伽。丁度今の時間は空いているから、志藤も条件付きでOKを出したと言う。

その条件が、

「……俺とやる事？」
「……………」

こく、と頷かれる。

……まさか、俺が巻き込まれるとは……。

「大丈夫……衣装はある」

「そういう問題じゃないよなっ!？」

「……台本もある………」

「憶えられないから!」

「……………台詞、出してくれる」

「そんなに俺とやりたいか、お前はっ!？」

俺がそう大声を出すと、志藤はあろうことか顔を赤くして俯いてしまう。

……あ、はい。

時間も無いし、拒否権は無いんですね、良く分かります。

「……ストーリーは？」

「ッ……！　一ノ瀬……君？」

「一回だけな。コイツラも困ってるみたいだし、助けてやるよ」

第四位の人たちを指差しながら、俺は溜め息交じりに答える。

志藤も、恐らく第四位の人たちが困っていたから演劇をやる決心をしたんだろう。俺が断つても、志藤は諦めないはずだ。

感情を表には出さないくせに、内心は凄く熱いんだから……コイツ。

「これ、台本です」

——ある豊かな国の姫君、ミリエル（志藤）。彼女は生まれた時から何不自由無く暮らしてきた、生粋の箱入り娘でした。

ある日、ミリエルは外の世界が見たい、と城を抜け出してしまったのです。

そこで出会ったのは、貧困街に住まう1人の少年、コリス。惹かれ合う2人。けれども、2人は決して結ばれる事が有りません。

ミリエルとコリスは、一体どんな恋物語を紡ぐのでしょうか――。

「成る程ね。つまりはあれか、コリスは俺が演じるって事か？」

「……そう」

やれやれだ。

少しボロい布……もとい、服に着替えた俺は台本を流し読みする。

……その台本の途中、だった。

「……なあ、志藤」

「………？」

「……キスシーン、って書いてる気がするんだけど………気のせいだよな？」

「………ぽっ」

「確信犯かよチクショウっ!？」

い、いや落ち着け一ノ瀬燈夜………これは演劇。フリだ、フリ。

数回深呼吸して、再び台本を読みふける。開演まで後少ししかないんだ……。

やるからには、本気を出してやるさ。

『一ノ瀬燈夜ア………？』

『そうだ……。異端者、一ノ瀬燈夜を殺せ。勿論、デュエルモンスターズを用いてだ』

暗闇——暗澹とする空気が蔓延する空間で、低い声が響き渡る。

肌寒さが身体を刺激し、思考能力を低下させる。

舌打ちを零しながら、命令をされた方はわアッたよ、と面倒そうに呟いた。

『命令じゃ、仕方ねエよなア……ま、久し振りに人間を殺せんなら
異端者だろぅがなんだろぅが関係ねエなア……クハッ』

笑いが起こる。

気持ちが悪いくらいの重厚な晒わらいが、静かな空間を支配した。

『待つてやがれよオ……一ノ瀬いたんしゃ燈夜さんよオ………！』

「確信犯かよチクショウっ!？」（後書き）

……凄い展開だ。無理矢理繋ぐ為にまさか演劇をするとは、私も予想外（笑）

ちなみに、演劇のストーリーは昔、私が書こうとしていた小説のネタです。没ネタですが……（汗）

さて、次の話は遊戯王の二次創作、という事実なんて忘れて自由に書こう！（爆）

感想、評価等宜しくお願い致します！

「ずっと、一緒です……………」

「ああ…………貴方は、一体誰なのですか…………？」

「僕は、コリスです。君は、もしかして……………」

演劇が始まって、まだそれほど時間は経っていない。

それと同時に俺の緊張は最高潮だ。幸い、棒読みにはなっていないけど…………それでも、いつボクを出すかは分からない。

台詞を見る為、何度も舞台裏を見なければならぬ俺…………いつかバレルんじゃないか？

「時間です…………私は一度、城へ帰らなくてはなりません」
わたくし

「…………また、会えるかな？」

「ええ、勿論です——また」

「うん。じゃあね、ミリエル」

一度、ミリエル役の志藤は身を引く。

後は、少しの間…………俺の独壇場だ。

台詞は確か……………。

「君は一国の姫…………僕はただの貧民…………好きになる事なんて、許されない」

時折横目で舞台裏に出されている台詞を確認しながら、言葉を紡ぐ。

「けれど、楽しかった…………凄く、楽しかった。君との短く儚い時間は……………」

こんな台詞、言わせるなよ……ッ！

——
逢莉アイリ……………！！

自然と、涙が溢れていた。それこそ本当に、観客が「涙……？」と、小さく呟かなければ自分でも気付けないほど、自然に。

「もし……もしも、君が僕の前から居なくなっても、楽しかった時間を憶えていてくれるのなら、」

憶えていて、くれるのなら。

「俺も……絶対に忘れないから」

しまった……やっちゃった……………。

さっき、無意識にアドリブを入れてしまった……一人称も“俺”だし、本当ならあの時の台詞は、「僕は……君を想い続けるよ」だったはずなのに！

うわぁ……自己嫌悪。

「……大丈夫……？」

「志藤……悪い、失敗しちゃった」

うつん、と志藤は首を横に振る。

「良かった……ドキドキした」

「そ、そうか……」

それはまあ、良かった……のか？

真正面からドキドキした、とか言われると俺もむず痒い感覚に襲われる。

「それにしても、志藤って台詞、全部憶えてるのか？」

「……勿論」

すげえな……志藤も、演劇をやるっていうのはさっき決めたばかりのはずだ。台本を見たのもその時が初めてだって言ってたのに……。

「次、志藤さんです！」

「……行って来る」

「ああ」

ドレスの裾を掴まないように気を付けながら、志藤は舞台へ向かっていった。

俺は台本を見ながら、次のシーンの台詞を流し読みする。流石主演の1人、出番が多い。

とは言え、今は城の舞踏会のシーン。コリスの出番は無い。

「つまらない……」

そう言ったのは、舞台にある豪華そうな（本当に豪華っぽいのが凄い）椅子に腰を下ろした志藤だった。

台本によると、これは心の声らしい。その証拠に、舞踏会自体は滞り無く進んでいた。

「私は、^{わたくし}何故ここに居るのでしょうか……何も、楽しくない……コリス様は今頃、何をしているのでしょうか……？」

普段の志藤とは雰囲気は全く違う。

志藤の表情は、本当に憂いを帯びているように見えた。正直なところ、演技には全く見えない……。

志藤の演技がそれ程上手いのか、それとも——？

「コリス様に、会いたい……王族として、想ってはいけないことなのでしょうか」

志藤……もとい、ミリエルが何度も求婚される。それをやんわりと断りながら、ミリエルは時折憂いを帯びた溜め息を零す。

その憂いの帯びた表情と吐息に、再び心打たれる男性が多数……という、悪循環。

……いやまあ、なんつーか……変にリアルだな、コレ。

志藤の演技が上手いから、特にそう感じてしまう。

——それから、特に失敗も無く演劇は進んでいった。

中盤と後半の間くらいの中途半端な場面。^{コリス}俺と、^{ミリエル}志藤……最大の
見せ場がやってきた。

設定場所はコリスが住む貧困街から少し離れた場所にある大きな公園だ。

「俺は相変わらずのボロい布を着ていて、志藤は真紅のドレスを身に纏っていた。」

「コリス様……コリス様は、私のこと、どうお思いですか？」

「僕は、誰よりも、君を想っているよ」

「私もです、コリス様」

用意されていたベンチに腰掛け、静かな空間が場を支配する。

「けれど、それは駄目なんだ。身分が違うから」

「私は、コリス様を愛しておりますよ」

「僕も愛してる。だけれど、僕たちは……住む世界が、違うから」

身分の違い、なんて俺には分からない。そりゃ、生まれも育ちも日本だったし、実感なんて沸くはずも無い。

「気持ちだけでは、駄目なのですか？」

「気持ちだけじゃ、どうにもならないんだよ、ミリエル姫」

「っ……」

次の瞬間、志藤は俺に抱き付いて来た。志藤の華奢な身体が密着する。

あれ、えと、え！？

こんな場面、聞いて無いぞ！？ 確か次は志藤が、「そうですか……」と呟き、「ですが」、と繋げるはずだったのに！

舞台裏のカンペを見ると、アドリブで続けて！ と書かれていた。んな馬鹿な。

「み、ミリエル姫……？」

「姫、など……要りません。他人行儀のようではないですか」

やっべ、本当に志藤のアドリブが始まった。こんな台詞知りません。

「私は、わたくし コリス様を愛しています…… コリス様の為ならば、父も、母も…… 国も命さえも、投げ捨てる事が出来ます」

「…… 限り、える……」

「貴方と一緒にならば、どこへでも行きましょう。友を捨て、居場所を捨て…… 地の果て、地獄の底へでも行きましょう。貴方の事を…… 愛していますから」

志藤…… お前、まさか、“俺”のことを――？

「ずっと、一緒です……」

そう言っ、志藤彩伽は、俺に口付けを交わした。

そのストーリーの結末を告げるなら、最後、ミリエルとコリスは駆け落ちをした。

これから先、2人の道程は困難の連続だろう。しかし、2人は手を取り合っ、生きて行く――という結末だった。

「志藤……」

「……………」

どうしてキスしたんだ……なんて、野暮な質問はしない。まだ心の整理が出来ていない俺がそんな事を訊いたら、オーバーヒートしてしまう。

……うん、落ち着くまで心の奥底にしまっておこう。

「さっき言った言葉、もしかして……」

演劇が終わり、俺と志藤はチョコバナナを手近くのベンチで休んでいた。

しかし、チョコバナナの他にもリンゴ飴やカキ氷まである……まるで夏祭りだな。

「……一ノ瀬君に……言った」

「……そっか」

チョコバナナを食べながら、俺は沈黙した。

「……私を……」

「え？」

「……連れて行って欲しい」

……………。

「さっき言った言葉……私の、気持ち……嘘偽りは無い」

「……………」

「私は……一ノ瀬君が好き。大好き。愛してる……一ノ瀬君の為なら……友達も、要らない……」

……その考え、雫や姉さんに似てるよ。
けどな、志藤。
それじゃ、駄目なんだ。

「志藤」

「……？」

「お前は、このアカデミアに残って欲しい」

パリッ、と……志藤が食べていたチョコバナナのチョコが割れた。

「ほら、世界の歪みとか、なんか色々起こってんだろ？俺はともかく、志藤は御神に選ばれた“救世主”なんだからな」

「……………救世、主」

「ああ。一方で俺は、御神には選ばれてない。とすれば、他の奴等とは違う俺が情報収集した方が良いだろ？」

正直……世界なんて、どうでも良い。

皆さえ守れば、俺は世界がどうなっても良い。けれど、世界が壊れるイコール、皆も危険、若しくは死んでしまっただ事だ。
皆を守る過程として、世界の歪みとやらも正す。それだけだ。

「ちゃんと帰ってくる。会いに来るからさ」

「……………約束」

「……………ああ」

志藤が出してきた小指に、俺の小指を重ねる。

「……………嘘吐いたら……………私と結婚……………」

「しないからなっ！？」

「……チッ」

舌打ちされた……。

「……絶対……帰ってくる……」
「ト」

志藤がチヨコバナナを口に含んで。

パリッ、と……また、割れる音がした。

「ずっと、一緒です……………」（後書き）

わーい、志藤彩伽のキスだー。

ふう、落ち着こう。

はい、文化祭編の志藤彩伽✓でした。

良くもまあ、あそこまで都合よくアドリブが出来たものですね。書いた自分でも驚きです。

さて、珍しくこの小説で考えてある主人公の過去…………逢莉という名前。

燈夜が“守る”という事に執着しているのは、逢莉の事が強く関係してあります。

読者様が、予想を立てて下さるのも面白いですねっ！

…………過去が出てくるのはまだ結構先の予定ですが。

感想、評価等お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1158y/>

遊戯王 LEGENDs ~ 伝説の名の元に ~

2011年12月2日14時50分発行